

Complete Second Season



THE Peke-Files

**Little Mustapha**

"the Peke Files "

the Complete 2nd Season

Book #2

Little Mustapha

## 主な登場人物

これはシーズン2全体の登場人物紹介なので、全ての話にここに出てくる人物が登場するとは限りません。

### オックス・モオルダア・ムスタファ

FBI（エフビーエル）特別捜査官。天才的推理と「少女的第六感」で数々の難事件を解決：・するのか？ふとしたことから自分が正規の捜査官ではなくてバイトであると知りショックを受ける。特別捜査官の「特別」とはそういう意味だったのか？ そういうこともありシーズン2のモオルダアは自信喪失気味な感じもある。

### ダナア・スケアリー・ザ・プリンセス

モルダアのパートナー。死体を切り刻むのが大好きな検死官。（無免許）常に冷静であり完璧でエレガントであると思っている。たまにはそのとおりになることもあるが、それが高じてうぬぼれにつながることも。またいろいろなことにコンプレックスを抱いているような一面を見せることもある。

### アンタモ・スキヤナー

FBI副長官。モルダアたちに上から指示を出す人。シーズン1では一番偉い人だったが、シーズン2になるとエフ・ビー・エルにはその他の偉い人が出てくるようになり、彼は板挟みの中間管理職みたいな立場になってしまう。一応、モオルダアとスケアリーのことを第一に考えようという気はあるらしい。一応、直属の上司だから。一毛が薄いので髪は短くしている。ハゲを隠さないといういさぎよい一面もあるということ、なの？

## ミスター・ペケ

隠居した怒<sup>ドドメキ</sup>百目鬼<sup>ツママル</sup>鐵円に変わってモオルダアやスケアリーにいろいろ裏情報を教えてくれる謎の人物。ドドメキとは違い常に威圧的な態度でモオルダア達に接する。

## ウイスキー・ドリinkingマン

常にウイスキーをラップ飲み。闇の組織の一員。裏で糸を引く男。色々たくらむ男。(酒がなくなると急に弱くなる?)

## 蔵衣地・A・ロドリゲス

ハーフのような名前だが、純粋な日本人。便宜上たいていの場合「クライチ君」と呼ばれるので、下の名前は どうでもいいのである。

ペケファイルの二人の足を引っぱるだけでなく、闇の組織の手先でもある。ただし常に自分の都合を優先させる性格なので、どこの「闇の組織」の手先になるかは展開次第。

## ローン・ガマン

政府や社会の裏に渦巻く陰謀を暴こうとしている秘密組織。作者の都合で新しく誰かを登場させるのではなく、これまでに登場した人物を起用することにした。

## ヌリカベ君

化学やハイテクに関することに詳しい。無口すぎて必要なことすらなかなか話さない。彼が唯一の「ローンガマン」の正式メンバーである。ヌリカベ君はメンバーが二人以上になると「ローン・ガメン (manの複数形でmen)」に名前を変えなくてはいけないのではないかと考えていて、そうすると名前の由来である「ローンを我慢する」という意

味がなくなってしまふので、彼以外がメンバーにはいることは認めていない。

大学時代は演劇部で死体役や壁の役を専門としていた。常にダークなオーラで人々をゾッとさせる。

#### 元部長

ヌリカベ君のいた大学の演劇部で部長をしていたが、演劇とギャンブルに没頭していたため学業がおろそかになり大  
学を中退する。ちょうど同じ頃大学院を辞めた先輩のヌリカベ君が始めた「ローンガメン」のアジトに居候している。  
得に特殊技能があるわけではないが「演劇じみた演技」は得意である。

#### フロシキ君

詳細は未設定。本家「エックスファイアイル」に合わせるなら「ローンガマン」は三人いないといけないので、そのうち  
三人で登場するかも知れないし、しないかも知れない。

#### エフ・ビー・エルの職員たち

物語の進行上に得に意味がない限り、彼らはエキストラである。エフ・ビー・エルのビルディングで忙しそうに動き  
回っているが、実はそれはただビルの中を歩き回っているだけで、その行動に目的があるわけではない。

#### その他

エピソード毎に紹介。



## #014 「マキシマム・ジュネーティ」

### 1 エフ・ビー・エル・ビルディングのとあるフロア

こんなはずじゃない。こんなはずじゃないのに……。モオルダアの頭の中で繰り返される落胆の言葉。その言葉は他のエフ・ビー・エル職員が彼の目の前にどざりと置いた書類の山に遮られた。

「モオルダア君。これお願いね」

考えを中断されたモオルダアは一瞬戸惑ってその職員の方を見た。

「コピー」

「ああ、コピーですか。お安いで！」

モオルダアが言うのを最後まで聞かずにその職員はどこかへ行ってしまった。モオルダアは気にせず目の前に置かれた書類の山を整理し始めた。

こんなはずじゃない。こんなはずじゃないのに……。モオルダアの頭の中でまたこの言葉が繰り返され始めた。そしてそれはまた遮られる。

「モオルダア君！」

さつきとは違う職員がモオルダアの机のところにやって来て声をかけた。

「この前頼んでおいた、犯人移送の手続き。まだやってないんじゃない？　すぐやってくんないかなあ」

「へい。お安いで！」

絶対に「お安いで！」なんて思っていないのだが、自然とこういう言葉が出てくる。人間は召使いとして扱われることになってしまうと、自然と召使いとして振る舞うように出来ているのだろうか？

ペケファイルが閉鎖された現在、モオルダアはエフ・ビー・エルにおいてはただのバイト。UFOも地底人も美人女スパイも遠い存在になってしまったのだ。こんなはずじゃないのに……。モオルダアは一度目の前の書類から目を離して天井を見上げるとそのまま椅子の背もたれに深く沈んでいった。こんなはずじゃないのに……。

こうしているとまたすぐに誰かがやって来て彼に雑用を押しつけるのはモオルダアにも解っていた。見なくてもすぐに解る。ヒマそうにしているモオルダアを見つけて誰かがこっちに向かってくる気配を感じる。今度はなんだ？　コンビニに弁当でも買いに行かされるのか？　それとも……

モオルダアが感じていたとおり、先程から彼のことをじっと睨めつける人影があるのだが、しばらく立ち止まったまま動かなかつた。モオルダアもいつもと様子が違うと思つて彼に向けられた視線を感じる方を見た。

モオルダアを睨んでいた人物はモオルダアと目が合うと、何を言っているのかほとんど聞き取れないうめき声のような叫び声をあげてモオルダア目がけて突進してきた。

「ン〜モ〜オルダ〜アアア〜！」

この一瞬の出来事にモオルダアはなすすべもなかつた。ただ彼を椅子ごと突き倒してそのまま彼に馬乗りになっているのがスケアリーだということは解つた。

「ご、ごめんなさい」

とりあえず謝つてみたモオルダアだったが、何にたいして謝っているのか彼自身も理解できなかつた。モオルダアの言葉にはまったく反応しないスケアリーは両手でモオルダアのクビを締め上げた。

「あなたが生きている限り、あたくしは絶対に幸せになれないんですのよ！ おわかり〜」  
そういうながらスケアリーはさらに両手に力を入れた。そんなことを言われてもモオルダアには何のことだか解らない。

これは夢なのか？ そうだこのワケの解らない展開は夢に違いないのだ。ただ、おかしいことに夢にしては苦しすぎるのだ。そしてクビを締めているスケアリーの手が小刻み震えているところがあまりにも現実的なのだ。しかし、この状態を夢とする理由が一つある。スケアリーが美人なのだ。次第に薄れていくモオルダアの視界には、前に見た時と明らかに違う美人になったスケアリーがあるのだ。

「スケアリー。なんかキミ、きれいになったんじゃ…」

こう言うとモオルダアは気絶した。

## 2 総合病院の一室

病院のベッドで意識を取り戻したモオルダアは横たわつたまま古びて薄暗い天井を眺めていた。視線は天井に向けられていてもその目に映るのはエフ・ビー・エル・ビルディングで見た美人になったスケアリーの顔だった。「いったい彼女に何が起きたんだ。それからボクはなんでこんなところで寝ているんだ？」モオルダアの頭の中にボンヤリとした



疑問がわいて出てくる。

しばらくすると、病室の扉が開いてスキヤナー副長官が入ってきた。始めから心配そうな顔をしていたスキヤナーだったが、虚ろに天井を見つめているモオルダアを見てさらにその顔を曇らせた。

「おい、モオルダア。何をやっているんだ」

心配だったが、いつもの癖でいつもの台詞を言ってしまった。モオルダアはゆっくりと顔をスキヤナーの方へ向けた。「何って言われても、見れば解るでしょ。ベッドで横になってるんですよ」

まあ、それはそうだ。しかしスキヤナーの聞きたかったのはそういうことではない。

「いったい、何が起きたというんだ？ あれはスケアリーだったのか？ あの事件を目撃した職員は何人かはあれがスケアリーではなかったと言っているんだが。キミはどう思う？」

モオルダアはこの質問にすぐには答えなかった。そのかわりにスキヤナーに聞いた。

「これって夢ですか？ それとも現実ですか？」

これを聞いてさらにスキヤナーは心配になった。モオルダアに近づいて彼の目の中を見つめている。

「おい、大丈夫か？ もしかしてあの騒動のおかげでキミの脳に酸素が足りなくなってる…」

スキヤナーの顔があまりにも近くに接近してきたのでモオルダアは驚いて我に返った。

「うわあ！ なんですすかいきなり」

驚くモオルダアにスキヤナーも驚いている。

「いったい何がどうなったんだ？」

モオルダアが正気を取り戻したようなので、スキヤナーがもう一度聞いた。

「それはボクが聞きたいぐらいですよ。あれはスケアリーですよ。もの凄く美人になってたけど、間違いありませんよ。ボクにあんなことをするのはスケアリー以外にいませんからね」

これを聞いたスキヤナーは言葉を返すのに少し時間が必要だった。どうしてスケアリーはモオルダアを襲ったのか。そしてどうしてスケアリーが美人になってるのか。

「なんでスケアリーがキミを襲うんだ？ まわりにいた職員が彼女を止めなかったら、もう少しでキミは本当に殺されるところだったんだぞ」

「そうなんですか。あんな偉そうにしてる職員たちでも少しは人間らしいところはあるってことですか」

「そういうことを聞いてるんじゃないよ。どうしてスケアリーはキミを襲うんだ？」

そんなことを言われてもモオルダアにも良く解らない。ただ一つ心当たりがあるとすれば、スケアリーがペケファイルの再開を望んでいたということだ。

「原因はペケファイルの閉鎖じゃないですかねえ。それ以外に考えられませんよ。だいたいどうしてペケファイルが閉鎖されるとボクが雑用係にならないといけないんですか？」

「キミは雑用係じゃなくてアシスタントだぞ」

「それは雑用係のカッコイイ呼び方ですよ。それより、そんなことはスケアリーに聞けば良いじゃないですか」

「私もそうしたいんだがね、あの騒動のあと職員達の制止を振り切ってどこかへ消えてしまったということだ」

「そうなんですか？ もしかすると次のターゲットはあなたかも知れませんよ。これは早いことペケファイルを再開させないと大変なことになりますよ」

こう言うとモオルダアはスキヤナーの顔色をうかがっていた。本当はモオルダアだって、いや彼こそが心の底からペケファイルの再開を望んでいるのである。この騒動に乗じてペケファイルが再開されればそれはそれで都合のいい話である。少なくともアシスタントという名の雑用係からは解放されるのである。

「その件についてはまだなんとも言えないけどな。それよりもスケアリーの行方をつきとめる方が先だ」

スキヤナーもモオルダアに対してすまなそうな顔をしていたが、ここはあくまでも慎重にことを進めたいという感じだった。スキヤナーはそのままモオルダアを残して病室を去っていった。

心配していたくせに、去り際は冷たい感じのスキヤナー。ここで一気にペケファイルを再開させたかったモオルダアはスキヤナーを追いかけて、今度は真剣に説得してみようと体を起こしたが、その瞬間後頭部にうっすら鈍い痛みを感じた。彼は体を半分起こした状態のままその場所を触ってみた。後頭部には大きなこぶが出来ていた。多分あの事件で倒された時に後頭部を床に打ち付けたに違いない。それに体を動かしてみても解ったのだが、彼は今自由に動き回れるほどの状態までは回復していないようだった。全ての感覚が深い水の底に沈んでいるようなけだるさが彼の体を押しさえつけているようだった。

絶対にペケファイルは再開されるべきなんだ。そしてボクが新しい美女のパートナーと一緒にスケアリーを探せばすぐにこの事件は解決するんだ。ペケファイルさえ再開されれば全ては本来あるべき状態に戻るんだ。だけど今のモオルダアにはそれが出来そうにない。こんなはずではないのに。モオルダアは諦めてもう一眠りすることにした。

あれから三時間ほど眠って、モオルダアはゆっくりと目を開いた。天井に出来た染みが今度ははっきりとモオルダアの目に入ってきた。さつきよりはだいたいぶ意識がしっかりしてきたようだ。モオルダアが病室の中に人の気配を感じて顔を横に向けると、そこには美人看護師の後ろ姿があった。

なぜ後ろ姿で美人だと解るのか？ それはモオルダアの思いこみだから仕方がない。彼の妄想の世界では彼に関わる女性は全て美女なのだ。

看護師が何かの作業を終えてモオルダアの方を振り返った。美女ではなかった。普通の女性看護師はモオルダアが目覚めたのに気付くと無表情に言った。

「あら、起きたんですか。それなら早いことベッドを空けてくれませんか。今夜から新しい患者さんがこの病室を使う予定ですから」

この看護師は弱り切った優秀な捜査官を前にして酷い言いようだ！ 自称優秀な捜査官のモオルダアはそんな感じで思っていた。

「ベッドを空けてくれて、ボクはもう大丈夫なんですか？」  
これを聞いて看護師はめんどくさそうに答えた。

「大丈夫です。酸欠で気絶しただけみたいですから。頭の傷もありますから一応脳のほうの検査もしましたけど、特に問題もありませんから」

「そうなのかあ。じゃあ、ボクはこの辺で失礼しようかなあ」  
全然優秀な捜査官らしくない感じでモオルダアが言うのと、看護師はいらついた感じでモオルダアの方に向き直った。

「だいたい捜査官のくせに二度寝なんかしてどういうことなんですか。捜査官なら医者に止められてでも無理して事件解決のために病院を飛び出すものでしょ。ドラマでも映画でもみんなそうしてるでしょ。しっかりしてくださいよ！」  
そうやって看護師は病室を出ていった。

「はあ」

看護師の後ろ姿を見送りながらモオルダアが力無く返事をしていった。でもモオルダアは捜査官ではなく捜査官のアシスタントだ。厳密に言うとは雑係だ。「まったくなんなんだ、あの看護師は？」モオルダアはしばらくボーっと看護師の出ていった方を見つめていたが、一度冷静になってさつき看護師の言った言葉を頭の中で再生してみた。

確かにそうなのだ。あの看護士はただの刑事ドラマ愛好者なのかもしれないが、言っていることは正しいのだ。この状況でモオルダアがしそうなことといえば、医者が止めるのも聞かずに部屋を飛び出すこと。映画やドラマのような行動はモオルダアの得意とすることなのだ。そこでモオルダアは考えた。

「もしかして、ボクはバイトの雑用係という立場を理由に小さくなっていただけなのか？ UFOも地底人も美人女スパイも、出会えないのをバイトの雑用係のせいにしていただけなのか？ そうだ、そうに違いない。肩書きがなんであれボクには成し遂げる資格がある。成し遂げる才能がある。そういう星の元に生まれたのだから！」

モオルダアはもの凄く自信家である。妙に自信にあふれた考えに盛り上がってしまったモオルダアが身支度を整えて病室から出ようとしてると、一人の男が入ってきた。

#### 4 ここで気分を変えて、数日前のスケアリーの部屋

いつもなら、優雅にハーブティーを飲んだあと明日の仕事の準備をして静かな眠りにつく時間であるにも関わらず、少し美人になったスケアリーは先程からイライラしながら部屋の中を歩き回っている。一度ソファに座ってテレビのスイッチをオンにすると全てのチャンネルを一周りさせたがすぐに消してしまった。テレビのリモコンを投げ捨てると今度はステレオの電源を入れて音楽を聴き始めた。しかし、それも一曲聞かないうちに止めてしまった。そして、またイライラしながら部屋の中を歩き回った。

「そんなはずはないんですよ！」

スケアリーはこうつぶやいてから立ち止まった。それらか意を決したような感じでキッチンへ向かって高級ワインを持って戻ってきた。コルクを抜いてワイングラスに高級ワインを注ぐと、それを一気に飲み干してしまった。彼女はソファに腰を下ろすとしばらく両手で頭を抱えていた。

一杯のワインとはいえスケアリーにとってはあまりに急激な一杯である。これでやっと彼女のイライラは収まったのか、静かに頭を持ち上げると、今度はペンを持ってきて紙に何かを書き始めた。

変態モオルダアへ

これまであたくしは貴方のことをただの変態だと思っていましたけど、別に貴方を嫌なからだと思うこともなかったんですよ。今のようない気分になったことは一度もありませんでした。だっていくら貴方が変態で無知で非力で身の程知らずであっても、あたくしだって人間ですからこんな気持ちになることはあり得ないんですから。

でも今、あたくしは貴方のことを殺したくて仕方がないんですの。どうしてそうなるのか見当もつきませんけど、何かあたくしには解らない不思議な力が働いている気がしてならないんですの。もしかしたらあたくしは貴方から遠く離れた方が良いのかも知れませんが、それが出来るかどうかはあたくしには解りませんわ。貴方のことを殺したいという衝動がどんどん大きくなって、あたくしの理性を消し去ってしまうような気がするんですよ。

ですからあたくしはこうして貴方へのメッセージを書いてるんですよ。もしもあたくしが明日からエフ・ビー・エルに出勤しなくなっ行って行方が解らなくなってしまうたら、それはあたくしの理性がこの不思議な力よりも勝っていたということですから、どうか心配なさらなくてくださいまし。そして、もしそうなた時には貴方はエフ・ビー・エルを辞めてあたくしの知らない場所で新しい生活を始めていただきたいんですよ。そうすれば、もしあたくしがまた何か不思議な力に操られて貴方のことを殺したくなった時にもあたくしは貴方のことを見つけないことにはできないんですから。

本当に短い間でしたけれど、あたくしは変態の貴方と一緒に理解不能な事件を捜査できてホントに良かったと思いますわ。ホントですよ。あたくしはペケファイルって…、

ここまで書いたところでスケアリーの手が動かなくなりました。彼女は動かなくなりました手動かさそうとして渾身の力を込めてみたが、手はまったく言うことを聞かない。いくら力を入れてみても彼女の手は細かく震えるだけで動こうとしない。

しばらくの間は動かない手と葛藤していたスケアリーだったが、抵抗を続ける彼女の手に根負けしたのか、彼女は自らペンを放り投げた。そして机の上のワインのボトルを掴んでそのままラップ飲みをみると、彼女は甲高い笑い声を挙

げた。

両目を見開いて笑い声を挙げるスケアリーはさっきまでとはまるで違う人になっているかのようだ。それからスケアリーはこれまで書いていたモオルダアへの手紙を手に取ると、それをビリビリに破いてしまった。その破かれた手紙を陶製の皿に載せるとそれにマッチで火をつけて全部燃やしてしまった。

燃えた紙くずを見てスケアリーはまた笑い始めた。そしてそのまま笑いながら彼女の部屋を出ていった。

スケアリーの高級アパートメントには彼女の不気味な笑い声が響いていた。「オホホホホ！ オホホホホ！」  
スケアリーは靴も履かずにどこかへ向かって歩いていった。

## 5 意味もなく気分を変えてしまったけど、今度はさっきの病室の続き

モオルダアが身支度を整えて立ち上がるうとした時、病室に一人の男が入ってきた。スーツを着たその男が病院の関係者でないことはモオルダアにもなんとなく解った。見た感じでは三十代前半だろうか。この男は病院の関係者でもなければエフ・ビー・エルの職員でもないであろう。その顔にはまっとうな仕事をしてきた人間特有の苦労と倦怠と疲労がにじみ出ている。それから僅かながらの狡賢さも。

男は部屋に入ってきて来るなり聞いた。

「あなたはエフ・ビー・エルのモオルダアさんですね？」

「そうだけど」

病室を飛び出してスケアリー事件の捜査に向かおうと思っていたモオルダアは出鼻をくじかれて、少し気分が悪かった。

「実はどうしても捜査していただきたいことがあるんです」

「捜査だったらボクには出来ないよ。それはエフ・ビー・エルの正式な捜査官に頼まないとだめだよ。ボクはAだからね」

「A？」

男が聞き返したがモオルダアには答える気もないようだ。Aとは多分アシスタントのAのことだろう。モオルダアはそのままゆっくりと立ち上がって病室を出ようとした。

「ちょっと待ってください！ 私はエフ・ビー・エルの相談窓口であなたを紹介されたんですよ」

エフ・ビー・エルの相談窓口ってなんだろう？ モオルダアはそんな相談窓口など知らなかったが、多分あるのだろう。男は先を続けた。

「私がそこで話をしたら、それならモオルダアという優秀な捜査官がいるからその人に頼めばいい、と言われてここへ飛んできたんです」

優秀な捜査官といわれてモオルダアは解りやすく顔色を変えた。うれしきで口元がゆるまないよう気を付けながらまたベツトに腰掛けた。

「それなら仕方がないな」

モオルダアの口元は明らかにゆるんでいたが、男は特に気にしていないようである。

「それで何を捜査したいんだね？」

モオルダアがちよつと得意げな感じで男に聞いた。

男の名前は中場仁正ナカバニマサユキという。彼がモオルダアに捜査して欲しいこととは彼のフィアンセの市後双江イチゴフタエに関することだった。彼の説明をここまで聞いたモオルダアは一度中場の話すのを遮って聞いた。

「もしかして、ボクにフィアンセの身辺調査とかさせる気じゃないですよ？ それはボクの好みじゃない。たとえ途中で殺人事件が起きたりとか、謎の組織にそのフィアンセが追われてたりしても、ボクは探偵みたいなのはしないんだ。ボクはあくまでも優秀な捜査官だからね」

中場は少し驚いたが、いたって冷静にモオルダアに説明した。

「それは知っています。あなたは優秀な捜査官です。それから以前はペケファイルを担当されてたんでしょ？ だからあなたを頼ってきたんですよ」

「つまりあなたのフィアンセが宇宙人かも知れないということ？」

モオルダアの暴走が始まりそうである。

「そうじゃありません。これは言葉で説明するより写真を見せた方が早いですね」  
そう言って、中場はモオルダアに一枚の写真を見せた。そこには中場のフィアンセである市後双江が写っていた。それを見たモオルダアは何かを言いかけたが、口を開く前にその言葉を飲み込んだ。モオルダアの反応を確認した中場がもう一枚の写真を見せた。

「これが一年前の双江です」

その写真を見て、もうモオルダアはワケが解らなくなってきた。もしこの二枚の写真に写っている女性が同じ人物だというなら、これはもうペケファイル級の謎なのである。モオルダアは言葉を失って、ただ中場の方を見ているだけだった。

「もうおわかりでしょう？」

中場が言った。

「ボクのフィアンセ、市後双江は結婚が近づくにつれでどんどんブスになっていくんですよ」

二枚の写真に写った双江の顔に驚きながらも、モオルダアは自分の婚約者のことを「ブス」と平気で言う中場には少しあきれていた。

中場は双江に起こったこの異変について調べてもらいたい、と言っているのだ。これはエフ・ビー・エルが捜査すべきことなのだろうか？ 女性の顔が短期間ですっかり別人のようになってしまったのだが、それは事件なのだろうか？ こんな事件よりはスケアリーの消息を知る方がずっと大事だということはモオルダアにも解っていた。しかし彼はバイトの雑用係。彼が望んだところでスケアリーの捜索はやらせてもらえないだろう。もしも仮に彼が単独でスケアリーを探すとしても、彼には移動に使う車がない。人手がない。その前にお金がない。二枚の写真を見比べてしばらく考えていたモオルダアは結論を出した。「とりあえず、給料が出るまではこの捜査をすればいいや。そうすれば雑用係の仕事はしなくてすむし。スケアリーのことはその後だな」なんだか知らないがもの凄く楽観的な結論が出たようだ。

「解りました、中場さん。あなたのフィアンセに何が起こったのか調べてみましょう」

「そうですか、それは良かった。とりあえず双江に関する資料はエフ・ビー・エルに提出してありますから、それを見てください。ホントにねえ。出会った時にはすごく美人だったのに。あんなブスと結婚とかしたら影で何を言われるか解ったもんじゃありませんよ。ねえ、そうでしょ？ モオルダアさんだって嫌でしょ？」

やっぱりこの男は気に入らない。モオルダアは適当に作り笑いをしてそれを返事の代わりにした。



## 6 エフ・ビー・エル・ビルディング

マリッジブルーかな？ いやマリッジブルーであったとしても、それで顔が変わるか？ それもないとも限らない。ブルーになって長い間深刻な顔をしてたらそのうちに眉間にしわが出来て…。でもこの顔の変化はしわの多い少ないで説明できるものでもないしなあ。

モオルダアは中場の提出した双江に関する書類を眺めながら考えていたが、だんだん面倒になってきた。やっぱりこんな捜査は引き受けなければ良かったなあ。雑用よりはマシだけど。

その時、モオルダアは彼に近づいて来るものの気配を感じていた。「残念でした。ボクは今捜査中だから雑用なんか出来ないんだよ」モオルダアが頭の中でこう言ってから、目の前の資料をペラペラとめくり始めた。捜査をしていることが相手に良く解るように。

「モオルダアさん」

彼に近づいてきた男がモオルダアに声をかけた。

「悪いが今は事件の捜査で忙しいんだ。細かい仕事は他に頼んでくれよ」

「いや、そうじゃないんです」

意外な返事にモオルダアはその男の方へ目を向けた。どこかで見た男がモオルダアの横に立っている。

「キミは確か…」

「ええ、前回ちよつとだけ登場しました。それで予告どおり今回も登場です」

ああ、そうか。この男はモオルダアにパソコンの使い方方を教えた男だ。（解らない人は前のエピソードの最初の方を読みましょう。）この中途半端にさわやかでギリギリのところまで二枚目な青年は尊敬とか畏敬とかいったものを含ませた視線をモオルダアに投げかけている。

「今度の事件と一緒に担当することになった蔵衣地クライチと言います」

モオルダアにはこの男の言っていることが良く解らなかった。

「事件って？ 誰と？」

「あれ？ 聞いてないですか？ あなたと一緒にその事件を担当するんですよ。まあ言ってみればボクらはパートナーですよ」

「聞いてないよ、そんなこと。というかこの人たちは大抵のことを教えてくれないからねえ。…そんなことはどうで

もいいか。せっかくだけど、この事件はボク一人でじゅうぶんだよ。キミの助けを借りるまでもないよ。クライチ君  
本当は助けがないと何も出来そうにないのだが、相手が美人捜査官でなかったのでモオルダアはガツカリなのだ。

「そんなこと言ってもだめですよ。これは上からの命令ですから」

「上」って誰のことだろう？ スキャナーかな？ モオルダアは少し疑問に思ったが、そんなことは考えるだけ無駄。  
文句を言ったところでクライチ君が美人捜査官になるわけでもない。

「それじゃあ、クライチ君。さっそく捜査に出かけるとしようか」

「良かった！ やつと状況が解ったみたいですね」

この一言はなんとなくモオルダアの心に引っ掛かったが気にしないことにした。この男もこの男でどこか普通とずれて  
いるに違いない。この、世の中とは大きくずれたところに存在しているエフ・ビー・エルの捜査官なのだから。

数分後、エフ・ビー・エル・ビルディングの前に車を止めて待っているクライチ君のところへモオルダアがやって来  
た。モオルダアは車のすぐ近くまで来たが乗り込みはしなかった。代わりに開いていた窓からクライチ君に言った。

「悪いけどキミ一人で行ってくれないかなあ？」

「行くなってどこへですか？」

「おい、捜査官のくせに良くそんなことを聞けるなあ。双江さんの勤めてる会社に行っている調べるんだよ。優秀  
な捜査官ならまず最初にそうするはずだぞ」

優秀な捜査官とはもちろんモオルダア本人のことである。ただしその優秀な捜査官の捜査方法は間違っている気もする  
のだが。それはクライチ君にも解っていた。

「いきなり会社に押し掛けてダイジョブなんですか？ だいたい、この捜査のことは双江さんに知られないようにって、  
中場さんから言われてるんでしょ？」

「それはそうだけだね。でも双江さんはほとんど外回りで会社にいることは少ないそうだし。キミだってこう言う時に  
優秀な捜査官がどうやって聞き込みをするか知ってるだろ？」

「とうとう？」

「他の用件で来たように見せかけたり、時には変装も必要だと言うことだよ」

モオルダアは言いながらクライチ君とはウマが合わないようだ、と思っていた。だいたい、この世の中のどこにモオル

ダアとウマの合う捜査官がいるというのだろうか？ そんなことは考えるだけ無駄だ。

「それで、モオルダアさんはどこに行くんですか？ 本当はそういうことはあまり良くないと思うんですが、まあモオルダアさんが必要だと思うんだったらそれに従いますよ。でも、ボクもあなたの行き先が解ってないと何かの時に困りますよ。ボクはパートナーなんですから。行き先だけは教えてください」

「ん？ そうねえ。ボクは中場さんに会ってもう一度話を聞いてみようかと…ね」

明らかに嘘っぽい返事をしたモオルダアだったがクライチ君は「そうですか」とうなずいた。

モオルダアはそのまま車の向いているのは反対の方向へと急ぎ足で歩いていった。クライチ君はその後ろ姿を見送りながら、不適な笑みを浮かべていた。彼が本当はどこに行こうとしているのか、彼には解っているかのようにだった。クライチ君はそのままゆっくりと車を発進させた。

## 7 スケアリーの高級アパートメント

スケアリーの高級アパートメントから数ブロック離れた路地から夕闇にまぎれてそのアパートメントを覗き見る怪しい人影がある。その人影は一度アパートメントの方を確認すると小走りに1ブロック進みそこでまた路地に隠れた。そしてもう一度アパートメントの方を覗きこんだ。それから同じようにしてまた1ブロック分アパートメントに近づいた。こんなことをするのはモオルダア以外に考えられない。そしてそれは予想どおりモオルダアだった。

スケアリーの高級アパートメントの前までやって来たモオルダアは少し安心したように入り口まで進むとインターホンの所でスケアリーの部屋の番号を押した。モオルダアはどうしてここへやって来たのか。それは彼にも良く解らない。例の少女的第六感というやつだろうか？ それとも病院で看護士に言われたことに影響されたのだろうか？ そのどちらでもないのだ。彼はスケアリーが彼を殺害しようとした時の顔が忘れられないのだ。クビを閉められて意識がなくなりそうなのも気付かせないぐらいに美人になってしまったスケアリーの顔が。モオルダアの心の中の表現では、それはハツとするような美人の顔だったのだ。

行方不明のスケアリーの部屋からはなんの返事も無い。モオルダアはそのままアパートメントの裏に回ると排水パイプに手をかけて登り始めた。もうこれは以前にやっけるからモオルダアにとっては慣れている動作だ。また窓からスケアリーの部屋に入ろうというわけだ。なぜそんな面倒なことをするのか？ 管理人に事情を話して鍵を開けてもらわな

いのはどうしてか？ そんなことを気にしてはモオルダアの行動は理解できない。彼のしていることは全て（彼の思いこんでいる）優秀な捜査官の行動なのだから。

モオルダアは排水パイプを登ってスケアリーの部屋のベランダに辿り着いた。以前は大きな窓には全部鍵が掛かっていて、モオルダアは小さな窓から苦労して中に入ったのだが、今回は違っていた。ベランダに出入りするための窓に鍵が掛けられていない。

美女の行方を追うためにここへ来たモオルダアであったが、ここでようやく「少女的第六感」が働き始めた。彼には嫌な感じがしたのだ。「もしかすると、ボクよりも先にエフ・ビー・エル別の捜査官達がここへやって来たのかも知れない」そう思いながら、モオルダアは部屋の中へと入っていった。

そこはモオルダアの知っているスケアリーの部屋とはほど遠い有様だった。以前そこにはきれいな家具がならび、全ての生活用品はきちんと整理されていて床にはホコリ一つ付いていなかった。しかし、今彼の目になっているのはそんな潔癖的な部屋ではない。何本ものワインのビンが散乱していて、その中の何本かは倒れて僅かに残った中身を床に垂れ流している。それから脱ぎ捨てられたままの衣類がソファの上や、椅子の背もたれにかかっている。このまま一ヶ月もこういう状態が続けば、この部屋はモオルダアの地獄的に汚い部屋と同じになってしまうかも知れない。

モオルダアはこの状況に戸惑いながらも、何か面白いものはないか辺りを探し始めた。なぜ面白いものを探して、重要な手掛かりを探そうとしないのか？ そんなことはモオルダアに出来るはずがない。重要な手掛かりなどモオルダアには見つけれないのだ。でも面白いものならなんでも見つけれられる。だからモオルダアは、事件が異常である時に限れば本人も気付かぬところで優秀なのだ。

モオルダアは部屋を一回りして面白い手掛かりを探したが、それらしいものは見つからなかった。しかし、モオルダアにも気になる面白くないけど重要そうなものを見つけた。皿の上に紙を燃やしたような灰がのっている。これは、異様な感じだったスケアリーがモオルダアに宛てて書いた手紙を燃やしたものだ。モオルダアはそんなことを少しも知らない。ただ紙を燃やすという行為はそこに書かれた何かを消したいということを意味しているのかも知れない。となるとモオルダアは興味津々。ポケットから懐中電灯を取り出してそれを照らすと顔を近づけて、そこに何が書かれていたのか読みとれないか確認してみた。灰はまだ紙の形を残していたが、一度何枚にも破かれてから燃やされたのが解った。所々に文字が幽かに見えるのだが何が書いてあるかは解らなかった。「なんだ残念」モオルダアがそう思った時だった。

玄関で鍵を開けるような音が聞こえてきたのである。モオルダアは驚いて顔を上げたが、それと同時に激しい鼻息を吹き出していた。その鼻息で原型をとどめていた灰は粉々になって舞い上がった。モオルダアは一瞬だけ後悔したが、今はそれどころではない。玄関にやって来たのはスケアリーだろうか？　もしかして正気に戻ったスケアリーならこの状況でもなんとかなるかも知れない。しかし、そうでなかったら？　モオルダアに勝ち目は無い。モオルダアは辺りを見回すと、最初に目に入ったクロゼットを開けてみた。そこには大人でも入れそうなスペースがある。モオルダアは慌ててそこに隠れた。怯える子供みたいに。

モオルダアはクロゼットの中から様子をうかがっていたが、玄関ではまだ鍵を開ける音が続いている。それはただ鍵を開けているのではなくて、こじ開けているという感じだった。しばらくその音が続いていたがやがて鍵のはずれる大きな音がして誰かが中に入ってきた。それはどうやらスケアリーではなさそうだ。二人の男が部屋の中に入ってきた。

「ホントに見たのか？」

「はい、確かに」

「でもないじゃないか」

二人の男はこんなことを言いながら部屋に入ってきた。

「もしかして何も無いということが解って出ていったんじゃないですか？」

一人がベランダへ出入りする空けられたままの窓のところに言っそう言った。

「確かにここには何も無いようだな。あつたとしてもあの捜査官に見つけられるはずがない」

「私たちも戻った方がいいようですね」

「そうだなエフ・ビー・エルが来たら厄介だ」

二人はそう言っ部屋から出ていった。

二人の気配が消えるとモオルダアはクロゼットの中で懐中電灯を点けた。いったいあの二人は誰だったんだろう？　二人の話から察すると、どうやらエフ・ビー・エルの捜査官ではないようだ。「また変なのが出てきたなあ」モオルダアはここにやって来た謎の二人が誰なのか考えてみたが、そんなことはすぐに解るはずがない。考えるのに飽きたモオルダアはクロゼットの中を見回してみた。するとすぐにまだ新しいスーパの袋を見つけた。何気なくそれを手にとつて中に入っていた薬ビンのようなものを取り出して見た。「ビューティー・アップ・サプリ」という文字が目に入って

きた。まさかこれで？ そんなことはあり得ない。サプリメントで美人になれるのなら、世の中美人だらけだということとはモオルダアにも解る。だが、面白そうなのでモオルダアはそのビニール袋をこっそり持ち帰ることにした。

モオルダアが来た時と同じようにベランダから排水パイプをつたって下まで降りたちょうどその時、再びスケアリー部屋のドアが開いた。それは失踪したスケアリーの捜査に来たエフ・ビー・エルの捜査官だった。

## 8 エフ・ビー・エル・ビルディング内の狭い部屋

モオルダアとクライチ君は机の上に置かれたものをじっと眺めていた。モオルダアは多少困惑しているようだったがなるべくそれを表に出さないように努めていた。机の上には「ビューティー・アップ・サプリ」のビンが置かれている。それはモオルダアがスケアリーの部屋から持ち帰ったものではないのだ。クライチ君が証拠品として持ち帰ったものだった。

いったいどういうことだろうか。同じものを使って一人は美人になり、一人はそうでなくなった。そんなことはありそうもないのだが、これはどうにも気になる。しかしモオルダアがスケアリーの部屋に行ったことはクライチ君には内緒なので、彼は盛り上がる気持ちを必死に押さえていた。

「クライチ君。キミはこれが原因だとおもうの？」

「今のところ有力なのはそれ以外にないですよ。会社の人たちにもいろいろ聞いたんですけどねえ、特に双江さんの様子がおかしいとかそういうことはなかったみたいです。まあ、そのまま帰ってくるのもあれなんで、双江さんの机の上にあったそれを証拠として持ち帰ったということですけどねえ。ところでモオルダアさんのほうはどうだったんです？」

モオルダアは目の前の薬ビンのことで頭が一杯だったために、思わずホントのことを言ってしまうそうだったが、危ういところで一度口を閉じた。それからぎこちなく話し始めた。

「ああ、ダメだった。というか中場さんは忙しいから今度にして欲って言ってたよ」

「それじゃあ、今まで何を…」

クライチ君が言いかけたところで彼の携帯電話の呼び出し音が鳴った。クライチ君はモオルダアに気付かれないようにガツカリしてから電話に出た。

「はい、もしもし。はい。そうですが。ああ、それでしたら今担当者に変わります」

そういうとクライチ君はモオルダアに電話を差し出した。

「あなたにです」

モオルダアは良く解らないまま電話に出た。

「もしもし、担当者ですけど」

担当者ってなんだ？ 彼にも解らないのだがクライチ君の様子からすると彼が担当者みたいなのでモオルダアも自分が担当者であると決めてしまったようである。

電話の相手は明らかに怒っている。

「いったいどういうことなんだ！ どうして双江が殺人事件に関わってることになるんだ？」

電話は中場からのようだ。しかしどうしてこんなに怒っているのかモオルダアには見当もつかない。

「あの中場さん。落ち着いてください」

「双江がねえ、泣きながら私に電話してきたんですよ。今日の昼間、会社に警察が来て殺人事件の捜査と言って双江のことをいろいろ聞いていった、って言うんですよ。それで双江が会社に帰ると、そのことで上司や重役にいろいろ問いつめられて。もしかすると双江は会社をクビになるかもって」

「中場さん。そんなことはあり得ませんよ」

モオルダアは素晴らしいながらクライチ君の方を見た。クライチ君はモオルダアと目を合わせない。

「そんなことはあり得ない、ですって？ それじゃあ双江はどうしてあんなに取り乱していたんですか？ あの電話が演技だとも言えますか？ 双江はねえ、そんなことが出来る人間じゃないんですよ」

「なんだか知りませんが、それは何かの間違いです。確かにボクは優秀な捜査官として優秀なパートナーを双江さんの会社に行かせましたけど、殺人事件なんて……」

ここまで言ったモオルダアはなんだかイヤなことを思い出してしまった。彼はクライチ君にこう言っていないなかったか？ 「他の用件で来たように見せかけたり、時には変装も必要だと言うことだよ」と。クライチ君はそれを最悪な形で実行したということか？

「もういいですよ。この件はなかったことにしてください」

電話の向こうで中場が半分あきれた口調で言っている。

「そもいけませんよ。これはエフ・ビー・エルの扱う事件ですから途中でやめることは…」  
モオルダアが最後まで言う前に電話が切れた。普段はなかなか怒らない、というか怒るほど敏感ではないモオルダアもこの時ばかりは怒らずにはいられなかった。

「おい、クライチ！ キミはいたい…」

せつかく怒ったモオルダアだったが、それは部屋に入ってきたエフ・ビー・エル職員によって遮られてしまった。

「モオルダア捜査官。スキヤナー副長官が呼んでますよ」

水を差されるとモオルダアの怒りはすぐに収まる。ハイハイ、とモオルダアはスキヤナー副長官の待つ13階のオフィスへ向かうべく立ち上がった。その後ろ姿を見てからクライチ君は一度時計を見てからモオルダアに声を掛けた。

「あの、モオルダアさん。ボクもう定時すぎてから帰りますね！」

モオルダアはまた少しムツとしたが、もうどうでもよくなっていった。それよりもモオルダアは時給のバイトだから定時で帰ると給料が減る。そんなことを頭の中で再確認していた。

## 9 どこかの山の中

ここは人里離れた山の中にある一軒の別荘。夏の間は避暑に来る旅行者でにぎわうこともあるのだが、夏の行楽シーズンが過ぎるとこの辺りにはほとんど人影が見られなくなる。冬になればこの山は辿り着くのさえ困難になるほどの雪に覆われるのだから。

秋もほとんど終わりに近づいたこの山の中の別荘の前にはスケアリーの車が止まっている。それはきちんと駐車する気などまったくなかったかのように道路とも建物とも関係ない方向へ斜めに止められていた。そして車のドアは開けられたままだった。

スケアリーがこんな感じで車を止めることがあるのだろうか？ しかし、今の彼女はまともではないのだ。彼女に何が起きたのか。そして彼女はこれからどうなるのか。きっと別荘の中にスケアリーはいるはずである。そこで彼女は何をしているのだろうか？



10 エフ・ビー・エル・ビルディング、13階

やばい。やばい。絶対に怒られる。そう思いながらモオルダアは13階にあるスキヤナーのオフィスに向かっていた。スキヤナーに怒られるぐらい大したことはないのだが、バイトの雑用係になった最近、モオルダアはなんだか自分の立場が凄く弱くなったように思えてならないのだ。それにペケファイルは再開されそうもないし、スケアリーはおかしくなって失踪してしまうし、突然パートナーになったクライチ君はいい加減だし。このままではエフ・ビー・エルでの彼の立場はますます弱くなっていくばかりである。

こういう状況をどうやって切り抜けたらいいのか考えていたモオルダアであったが、彼にそんな器用さはない。少なくとも彼が知恵を絞って考えることは現実世界ではほとんど通用しないのだ。彼が優秀なのはあらゆる偶然が重なって彼に味方する時だけ。彼は運だけで生きているのだ。

いくら考えてもこの状況への対処法は思い浮かばない。モオルダアはとりあえず怒られる前にこっちが怒ってみよう、と良く解らない作戦を考えた。「怒るって、いったい何を？」そんなことは解らない。モオルダアはスキヤナーのオフィスの扉に手を掛けて一度躊躇したが、思い切って扉を開けた。

「いったいどうなっておるのですか！ これでは捜査もなにもありませんではありませんか！」

全然意味が解らないが、モオルダアは普段から怒ることに慣れていないので、演技でだって怒れるはずはない。モオルダアのおかしな様子に啞然としているスキヤナーを見て彼はさらに続けた。

「あれはいったい何なんですか！」

モオルダアは怒っているフリをしながらも、何について怒っているかぐらいは決めておけば良かった、と思っていた。

「これとかあれとか、全然意味がわからんぞ、モオルダア」

スキヤナーに言われて、モオルダアは少しの間返す言葉がなかったが、とりあえずここは彼のあまり動かない偽りの怒りにまかせて話すしかなさそうだ。

「ええと。ですから、あれですよ。そう。あの捜査官。クライチ君はいったいなんだって言うんですか？」

「クライチ君でキミと今回の事件の捜査をしている人だろ？」

「そうですね。あんな役立たずをボクのパートナーにしたのは、あなたなんですよ？」

スキヤナーはモオルダアが見当違いの相手に腹を立てているのに気付いたのかだんだん不機嫌になってきた。

「そんなことは私の知ったことじゃないよ。それにいったいどういうことだ？ 私がキミを呼んだのにいきなり怒った

りして。失礼じゃないか！」

「あれ、そうなの？ クライチ君はあなたの指示でボクのところに来たんじゃないの？」

「エフ・ビー・エルには私の他にも偉い人がいることぐらいキミも知ってるだろう？ そんなことより、キミに会いたいという人がさっきから隣の部屋で待っているんだがね」

怒られないように、逆に怒りながら入ってきたモオルダアだったが、そんなことは全然意味のないことだと解った。スキャナーがモオルダアを呼んだのは怒るためではなく来客を知らせるためだったようだ。スキャナーの見つめる先にはガラス越しに一人の女性が座っているのが見える。

「なんだろう？ ボクのファンかな。エへへッ」

モオルダアは決まりが悪そうに気味の悪い笑いを浮かべながら隣の部屋へつづくドアを開けた。

## 11

部屋に入るとその女性が市後双江であることはすぐに解った。彼女は一点を見つめるわけでもなく見つめてじっと座っている。「これはまずいことになった…」モオルダアは再び困難な状況に立たされた。さっきはただの勘違いだったが、双江がここに来ているということは本当にまずいことになったに違いない。とりあえず謝罪するしかない。モオルダアは後ろ手にドアを閉めるなり言った。

「このたびはまことに遺憾であり心外でありつつも、これは全て新人捜査官クライチの責任でありまして、私モオルダアめはなにもいたすところなくして…」

怒る時も変だったが謝罪はまったく意味をなしていない。双江は少し困惑した感じで一度モオルダアの方を見たが、すぐにまた視線を元に戻した。

「あなたモオルダアさんですね？」

双江はモオルダアの方を見ずにこういった。この声の感じからするとそれほど「まずいこと」にはなっていない感じがした。まさか、モオルダアの謝罪が功を奏したのか？ それはあり得ない。

「まあ、そうですけど」

モオルダアは少し安心して双江とテーブルを挟んだ向かい合わせの椅子に腰掛けた。

「中場がそうしろって、あなたに依頼したんでしょ？」

「ええ、まあ」

モオルダアは生返事をしながら双江の顔を覗き込んでいた。その顔は中場が「ブス」と言っていた写真の顔と同じものだった。しかし、この顔を「ブス」というのは少し酷すぎる。確かに中場に見せられた一年前の写真に比べたら美人ではないが、それは普通の顔だ。好みによっては全然オツケーな顔だ。モオルダアは双江の顔を覗き込みながらそんなことを思っていた。

「でも、そんなこと捜査するだけ無駄ですよ。私の顔は今あなたが見ているとおりです。一年前もそれよりも前も。ずっとこの顔なんです」

モオルダアは自分が双江の顔を覗き込んでいることがばれていたので、慌てて目をそらした。しかし、双江の言うことは真実なのだろうか？ それでは中場に見せられた一年前の写真はどうなるのだろうか？ モオルダアが疑問に感じていることを悟ったのかは解らないが、双江は冷ややかな感じで話し始めた。

「あなたも中場と同じなんです。あの人、私の顔が最近急に不細工になったと思ってるんでしょう？ あの方は私に隠してるみたいですが、そんなことは私にだつてすぐに解りますよ。あんなサプリメントを飲ませたりして。あんなもので私が美人になるはずありませんよ。ホントにバカなんです。あの男は」

完全に双江ペースで話が進んでいる気がしたがモオルダアには特に言うこともなかったもので、そのまま彼女のペースで話がつづくのもやむを得ない。そんな感じであったがモオルダアは一応聞いてみた。

「あの、そのサプリメントってビューティー・アップ・サプリのことですか？ あれをあなたに渡したというのはおかしいですねえ。中場さんはあなたには絶対に知られないように捜査してくれ、と私に言ったんですよ」

「だったら、私に知られないように捜査してくれたいじゃないですか？」  
モオルダアは痛いところをつかれたようである。しかし双江はそれほど気にしていない。

「別にいいですよ。どうせ捜査したところでなにも解決しませんし。それに私、あの方が私に関していろいろ調べようとしてることも前から知ってましたし」

「それ、どういうこと？」

モオルダアは双江が思わせぶりな感じで喋っているのですすがに苛ついてきた。

「あの方はなんにも解ってないんですよ。一年以上も一緒にいるくせに。それはこういうことです」

そうやって双江はカバンから携帯電話を取り出すと携帯についているカメラのレンズを自分に向けてその手を顔の斜め上に持っていった。しばらくレンズの向きを微調整した後、シャッターを切ったことを知らせる電子音が鳴った。

「こういうことなんですよ」

双江はたった今カメラに撮った携帯の画面に映る自分の顔をモオルダアに見せた。その写真を見たモオルダアはハッと目先の前の双江とカメラの中の双江を見比べた。

「これで解ったでしょ？」

こう双江に言われてもモオルダアはまだ信じられないといった感じだった。

「このカメラは最新技術で作られてるのか？」

モオルダアの反応はまったく的はずれだったが、双江はそれを冗談だということにして先を続けた。

「その角度で撮ると、私は美人に写るんですよ」

「ああ、そういうことか」

モオルダアはもの凄いカメラを発見したと思っ盛り上がっていたが、やっとカラクリが解ったようだ。それに気付いてもモオルダアの驚きには変わりはない。携帯に映されている双江の顔は中場の持つてきた一年前の写真とまったく変わらない美人の写真なのだ。ただ、これだけではいろんな事の説明にはならない。

「写真のヒミツは解りましたけど、それじゃあなたにも説明できませんよ。どうして中場さんは一年以上もあなたの本当の顔に気付かなかったんですか？」

モオルダアが聞くと双江は一度顔を下に向けて穏やかな微笑みを浮かべてからモオルダアの方に向き直った。

「それは、恋が盲目だからですよ」

「つまり、中場さんの目にはあなたが実際以上に美しく見えていた、ということですか？」

そういうながら、モオルダアには納得がいかなかった。フィアンセが「ブス」になったから結婚できないとまで言っていた中場に関しては絶対「恋は盲目」なんてことはあり得ないのだ。モオルダアは何かを言いたげにしていたが、肝心の言葉が出てこない。それを見ていた双江が言った。

「本当は私にも責任があるのかも知れません。実を言うと私あの人のこともう好きじゃないんです。出会った頃はよかったですけどねえ。お互いがお互いに夢中って感じで。あの人は今でもそうみたいですけど、私はもう全然あの人の興味がありません。私のあの人に対する熱が冷め始めていた頃から、あの人は私の本当の姿が解るようになったん

じゃないかしら」

「ということは、二人がお互いに熱々でないと「恋は盲目」は成り立たないということなのか？ モオルダアにはよく理解できない感じの話である。」

「私、あの人に初めて会う前にメールで写真を送っておいたんです。もちろん美人に写る角度で撮った写真です。それを見てあの人はずでに私に夢中だったみたいなんです。それで私も会ってみると、結構優しいし、お金も持ってるし。私たち、すぐに良い感じになったんですよ。でも優しいのは始めだけで、あの子の嫌なところはいろいろ見えてくるし、それ以上の良さといったらお金ぐらい。いっそのこと別れてしまったけど、そろそろ私も年齢的にリミットでしょ？ ほら、適齢期とか、勝ち組とか負け組とか。そんなのになるのは嫌だから、とりあえず結婚ということになって、したらあの子がこんな捜査を依頼するものだから。ホントに男の人ってどうしてこうなのかしら」

モオルダアは黙って聞いていたことを後悔した。双江が長く喋っていたのでモオルダアにはなんの話だか解らなくなってきた。

「ということは、あなたは結婚したくないけど中場さんと結婚したいということですね。でもそうになると中場さんがあなたのことを美人だと思えないことで都合が悪い、という感じですよねえ」

「そういうことです。だからあなたからあの子にうまいこと説明してくれませんか？ 私はもう愛なんていりませんから。とりあえず形だけ結婚したらあの子の財産で楽しくやっていきますから」

モオルダアはだんだん気分が悪くなってきた。男が男なら女も女だ！

「あの、そういうことは我々のすることじゃないですよねえ。捜査しているのはあなたの顔の謎で、その謎が簡単に解けてしまった今ではこの捜査はもうおしまいです。後はあなたの方がなんとかしてくださいよ」

そう言いながら、モオルダアは自分で体中の力が抜けていくのを感じていた。そして言い終わる頃にはすっかりうなだれていた。双江が何かモオルダアに向かって酷いことを言いながら出ていったような気がしたが、それすら気にならない感じでモオルダアは机に座ったまま床を見つめていた。

モオルダアがうなだれているところへスキヤナーが入ってきた。今度は多少怒っているような感じだったが、モオルダアが椅子に座ってうなだれているので彼にはなんだかわけが解らないことになっていた。

「おい、いったい何があったんだ？ あの人が怒って出ていこうとするから声をかけたら、あの女、うるせえハゲ！とか言っ出ていったんだぞ。おい、モオルダア。いったいあの人に何をしたんだ？」

モオルダアはスキヤナーの声にゆっくりと反応して彼の方を見た。

「副長官。世の中の関節はガタガタですなあ」

「なんだそれは？」

「ガタガタだけど、それでもちゃんと繋がっていることになっていて、そんなふうにいるんな事をごまかしながら前に進んでいるんです」

何のことだか全然解らなかったが、スキヤナーにはモオルダアが柄にもなく落ち込んでいることだけは解った。

「どうでもいいが、ちゃんと解るように話してくれないか？」

スキヤナーにこう言われてモオルダアは一度考えをまとめるのに少し間をとってから話し始めた。

「さっきの女の人、双江さんっていうんですけど、捜査の依頼をしてきた婚約者の中場って人は双江さんがブスになった原因を彼女に知られないように調べて欲しかったんですよ。でも本当は恋が盲目で双江さんには何も起きていなかったんですが、双江さんはもう一度中場を恋で盲目にしろって言うんです」

まとめすぎて全然ワケの解らないことになっているが、スキヤナーはなんとなく解ってきた気がした。

「それで？」

スキヤナーが続きを聞いた。

「それで？ って言われてもだいたいそんな感じですが。双江さんはエフ・ビー・エルをなんだと思ってるんでしょうねえ？ なんでボクがそんな二人の仲を取り持ちたりしなくちゃいけないんですか？ それもあんなドロドロした二人の仲を」

「まあ、それもそうだなあ。だいたい、なんでキミがそんなことを捜査してたんだ？」

「そんなの知りませんよ。相談窓口でボクが紹介されたということですけどねえ。これはきつと陰謀なんです」

モオルダアがなんとなく口にした「陰謀」という言葉で、なんだか急にモオルダア本人が盛り上がってくる感じがし

た。そうだ、確かにこれはおかしい話だ。

「きつと、こういうことですよ。ボクにスケアリーの搜索をさせないために誰かが意図的にこんな厄介な事件の搜索をボクにやらせたに違いない！」

スキヤナーがモオルダアがなぜか元気になってきたので少し安心したが、彼の意味不明な被害妄想みたいな考えも気にかかる。

「キミが望んでもスケアリーの搜索は他の捜査官にやらせることになってたから、そういうことはないんじゃないか？ だいたいキミはスケアリーに狙われている立場なんだぞ」

「副長官。ボクは優秀な捜査官ですよ。たとえ上司に止められたって力づくで搜索をする優秀な捜査官なんですから」モオルダアの妄想が暴走し始めている。

「だいたい今スケアリーの搜索をしている捜査官は彼女の行方が解ったんですか？」  
「彼らは今、全力で搜索を続けている」

スキヤナーは毅然としてモオルダアを見据えた。

## 12.2 (スケアリーの部屋)

捜査官1——なあ、なんかあったか？

捜査官2——なんにもないよ。もう面倒だから帰んねえ？

捜査官1——そんなこと言ったって、手ぶらじゃ帰れねえだろ。

### 12.3

「全然やってないじゃないですか！」

「あれ、本当だねえ」

スキヤナーはちよつと困ってしまった。しかし、ここはもう一度彼らを信じてみよう。きっと何かの手掛かりを見つけてるはずだ。

### 12.4

(スケアリーの部屋)

捜査官2——おい、ちよつと見てみるよ。タンスの中に凄いのがあったぜ。

捜査官1——なんだそれ、下着か？

捜査官2——そうだよ。凄いだろこれ。あの人こんなの着てるんだな。

捜査官1——そのセクシー大胆下着が何かの手掛かりになるかな？

捜査官2——なるわけないだろ！

捜査官1——それもそうだ！ アハハハハ！

### 12.5

「これはもうボクに捜査をまかせるしかなさそうですねえ」

モオルダアにこう言われてスキヤナーは返す言葉がなかった。彼はしばらく黙ってうつむいていたがやがてモオルダアを見て言った。

「よし、こうしよう。私はキミが単独でスケアリーの捜査をすることに関しては目をつむろう。そしてそこで何か問題



が起きたなら私は出来る限りキミに協力する。それでどうだ？」

「うーん。ついでにペケファイルも再開してくださいよ」

「それはどうにもなあ…。それじゃあ、私が幽体離脱をした時の話を聞いてくれたら再開してあげるがね。どうだ？」  
幽体離脱の話ってなんだか解らないが、きつと知ってる人は知ってるだろう。でもモオルダアはそんな話を聞くのは面倒だった。

「それよりか、ボクが無事にスケアリーを見つけたらペケファイル再開、というのはどうですか」

「幽体離脱の話は聞きたくないのか？ いい話なのになあ。でもまあいいか。じゃあそれで交渉成立だ。しっかり頼んだぞ！」

見る見るうちにモオルダアにやる気がみなぎってきた。彼がスケアリーを見つける。そうすればペケファイルが再開されるだけではなく、パートナーはあの美人になったスケアリーだ。しかも密かにセクシー大胆下着を持っているスケアリーだ！

モオルダアは颯爽と部屋をあとにした。

### 13 どこかの山の中の別荘

ここはスケアリーの車が止まっていた別荘。それほど大きくないログハウスのドアは外から開けられないよう扉の内側に本棚が倒された状態でおかれています。そして、これから訪れる雪の季節に備えて全ての窓は板で打ち付けられてほとんど外からの光は入ってこない。この状況でここに入るのにも、それからここを出ていくのもかなり苦労しそうな感じだ。ログハウスとはいえ、そこは今ではちょっととした監獄とさえ思える光景である。

この簡易牢獄のちょうど真ん中あたりにスケアリーが倒れている。体を横向きにして両腕は胸の前にと投げ出されている。その腕の少し先には注射器が落ちていた。きつとそれはスケアリーに使われたものだ。スケアリーの上着の袖が片方だけヒジのところまでめくれている。何を注射されたのか解らないが、スケアリーは意識を無くしてこの暗いログハウスの中に一人で倒れている。

スケアリーの顔はいまだにモオルダアを襲った時の美しさを残していたが、頬がこけて、目は大きく落ちくぼみその周りに影を作っていた。生気が失われている。今のスケアリーにはこの言葉が見事に当てはまった。

## 14 ローンガマンのアジト

ここはコンピュータや化学の実験道具や何に使うのか良く解らないむき出しの電子基板が沢山ならんだ薄暗い部屋。そこに薄汚い男が三人集まってなにやら調べているようだ。その三人のうちの一人はモオルダアである。残りの二人もどこかで見たことがある。

残りの二人は以前にモオルダア達が捜査で訪れた大学の演劇部のOBヌリカベ君と部長だ。ヌリカベ君は以前の事件でスケアリーに協力した時に世間には絶対に知られない大きな陰謀があるということに気付いてしまったのだ。それでヌリカベ君は自らをローンガマンと名乗り、その陰謀を暴くために日夜活動しているのだ。大学院では優秀な学生であり優秀な学者としての将来も約束されていたのだが、そんなものは全てなげうってこの薄暗い部屋にこもって活動を続けている。ローンガマンとは、彼がこの部屋にある機材を揃えるために借金をしたので、それを返すまではいろんな贅沢をガマンする、という意味で付けた名前だ。演劇部時代は死体の役と壁の役専門だったヌリカベ君は何かに取り憑かれたようなダークなオーラを発していつでも周囲の人間をゾクッとさせる。

一方部長の方はというと、あれから演劇と競馬とパチンコばかりやっていて学業の方はさっぱり。ついに大学は中退して俳優になることを決意したのだが、世の中はそう甘くはない。お金も仕事もない元部長はこの薄暗い部屋に居候しているのである。もちろん彼も以前の事件には関わっているのだ、何か怪しいことがこの社会の裏側で行われていると思っっているのだ、自分もローンガマンに入れろと言っているのだが、ヌリカベ君はあまり乗り気ではないらしい。だってローンでガマンしているのはヌリカベ君だけで元部長はなにもせずに時々バイトで稼いだ金でパチンコをして楽しんでいるのだから。

そして残るもう一人。自称優秀な捜査官モオルダアであるが、彼はなぜここに居るのだろうか。実はヌリカベ君は以前の事件で何が起きたのかを知りたくてペケファイルの捜査官に話を聞こうとしたのだが、あの事件のあとスケアリーにフラれてしまって彼女に電話をかけるのは気まずいということでモオルダアと連絡を取ったのだ。そこでモオルダアはあることないこと、彼の妄想の中で起きている様々な陰謀をヌリカベ君に話した。ヌリカベ君も興味津々でその話を聞いていた。そんな二人は意外と気が合うようで何かが起こればモオルダアはヌリカベ君に協力してくれるように頼んでおいたのだ。それが今、というわけである。

「ヌリカベ君。まだなの？ もうさつきから何回も同じことやってるみたいだけど」

モオルダアは待ちくたびれてヌリカベ君に聞いたが、ヌリカベ君はなににも答えない。彼らの真ん中にある机の上には「ビューティー・アップ・サプリー」が二つ置かれている。一つはモオルダアがさっき薬店で買ってきたもの。もう一つはスケアリーの家にあつたものだ。

「同じことをやっているように見えても、それぞれに意味があるんですよ」

なにとも言わないヌリカベ君の変わりに元部長が答えた。

「なんでキミがそんなことを知ってるんだよ？」

「だってボクは、言ってみればヌリカベ君の通訳みたいなもんだからね。というよりスポークスマンという感じかな。こんなに役立っているのにヌリカベ君はボクをローンガマンのメンバーとして認めてくれないなんて。まったく酷いよ」

「それはどうかなあ？」

モオルダアはあまり興味が無いといった感じでヌリカベ君の方に向き直ると彼に言った。

「ヌリカベ君。頑張ってくれよ。キミの憧れのスケアリーは今とっても美人なんだぞ」

そういわれてもヌリカベ君は無反応で作業を続けていた。しかし、しばらく経つた後ヌリカベ君が手を止めてからゆっくりとモオルダアの方を見てから言った。

「スケアリーさんは前からずっと美人です」

そう言ってまたゆっくりと実験装置の方に向き直って作業を続けた。モオルダアと元部長は思わず身震いをしてお互いの目を合わせた。

しばらくして、ヌリカベ君に異変が起こった。机の上の紙をとって見ていたかと思うと、それを素早く元に戻して今度はコンピューターの方へ行き何かを調べるとまた今度は別の紙を見て、ということを何度も繰り返していた。その動きはまるでロボットのようなだった。ヌリカベ君は何か異変に気付くといつでもこういう動きになるようだ。

モオルダアと元部長は不思議そうにヌリカベ君を眺めていた。するとヌリカベ君の動きが止まった。それからまた例のごとくゆっくりと彼らの方へ体を向けて言った。

「出ました」

「出たって何が？」

モオルダアが聞くと、ヌリカベ君は持っていた紙をモオルダアに渡した。そこにはモオルダアにはとうてい理解できない化学式がたくさん書かれていた。

「なんだよ、これ？」

そういつてモオルダアはヌリカベ君に紙を返した。ヌリカベ君はしばらく紙を見つめていたが、何かに気付いたようにうなずいてからこう言った。

「スケアリーさんならすぐに理解したでしょうけど、あなたはそれほど優秀じゃないんですね」

モオルダアはちよつとムツとしたが、ここで腹を立てても仕方がない。黙って続きを聞くことにした。

「。が、ヌリカベ君はなかなか話し始めない。

「だから、これはなんなのか説明してくれないか？」

しびれを切らしたモオルダアがヌリカベ君に聞いた。

「ああ、そうですね。この分析結果が示していることは、同じ入れ物に入っている錠剤ですけど、中身はまったく別物ということですよ」

それを聞いたモオルダアは確かな手応えを掴んだという感じで目を輝かせた。

「つまり、ボクが買ってきたものは偽物の粗悪品でスケアリーの持っていたものが本物と言うことだね」  
それを聞いていた元部長も盛り上がってきた。

「それじゃ、その本物の方をボクらが飲んだらボクらはチョコレートメンのイケメンガマンになれるってことですね？」

「そうかも知れないぞ」

元部長とモオルダアが事件とは関係ないところで盛り上がり始めている。

「モオルダアさん。ちよつと飲んでみましようか？」

「飲んでみたら、いいかもよ？ キミ、グズグズしてないで水を持ってこないと。水で沢山いっきに流し込んでしまった方がね」

「そうですね」

元部長が立ち上がって台所へ向かおうとした時、やっとヌリカベ君が彼らを止めた。

「それは違います」

あまりに時間が経っていたので、ヌリカベ君は何に対して違うと言ったのか良く解らなかったが、二人とも止まってヌリカベ君を見た。

「偽物はスケアリーさんの持っていた方です。もう一つの本物はただのビタミン剤です。申し訳程度にコエンザイムが

入ってますけど」

「なんだそうなのか」

元部長はガツカリして元のところに戻った。一方モオルダアはヌリカベ君のこの言葉で何か妙な胸騒ぎ、つまり「少女的第六感」が働いたのか急に深刻な表情になっていた。

「それじゃあ、スケアリーの持っていたその錠剤はなんなんだ？」

モオルダアはこれまでとはうってかわって真面目な感じでヌリカベ君に聞いた。聞かれたヌリカベ君は無表情で答える。

「これはエッフエッフエドリンの錠剤です」

「エッフエッフエドリン!？」

このおかしな薬品の名前にモオルダアの頭の中はエッフエッフエとなっていたが、ヌリカベ君は黙ってモオルダアに向かっとうなずいただけだった。しかし、その目には先程までには見られなかった鋭さが感じられないこともなかった。

## 15

ヌリカベ君がエッフエッフエドリンに関して説明を始めた。

「この薬物はエッフエドリンによく似ている興奮剤ですが、そんなものよりもっと危険なんです」

モオルダアはこの危険な薬物についてさらなる情報を得ようとヌリカベ君のことを真剣な顔で見ている。∴。が、ヌリカベ君の説明はこれで終わってしまったようだ。

「それだけなの？」

無口にも程がある、という感じでモオルダアがヌリカベ君に聞いたがヌリカベ君はそれ以上話そうとしない。

「それじゃ、ここはボクが続きを説明しよう」

元部長が代わりに話し始めた。彼が何を知っているのか解らないが、これまでの話だけでは情報が少なすぎるのでモオルダアは黙って聞いた。

「このエッフエッフエドリンは終戦間際に軍が開発した恐怖の薬物なんだ。何に使うかという、まあいわゆるドーピングですね。エッフエドリンがドーピング薬ということは有名ですが、それよりも強力なエッフエッフエドリンは兵士の身体能力を高めるために開発されたんです。しかし、そこには落とし穴があったんですよ。実験としてある部隊に支給

される食料にエッフエツフエドリンを混ぜてみたところ、その後しばらくその部隊は素晴らしい活躍をみせました。ところが、何週間かすると部隊の隊員達が暴力的になってくる。始めは部隊内での小競り合いで治まっていたものが、次第にエスカレートしていき最後には殺し合いにまで発展しました。そして、とうとうその部隊は全滅したということです。部隊内の殺し合いでね」

モオルダアは感心して元部長の話を聞いていたのだが、どうして元部長がそんなに詳しいのか気にもなっていた。

「ところで、どうしてキミはそんなに詳しいことを知ってるんだ？」

元部長は立ち上がって戸棚から薄っぺらい冊子を持ってきてモオルダアに渡した。

「そんなことはローンガマンの機関誌に全部載ってますよ」

それはどうやらヌリカベ君が資金集めのために発行しているものらしいが、ほとんど売れていない。しかし、この部屋でやることのない元部長は発行された全てを熟読していたのだ。

モオルダアは渡された機関誌をめくるとすぐにエッフエツフエドリンに関する記事が見つかった。そこにはエッフエツフエドリンの実験台にされた部隊の隊員達の写真というのも掲載されていた。これを見てモオルダアは少し驚いて、独り言のように言った。

「なんだこれ。みんな草刈○雄みたいじゃないか!？」

「そうですよ。それがエッフエツフエドリンが起こすもう一つの副作用です」

「恐怖のイケメン部隊かあ…」

モオルダアは良く解らない感心の仕方をしていた。しかし頭の中では別のことも考えていた。確かに、これまでの話をスケアリーの異常な行動、そして容姿の変化に当てはめてみても納得のいく説明になっている。しかし、この陰謀ミアの青年達の手による機関誌をそのまま信じてもいいのだろうか？

「このままだとスケアリーさん大変です」

モオルダアの中に沸き上がる疑問を遮るようにヌリカベ君が静かに言った。そうなのだ。確かにこうしている間にもスケアリーがどんどん凶暴になっていって、誰かを殺害したりすることもあり得るのだ。

モオルダアはグズグズ考えるはやめにして、ローンガマンのアジトを後にした。しかし、どこへ向かえばいいのだろうか？ スケアリーはどこに行ったのだろうか？ それよりも、何か胸のどこかにつかえている感じがする。モヤモヤしている。なぜモオルダアは気付かないのか不思議だが、まともな人間ならすぐにその胸につかえているものに気付く

だろう。少なくとも捜査官なら。

しばらく歩いてモオルダアは駅前のお店街までやって来た。彼の目の前にはドラッグストアがあった。中を覗き込んでみると、サプリメントの棚の前で学生風の女性が友人同士で今流行りの商品を物色中だ。それを見てモオルダアはさらにモヤモヤしてきた。そしてやっと大変なことに気付いたのだ。モオルダアはポケットから携帯を取り出すとどこかへ電話をかけた。

## 16 エフ・ビー・エル、スキヤナーのオフィス

スキヤナーが受話器を取るとモオルダアの今にも裏返りそうに慌てた声が聞こえてきた。

「大変なことになりましたよ。ビューティー・アップ・サプリは危険です。今すぐビューティー・アップ警報を発令してください。エツフェツフェドリン入りの、というか中身がまったくエツフェツフェなものが出回っているんです。それを飲んだのがスケアリーだけかと思ってたんですが、よく考えたら他にも飲んでる人がいるはずなんです」

「ほう、そうか。それは良かったな」

スキヤナーは素っ気ない感じで答えた。というより「良かったな」とはどういうことだろうか。

「ちよつと、聞いてるんですか？」

「それじゃあ、なるべく早く報告書を提出しなさい。今日はもう帰って良いぞ」

まったく会話になっていない会話を無理矢理終わらせて、スキヤナーは受話器を置いた。受話器が置かれる瞬間までそこからモオルダアの「？」という声が漏れていた。

スキヤナーが受話器を置いた直後、部屋にウイスキーのビンを開ける音が響いた。

「誰からだね？」

ウイスキーがそう聞いてから一口飲んだ。

「どうやら、事件が解決したらしい」

「電話はモオルダアからかね？」

「ええ、まあ。そういうことです」

スキヤナーの受け答えがぎこちない感じになっている。

「キミは何か隠していないかね？」

ウイスキー男にこう言われたスキヤナーは一瞬まじりかと思つたのだが、なんとか平静を装つた。それから、仕方がないので真面目な視線を真っ直ぐにウイスキー男の方へ向けた。ウイスキー男はそれが気持ち悪いと思つたのか、それともその視線が意味する何かを感じ取つたのか、そのまま無言でオフィスを出ていった。

それを見送つたスキヤナーは大きく息をついてからどこかへ電話をかけるため受話器を取つた。

## 17 モオルダアの汚いアパートの近く

モオルダアは先程ロソングマンのアジトを後にしてからボンヤリと何かを考えながら歩いて、そのままボンヤリと電車に乗つて、ボンヤリと自分の家の近くまで来てしまつた。自分の部屋に戻つたところでも出来ないのだが、それ以外になにもすることが思いつかない。あのビューティー・アップ・サプリがある種の覚醒剤だつたからといって、それがスケアリーの居場所を知るための手掛かりにはならない。いったい何をすればいいのやら。スキヤナーは良く解らない感じだし。もう一度スケアリーの高級アパートメントに行つてみるか？ いや、あそこには今エフ・ビー・エルのやる気のない捜査官がいる。それじゃあクライチ君に相談してみるか？ それはダメだ。あの男にこんな面白い話を教えるわけにはいかない。これはモオルダアだけが手に入れた恐ろしい情報だ。ドラッグストアで売っているサプリメントをスケアリーが買つたら、その中身が恐ろしい薬物だつたなんて。そんなことはあの怪しい新米に教えるわけにはいかない。しかし、どうしたら良いのだろうか？

モオルダアは、ずっとそんな感じで歩いて自分のアパートのすぐ近くまでやつて来た。すると、夜の暗闇の中から一人の男が現れてモオルダアの前に立ちはだかつた。

「いいかね、モオルダア君。我々がこうして会つていただけでも私にとっては危険を伴う行為なのだよ！」

闇の中から現れた男はいきなりモオルダアに向かつて言った。ボンヤリと考えながら歩いたモオルダアは驚きのあまり腰が抜けそうになつた。腰が抜けるなんてことはあり得ないと思うかも知れないが、モオルダアは腰が抜けるタイプの人間なのだ。

「なんでですか急に？」

モオルダアが驚きのあまり優秀な捜査官らしくない口調で聞いた。男はそれを聞いていたのか、いなかったのか良く解



らない感じでモオルダアに大型の封筒を差し出した。ちよつとビビっていたモオルダアは差し出されたものをなんとなく受け取ってしまった。それからその封筒を開けて中にあるものを取り出してみた。

中には十年以上前に発行された雑誌が入っていた。それは「熱血投稿」というエロ本だった。それを見てモオルダアはなんとこの男がどんな人間なのか解った気がした。モオルダアは、いつでもいきなり現れているんな裏情報を教えてくれるドドメキさんのことを思い出していたのだ。ドドメキさんも一度彼に男性向けの雑誌を渡したことがある。そして引退したドドメキさんは言っていた。私に変わってもっとアクの強い男が現れる、と。

「あの、これ嬉しいんだけど、こう言うのはボクの趣味に合わないんだよね。この雑誌はちよつとエグいでしょ。ボクはもつとソフトで…」

モオルダアが言うことも聞かずに男は話し始めた。

「その中にキミに必要な情報は全てある」

やはりそう来たか、と思いつながらモオルダアは男の方を見た。暗闇の中にキラキラと光る目がモオルダアを見据えている。確かにアクの強い男だ。しかも渡された雑誌もエグい。

「そうじゃなくてボクはもつと美女中心のグラビアが好みなんだけど…」

「私は私が必要だと思ったことをキミに伝えるだけだ。それ以上の危険は犯したくない。これからは必要時に現れる。キミはそれ以上のことを詮索してはならない。いいな」

男はこう言っていたが、モオルダアは渡された雑誌をペラペラめくっている。男の言葉がモオルダアに届いていたかは解らない。モオルダアは雑誌のページをめくりながら言った。

「しかし、この人はあれだねえ。これでアイドルとは、よく言えたもんだ。こんなのはその辺にいくらでもいる…」  
そういながらモオルダアが顔を上げるとそこにはもう誰もいなかった。謎の男はいきなり現れていきなり消える。

モオルダアはとりあえずその雑誌を持って自分の部屋へ帰った。

## 18 薄暗い部屋

ウイスキー臭い部屋にクライチ君と何人かの男達が集まっている。

「やっぱダメなんじゃないっすか？ このままじゃペケファイルも再開かも知れませんかよ」

クライチ君がそういうと、それを聞いていた男達の一人が手に持っていたウイスキーのピンを一度口へ運んでから、静かに答えた。

「そうならないためにわざわざキミを使っているんだよ」

ウイスキー男の口調には多少あきれたような感じもあった。

「そうは言ってもですねえ、最初から失敗じゃないっすか。スケアリーがモオルダアを襲うところまではよかったですけど、モオルダアは助かるし、スケアリーはどこかへ消えてしまって、一般人を襲うようなことはしませんでしたよ。それで苦し紛れにボクにいろんな事を押しつけられたんじや、こっちもやってられないっす」

クライチ君のこの態度に周りの男達は眉をひそめていたが、ウイスキー男だけは落ち着いていた。

「そうかね。どうやら私はキミをかいかぶっていたのかも知れないねえ。私はキミを見た時から、キミにはモオルダア以上の才能を感じていたんだがね。そんなキミでもモオルダアには……」

「ちよつと待ってくださいよ」

ウイスキー男が言い終わる前にクライチ君が言った。クライチ君はモオルダアとはよく似た感じで意味もなくプライドが高い。それから自分を優秀な何かと思いきこんでいる。

「別に私に出来ない、と言っている訳じゃないですよ。全然ユウっす。まかせてくださいよ」

そうクライチ君が言うのを聞いて、ウイスキー男は目の奥にどんよりとした笑いを浮かべていた。

## 19 モオルダアのボロアパート

モオルダアは帰ってから謎の男に渡されたエグい雑誌を最初から最後までくまなく読んでみた。巻頭の見たこともないアイドルのグラビアからあまりにも根暗な感じの投稿写真、それからホントかどうか怪しい体験談。どこにもモオルダアに必要な情報があるとは思えなかった。しかし、それ以外にこれといってやるべきこともない。モオルダアはもう一度最初から雑誌を読み直してみた。

「こんなものはヤラセだよなあ」

なんだかモオルダアの興味が別のところに移っているようだ。読み直してみてもこの感想以外なにも出てこなかった。もう面倒になったのか、モオルダアは雑誌を放り投げてテレビのスイッチを入れた。

時刻はもう午前二時を過ぎていた。こんな時間にろくな番組はやっていないし、この状況でテレビを見ようというモオルダアの考えもおかしいのだが、彼にはそれなりの理由があった。もう彼の頭の中は飽和状態でも考えられそうになかったのだ。だからテレビが見たくてテレビをつけた訳ではない。ほとんど無意識のうちにテレビをつけた彼は、ただボンヤリとテレビの画面を眺めていたかったのである。そうしているうちに何か閃くかも知れないし、少女的第六感が何かを彼に伝えるかも知れない。それに、もしかすると「凶暴化した美女軍団が人々を襲撃する事件」のニュースとかがやっているかも知れない。

モオルダアはリモコンをいじって一通りチャンネルを確認したが、やっているのはテレビショッピングばかり。モオルダアはテレビをつけたまま横になった。

まったくおかしな事件だなあ。それにおかしな一日だ。スケアリーに襲われて、病院では変な看護師に説教されて。それからあの変なカップルはどうなったんだろう？ 一応あの事件は解決したことになったけど、怒って帰ってしまっただ双江さんはどうしたんだろう？ まあ、あれはあれでいいや、ボクの知ったことじゃない。問題はスケアリーなんだ。美人化したものの凶暴になっていつか殺人を犯すかも知れないスケアリーだ。どこへ行ったかスケアリー。何をするかスケアリー。優秀なボクならすぐにでも見つけられるはずなのに、なぜか今回は調子が出ない。もしかしてボクの意見にいちいち口出しするスケアリーがないからなのか？ そうだとするとこれは厄介だなあ。ジレンマだなあ。まいったなあ…。

モオルダアは横になったままダラダラと考えていた。しかし、その後テレビから聞こえてきた言葉に反応して我に返ると、飛び起きてテレビのボリュームを上げた。

「発売以来、爆発的な人気のビューティー・アップ・サプリ。ご好評にお答えして、当番組だけの特別価格でご提供いたします。さて、このビューティー・アップ・サプリの実力はどの程度のものなのか。こちらのVTRをご覧ください」なんとこの偶然だろうか。モオルダアは今日何度このビューティー・アップ・サプリを見てきたか。ただし、それによつて何かの手掛かりが得られるとは限らないのだが、モオルダアは直感と運と少女的第六感だけでやっている。それに偶然が重なればそれはそれで良いことになるのかも知れない。

ビューティー・アップ・サプリに関する大げさすぎるVTRが終わって、再びスタジオが映された。

「さて今日はスタジオにこのビューティー・アップ・サプリを開発した、元女優で現在ではビューティー・アップ社の美人女社長でもある一芽実田塗黄子<sup>ヒトメ、ミタ、キコ</sup>さんをよんでいます。まず始めに聞いてみましょう。一芽実田さんはご自身でもこ

のビューティー・アップ・サプリを利用してその美貌を保ってらっしゃるんですよね？」

一芽実田はこの後司会者の質問に答えていった。それはビューティー・アップ・サプリの開発に関する話。それから女優時代の苦勞話と、そこからビューティー・アップ・サプリを作るきっかけになった出来事の話。ホントかどうかかわからない話にはモオルダアも興味はなかった。話の間、カメラは遠くから近くから一芽実田を映してその美貌を視聴者に見せつけていた。美貌といっても、年の割にはという言葉をつけなければそれほど美人というわけではないのだが、アップに耐えられるぐらいの美貌ではある。

モオルダアはテレビに釘付けになっている。しかし、彼は一芽実田の美しさに見とれているわけではない。どこかで見えた顔。どこかで聞いた名前。モオルダアがそれが誰だか思い出すまでにそれほど時間はかからなかった。

モオルダアはそれに気付くと、慌てて床の上に無造作に置かれていたエロ本を拾った。それから巻頭のあまりかわいくないアイドルのページを見た。「ちまたで噂の女子高生アイドル、美田時子<sup>ミダトキコ</sup>」と書いてある。そこに写っている美田時子の顔はテレビに出ている一芽実田塗黄子によく似ている。モオルダアの持っている雑誌は十五年前のものだ。十五年もあれば顔つきも変わるだろう。そうでなくても美容整形というのものもある。もしかするとエッフエッフエドリンということもあり得る。問題はエッフエッフエドリンの副作用である「美形になる効果」がどれだけ長く持続するのか、ということだ。もしこの一芽実田がエッフエッフエドリンを使っているのなら凶暴化しているはずだが、このテレビで見ると限りそんな気配は感じられない。ただし、この美人女社長は今回の事件と関係しているに違いないのだ。それだから謎の男はモオルダアにこの雑誌を渡した。もし関係なかったら、あの男はなんなんだ？ ということになってしまう。とにかくモオルダアには解決の糸口が見つかった気がした。そこからたどっていけばスケアリーの行方が解るのかどうかは解らないあいまいな糸口ではあるのだが、とにかく朝になったら一芽実田を訪ねないといけないようだ。「それにしても、あの男は雑誌だけ渡しといてなにも言わないなんて、不親切なヤツだなあ。今夜のこのテレビショッピングのことぐらい教えてくれてもいいのに」と、モオルダアはついでに謎の男のことを愚痴ってみた。

## 20 朝

モオルダアの部屋の小さな窓から入ってくる太陽の光でモオルダアは目を覚ました。テレビは夜からつけっぱなしで、今は主婦向けのドロドロした感じの番組が爽やかに放送されている。モオルダアは日の光に眩しそうにしながら片目で

時計を見た。「しまった！」もうすでに九時を過ぎていた。モオルダアは飛び起きてテレビを消すとそのまま外へ出た。その頃、エフ・ビー・エルビルではクライチ君がモオルダアを探してあちこち行き来していたが、彼が来てないことが解るとしばらく何かを考えていた。しばらくして、何かの結論に達したのか、そうでないのか解らないが一人で小さくうなずくとどこかへ向かった。

## 21 駅前

モオルダアは急いで駅前の広い通りを歩いていた。通勤ラッシュのピークはどうに過ぎてそこにはあまり人影がない。歩いているところから駅の階段までが良く見渡せるのだが、モオルダアは駅の方からこちらへ向かってくる人物に気付いた。今この人物に関わるのはあまりにも面倒だ。しかし、その人物はモオルダアを見つけると彼の方へ近づいてきた。

どうやら気付かないふりも出来ないようだ。この人物は明らかにモオルダアに会うためにこの駅で降りたに違いない。モオルダアは向こうで小さく手を振る中場の方へ向かって軽く会釈をした。いったいなんの用があるというのだろうか？ 中場は双江さんが美人に戻らなかったことに関して苦情を言いに来たのか。それとも二人の仲が険悪になってそれをモオルダアのせいにしてしようとしても言うのだろうか。どっちにしろ、モオルダアはそんなことに構っていられる時間はないのだ。

モオルダアはさらに歩く速度を上げて中場の方へ近づいていった。そして中場の目の前まで来ると「やあ、中場さん。こんなところでお仕事ですか？ それじゃあ」と言って脇を通り過ぎようとした。

「ちよつと！ モオルダアさん。そうじゃないですよ。私はあなたに用があって来たんです」  
モオルダアのすれ違い作戦は大失敗。中場はしっかりとモオルダアの上着の袖を掴んでいた。

「急いでもうですが、私はあなたにお礼を言いに来たんです」  
捕まってしまったモオルダアであったが、この思いも寄らぬ中場の言葉に驚いて、中場の目をまじまじと見つめてしまった。お礼って、なんのお礼だ？

「モオルダアさん。あなたは素晴らしい人ですよ。昨日は電話で失礼なことを言ってしまった、まったくお恥ずかしい」  
中場の言うことがまだ良く解らないモオルダアはそのまま彼の話を聞いた。

「あれから双江がエフ・ビー・エルに出向いたそうですね。それで双江が戻った後、私たちはちょっとした口論になったんです。双江は私がエフ・ビー・エルに妙な捜査を依頼したのを気に入らなかつたみたいですけど。あれは全部私がお江を愛しているからこそ行動です。ああ、そういえば私はまだあなたに本当のことを言っていなかったですね。私は最初にあなたにあった時、あんなブスとは結婚できないなんて言いましたけど、あれは嘘なんです。いくら純愛ブームだからって、恋人のためにエフ・ビー・エルに捜査を依頼するなんてちょっと恥ずかしいから、だからああやって上辺だけの冷たい人間のフリをしてみたんですよ」

モオルダアは「へえ」と気のない返事を返した。それでなんだというのだろうか？

「私があなたに捜査を依頼した本当の理由は、双江の顔がおかしくなっていくのを双江自身が気にしていると思ったからなんです。私だって始めは気にしていましたよ。でも私は双江を愛していたんです。見た目だけじゃなく双江という人間を心から愛していたんです。だから私には双江の顔なんかどうでもよかつたのです。でも、双江の方が自分の顔のことで悩んでいるのではないかって思つたんです。悩み事があれば表情だつてどんどん曇っていくでしょ？ 私はそんな双江をみているのが辛かつた。だからエフ・ビー・エルに相談に行つたんですよ」

熱っぽく語る中場にモオルダアはなんだか悲しい気持ちになつていた。昨日双江にあつた時の話では、双江が中場のことを恋愛の対象として見なくなつたことが原因で、中場には彼女が美人でなくなつたように見えた、ということなのだ。おかしいとは思つたのだが、ここは早く話を終わらせたいのでモオルダアはまた「へえ」とだけ返事をした。

「おかしいと思つていますね。私も知っていますよ。昨日双江と口論してる最中に双江から全部聞きましたよ。双江は私を愛していなかつた。だからボクの目には双江が不細工に見えるようになったんです。私も始めはショックでしたけど、もうその時はすでに二人とも白熱していましたし、私は感情が赴くままに双江に言つたんです。私がどれだけ双江のことを気にかけているか。どれだけ双江を愛しているか。今思うと、もう恥ずかしくて絶対に口に出来ないような台詞もたくさん喋っていましたよ。でもそれが良かったんでしょう。私たちの間には再び愛の炎が燃え上がったんですよ。そして再び双江は美人になったんですよ！」

今だつて恥ずかしい台詞だらけなのだが。モオルダアはなんとなく話が飲み込めてきたし、しかもどうでもいい話を聞かされた感じがして気分が悪くなつて来た。中場はまだ何か喋っていたが、モオルダアはもう聞いていなかった。早く話が終わることを祈りながら、駅の階段の方に目をやった。いつそのこと走って逃げてしまおうか？ そんなことを考えていると、階段の上から双江が降りてくるのが見えた。「さらにややこしいことになつてきた」モオルダアは、中場

の次は双江からおのろけ純愛話を聞かされるのかと思つてゾツとしていた。

階段をゆつくりと降りてくる双江は笑つている。それもそうであろう。なんだか知らないが、この二人は愛の炎を燃え上がらせているということだから。

「あれは双江さんじゃないですか？」

モオルダアは夢中で喋つている中場に言った。中場は一度話を中断しなければならぬことを残念そうにしていたのだが、一度振り返つて双江の姿を確認すると嬉しそうにしてモオルダアの方へ向き直つた。

「あれ、何でだろう？ 今日家はいるって言つたのになあ？ 彼女もあなたにお礼を言いに来たのかな？ ねえ、綺麗になつたでしょ？ ああ、でもモオルダアさんには普通の人にはしか見えないのか。ボクらは愛し合つているんだから、彼女はボクにとって誰もかなわないぐらいの美女なんですよ」

中場は弾むような口調でこう言つていたが、モオルダアも双江が少し綺麗になつたような気がしていた。いや、気がするといふよりも、明らかに昨日とは違う顔になつてゐるのだ。美人になつてゐる。遠目には良く解らなかつたのだが階段を下の方まで下りてくるとその顔がよく見えるようになってきた。その美しい顔は相変わらず笑つてゐるのだが、それは幸せなニコニコというよりは薄気味の悪いニヤニヤという感じだ。いったい双江に何が起きたのだろうか？ それに双江が階段を一段下りるたびに何か重たい金属のようなものが階段にぶつかる音がしてゐる。よく見れば双江の片腕は体の後ろの方にまわつてゐて、その手で何か重いものを引きずりながら歩いてゐるようだ。

中場はまだ喋り続けていたが、モオルダアは双江が気になつてその話はほとんど耳に入つてゐなかつた。双江が階段を降りてゆつくりとこちらへ向かつてきた。さつきまでしてゐた音は、ガリガリとアスファルトをこする音に変わつてゐる。やはり双江は何かを持ってここへやつて来た。何かすごく重くて、すごく堅いものを持つて。

双江の目は真つ直ぐに中場の方へ向けられてゐる。ニヤニヤと笑いながらほとんどまばたきもせず。モオルダアと向かい合つてゐる中場にはなにも解つてゐない。この異様な光景をモオルダアはただ啞然として見つめてゐるだけだつた。双江がそのまま中場の背後までやつて来ると、手に持つてゐたものをゆつくりと頭上に振りかざした。それは大木でも切り倒せるような巨大な斧だつた。

モオルダアはいつた何が起ころうとしてゐるのか理解できないまま、その巨大な斧を見つめていたが、太陽の光が反射してその斧がきらりと光るとやつとモオルダアはこれから起こるであろう惨劇を予測できるようになつた。この斧は今まさに中場の脳天目がけて振り下ろされようとしてゐるのだ。

双江がニヤニヤした顔を少しも変えずに斧を振り下ろそうというとき、モオルダアはとっさに中場を突き飛ばした。巨大な斧がアスファルトを叩く音が耳に突き刺さった。それからモオルダアは頬に何か小さな暖かいものが当たったような気がした。

まだ何が起きているのか良く解らないモオルダアであったが、とにかく中場は大丈夫だったようだ。中場は尻餅をついた状態で倒れていて、声にならない悲鳴をあげながら双江の方を見ていた。そしてその体勢のまま少しでも双江から離れようと後ずさっていく。革靴を履いた足首から先だけを残して。

恐ろしいものを見てしまったモオルダアはもうすでに動けない。腰が抜けている。頭をかち割られることはなかったが、中場は足首から先を斧の一撃によって切断されてしまったのだ。残された足のまだ生きている筋肉が痙攣でも起こしてそれがぴくりと動きでもしたら、モオルダアはその場に卒倒していただろう。その足を凝視して動けないモオルダアは双江の甲高い笑い声にハツとして双江の方を振り返った。今度はモオルダアの方を見ている。けたけたと笑いながら双江はモオルダアを見ていたのだ。

「全部あなたのせいなのよ！」

双江はそう言って、もう一度斧を頭上に振りかざした。モオルダアはただその斧が振りかざされるのを目で追うだけだった。あれが頭に当たったらどのくらい痛いだろうか？ それともそんなことを思う間もなく…。モオルダアが最後まで考えるよりも先に双江の両腕に力が入るのが解った。モオルダアはただ目をつむることしかできない。おきまりの「ごめんなさい」という台詞さえ出てこない。

何かが破裂したような乾いた音が耳の中にこだました。これは斧が頭に当たった音なのか？ ああ、もうダメだな。こんなところでおしまいだ。このあと真っ暗になってそれっきりボクは…。あれ、なんだかやけに時間がかかるなあ。人は死ぬ前にいろんな事を思い出すとか言うけど、これはそのための時間なのかな？ じゃあ急いでいろいろ思い出さないと。といってもなにも思い出せないや。

モオルダアが目を開けると前には双江が倒れていた。胸には銃弾を受けた傷があり、そこから血が流れている。モオルダアは自分の両手を見て双江を撃ったのが自分の銃でないことを確認すると、辺りを見回した。だいたいモオルダアのモデルガンには体に穴が空くほどの威力はない。

「おい、モオルダア！ 何をやっているのだ！」

モオルダアが声のした方を見るとスキヤナーと何人かの警官達が彼に近づいてきた。スキヤナーの手には銃が握られて



いる。

「あ、副長官。なにしてるんですか、こんなところで？」

いまだにパニック状態から抜け出せないモオルダアは変な質問をしている。

「それより、副長官。その銃は本物ですか？」

「ああ、まあね。久々に撃ったから心配だったけどね。まあはずれてキミに当たったとしてもどうせキミはあの世行きて感じだったからね。そんなことより、これはいったいどういうことなんだ？」

「えーっとですねえ」

モオルダアは慌ててここで起きたことを思いだしていた。優秀な捜査官が腰を抜かして今にも殺されるという時に何も出来なかったなんて、知られてはまずいのだ。

## 22

現場にはいつしかたくさんの警官達が集まって捜査の準備を始めていた。その周りには大勢の見物人も集まっている。中場は担架に乗せられてこれから救急車で運ばれるところだ。運ばれる中場の後を彼の切断された足を持った警官が追いかけて言った。警官はそれを救急隊員に見せたが、救急隊員は一度首を横に振ってから仕方なくその足を受け取った。斧のようなもので切断されたのでは切断面がグダグダでつながるはずがない、ということだろうか。だいたいの、切断された足を元に戻すなど聞いたことがない。それでも警官は現場に足を置きっぱなしにするのがいやだったのか、無理矢理救急隊員にその足を渡したようだ。

これだけの事件ならそのうちマスコミもやって来るに違いない。スキヤナーは見物人の輪の中からモオルダアを連れ出して話を聞くことにした。スキヤナーがこの現場にいるところはなるべく見られたくないようだ。惨劇の跡が視界から消えるとモオルダアも次第に平静を取り戻した感じだった。

「何か恐ろしいことが起きている気がしますよ」

モオルダアが言った。確かに恐ろしいことは起きている。

「いったいどういうことなんだ？ エッフエッフエドリンというのは何なんだ？ キミから電話をもらっても何のことだかさっぱりだから、私はキミのところに向かうところだったんだ。それにしてもキミは運が良かったなあ。私が駅前

の交番で道を聞いていなかったら今頃キミは……」

「そんなことはありませんよ。いくら何でもボクがあんな女に殺されるわけはない」  
「だんだんモオルダアらしさが戻ってきたようだ。それでは優秀な捜査官の説明を聞こうではないか。」

「あの双江という女もスケアリーもエツフェツフェドリンという薬物の実験台にされたということです。誰がその実験をしているのかはまだ解りませんが、それは何か恐ろしいことを企んでいる連中です」

「そんなことを言われてもスキヤナーには良く解らない。」

「エツフェツフェドリンというのはどういふものなんだ？」

「元は兵士の身体能力を高めるために開発されたものなんです。言ってみれば強力なドーピング剤ですかね。ところが思わぬ副作用があったんです。それがさっきの状況ですよ。男はイケメンに女は美女になって、しかも暴力的になるんです。斧で愛する人の頭を割ろうとするぐらいにね」

「そんな副作用のあるものを飲ませて何をしようというのだ？」

「その何かを企んでる連中というのは副作用の方に目を付けたんですよ。敵が味方同士で殺し合いをして自滅してくれたら、戦わずして勝つことが出来ますからねえ。問題はどうかやって敵にエツフェツフェドリンをのませるかです。食事に混ぜるとしても、全ての食材にエツフェツフェドリンを仕込ませるといふのは不可能です。そこで世間で流行っているものに絞るんです。今回はそれがビューティー・アップ・サプリという錠剤だったんです。しかも皮肉なことに今回はホントにビューティーがアップしてる」

「なんだかすごい話だが、さっきから言ってる敵ってどういうことだ？ 暴力団の抗争とかそういうことか？」

「そうかも知れませんが、ここまで出来るのはもっと大きな組織です。国際的規模で活動している」

「まさか、どこかで戦争の準備をしていると言っくんじゃないだろうね？」

「さあ、それはどうか知りませんが」

モオルダアは半分出任せで喋っていたので、ちょっと自信がなくなってきた。しかし、それはもうどうでもいいのだ。モオルダアはスケアリーのことがたまらなく心配になってきたのだ。こうしている間にもスケアリーは斧を振り回して人々を襲っているのではないか？

「ボクはこうしてはいられないんです。早くスケアリーの消息を掴まないと。ところで、エフ・ビー・エルの捜査官達はスケアリーに関して何か情報を得たんですか？」

スキヤナーはそれを聞かれるのが辛そうだった。どうしてあんな役立たずをスケアリーの捜査に任命するのか。スキヤナーにも納得いかないところがあつたのだ。

「まあ、それは現在捜査は鋭意継続中だ。一つ解つたのはスケアリーの車が駐車場にないということだ。つまり、スケアリーは車を使って失踪したということかな」

「それだけ？」

モオルダアが聞いたが、スキヤナーはそれ以上喋らなかつた。ただし車で移動したとなるとモオルダアには都合が悪い。モオルダアの移動手段は電車かバスなのだから。まあ、それはスケアリーの行方が解つてから考えれば良いことだ。「ボクには行くところがあるんです。ここで起きた事件に関してボクに事情聴取したいということなら後でいくらでもしますから」

スキヤナーは頷いてモオルダアを行かせた。今回は意外と物分かりの良いスキヤナーである。

## 23 ビューティー・アップ本社ビル（入り口）

モオルダアはビューティー・アップ社のビルの前まで来ると、そのビルの上の方を見上げた。さほど大きくはないが自社ビル。あのサプリが好調のようだし、このまま事業を拡大していけば、もっと大きなビルが建つだろう。あの美人社長にはそんな野心がうかがえる。なんでか知らないが、モオルダアはそう思っていた。

モオルダアがビルの入り口をくぐって奥のエレベーターへ向かおうとすると、警備員が彼を制止した。丸いお腹をつきだしたその警備員は、大柄ではあつたがあまり頼りになる感じもしなかつた。

「ボクは別に怪しいもんじゃありませんよ」

モオルダアが言ったが、警備員は道を開けなかつた。頼りない感じでもちゃんと仕事はするようだ。

「関係者以外は立ち入り禁止です」

やけに厳しい会社のような。モオルダアはポケットからエフ・ビー・エルの身分証を取り出して警備員に見せた。

「私はエフ・ビー・エルのモオルダアだ」

モオルダアは彼なりに優秀な捜査官風の口調で言った。しかし、警備員は道を開けない。

「エフ・ビー・エルならなおさらダメです」

警備員はきつぱりとこう言うと、壁に掲げられている注意書きをあごで指した。そこには「関係者以外立ち入り禁止」と書かれたプレートがあるのだが、その下にマジックで書かれた文字が追加されていた。「特にエフ・ビー・エルの捜査官」と書かれている。

どうしてエフ・ビー・エルの捜査官が立ち入り禁止なのか。モオルダアはこのビューティー・アップ社に対してますます猜疑心を抱かざるを得なくなってくる。

「ここでエフ・ビー・エルが何かしたの？」

モオルダアが聞くと警備員は「それは言えません」とだけ答えた。しかし、ここで引き返すわけにはいかない。なにより、ここで社長の一芽実田に話を聞かなければ捜査は少しも前に進まないのである。

「それじゃあ、一度戻って令状をとってくるまでだ。でもこれだけは言っておこう。もしこのビューティー・アップ社でやましいことが行われていることが解った時には、キミは犯罪に協力したということ容疑者の一人として逮捕されることになるが、それでも良いのか？」

「良いですよ」

この大柄の警備員はモオルダアを見下ろしながら、一言で答えた。そのいかにもお人好しで、すぐに騙されてしまいそうな警備員にそんな態度をされて、モオルダアは柄にもなく苛立ってきた。もしモオルダアが上着の下のホルスターからモデルガンを取りだしてこの警備員に突きつけたら、きつと警備員は青ざめて彼を社長のところまで案内するだろう。しかし、モオルダアはそういうアウトロー路線は好ましくないような気がした。

やっぱり一度戻って令状をとらないといけないのだろうか。といっても、これは彼が単独で捜査していることなのだ。誰に頼んでも令状なんかとれるわけがない。ここで諦めかけたのだが、今回は意外と頑張るモオルダア。最後にもう一あがきしてみることにした。

モオルダアは自分がすごく良いものを持っていることを思い出したのだ。これまでの優秀な捜査官風の表情が急にやわらいでいった。

「キミ。一芽実田社長がアイドルだった頃のお宝写真とか見たくないか？」  
モオルダアにこう言われて警備員は明らかに動揺しているようだった。

「あの美人社長のギリギリビキニなんだけどねえ」

そうやってモオルダアはポケットから「熱血投稿」を半分だけ出して警備員に見せた。「熱血投稿」はポケットにかく

して持ち帰れるA5サイズのエロ本なのです。警備員は思わず後ろに組んでいた腕を伸ばしてモオルダアの持っている雑誌を取りあげそうになった。モオルダアはすかさず雑誌をポケットにしまった。

「もしもキミが道を開けてくれるなら、帰りにこれをキミにあげることを約束しよう。でもそれが嫌だというのなら、キミは一生あの美人社長のギリギリビキニにはお目にかかれないよ」

警備員はすっと体を動かして道を開けた。その大きな図体には似つかわしくない軽やかさで。警備員がいやらしい微笑みをモオルダアに向けると、モオルダアもニヤニヤしてそれに答えてエレベーターの方へと歩いていった。

## 24 ビューティー・アップ社（社長室）

社長室の外が一瞬騒がしくなつて、その後すぐに社長室のドアが開いた。ドアを開けたモオルダアの後ろで秘書が慌てた様子で彼を止めようとしていた。

「許可は取つてあるんだ！」

そう言うモオルダアは勢いよく社長室のドアを閉めた。

一芽実田社長は一瞬戸惑つた様子を見せたが、モオルダアが彼女に視線を向ける頃にはいたつて平然とした態度を取り戻していた。これが急成長する会社を取り仕切る女社長の度量なのか、或いはこんなことにはもう慣れてしまっているのか。彼女は突然現れた不審者の顔をじつと見つめていた。

「どうぞ、お掛けになってください」

一芽実田はモオルダアにこう言ったが、モオルダアは椅子を通り越して一芽実田の目の前まで来ると、腰をかがめたり、背伸びしたりして、あらゆる方向から一芽実田を眺めていた。

「あの、何をなさっているのか知りませんが、とにかくお掛けになってください」  
こう言われてもモオルダアはしばらく怪しい行動を続けていた。

「いや、ちょっと待ってください。今ボクはあなたのマキシマム・ビューティー点とミニマム・ビューティー点を探してるんです。…でもそんなものは無いのかなあ？」

モオルダアはやつといわれた通り椅子に腰掛けた。

モオルダアの言っているマキシマム・ビューティー点とかミニマム・ビューティー点というのは、きつとこういうこ

とである。昨日彼と会った双江さんには「その角度から写真を撮ると美人に写る角度」があった。そのことがあまりにも衝撃的だと思ったモオルダアはいろいろと考えたあげく、逆に不細工に写る角度があるのではという仮説を立てていたのだ。もしそうなら、一番美人に見える角度がマキシمام・ビューティー点で、逆に一番不細工に見える角度がミニمام・ビューティー点だ、と言う感じでモオルダアは勝手にその現象に名前を付けていたのである。

モオルダアは一芽実田社長が美田時子だった時のグラビア写真がビミョー過ぎるのは、もしかするとミニمام・ビューティー点で撮影された写真だったからではないかという疑問を抱いていたのだ。もしそれが原因で現在と過去の一芽実田社長の顔が違うのなら、モオルダアがここに来た意味がなくなってしまう。しかしモオルダアは一芽実田社長が何かいけないものの力で現在の美貌を手に入れたと想っていたのだ。

一芽実田社長はどこから見ても美人社長だった。完璧ではないし、所々に年相応の欠陥が見え隠れしてはいるのだが、どの角度から見てもミニمام・ビューティー点は見つからなかった。それを確認してモオルダアは椅子に掛けようとしたのだが、彼女から離れる瞬間、彼女の顔に厚く塗られたファンデーションの下に青黒いアザのようなものを発見した。それは窓から差し込む光を加減によって見えたり見えなかったりしていたのだが、こめかみからほお骨のあたりまで広がっている。誰かに殴られでもしない限りそんなアザは出来そうもないのだが。モオルダアは変なものを見てしまった影響で自分が何をしに来たのか解らなくなったまま、椅子に腰掛けた。

何も言い出さない不審者モオルダアをしばらく眺めていた一芽実田社長は、この不審者が何も言い出さないようなので自分から話すことにした。

「それで、どんなご用件でしょうか？ もし私どもの製品に不備などがございますようでしたら何なりと御申しつけくだされば…」

一芽実田社長のアザに考え込んでしまったモオルダアはここでハッと我に返って一芽実田社長を遮った。

「そういうことじゃありません」

と言ったものの、モオルダアは特に聞くことなど考えていなかった。これまでの経過から明らかにビューティー・アップ社のビューティー・アップ・サプリが大きな犯罪に関わっている。さらに謎の男から渡されたエロ本には、今日の前にいる一芽実田社長のアイドル時代の写真が掲載されていた。それだけでモオルダアはこの社長室に乗り込んできたのだが、何を聞こうかなど全然考えてもいなかったのである。でもそれはちよつと優秀な捜査官ではない。とりあえずモオルダアはポケットの中のエロ本を取り出した。

「一芽実田さん。ここに写っているのは若い頃のあなたですね？」

モオルダアが雑誌を拵げてそういうと、一芽実田社長は笑いそうになるのをこらえて口に手を当てた。そしてそれが治まるとモオルダアに言った。

「ああ、そのことですか。最近多いですよねえ。あなたもその雑誌をネタに私をゆすろうとか、そういうことを考えているんでしょう？ それだったら時間の無駄ですよ。これまで何度もそういう人が来ましたけど、これだけビューティー・アップ・サプリーが売れているのはその写真のおかげなんです。世間的にその写真は封印されているように見えますが、実はそれも計算されていることなんです。隠したがつている過去こそ世間の人は気にしますから。それを逆に利用してるんです。裏でその写真が出回れば出回るほど、現在の私の容姿が引き立つ。そこで私がビューティー・アップ・サプリーのおかげで人生が変わった！ と言えば、それだけで効果は絶大ですからねえ。ですから、そんなもので私をゆすろうたってそうはいきません」

モオルダアは話が面白そうだったので「そういうことじゃないよ！」というのを忘れて一芽実田社長の言うことを聞いていた。それからやっと「そういうことじゃないです」と控えめに言った。

机の上にはまだ雑誌が拵げられたまま。あまり可愛くない若き日の一芽実田社長が満面の笑みでこちらを見つめている。これに比べると美人女社長として成功した一芽実田社長はまるで別人だ。見た目だけではない。現在の一芽実田社長からは冷たくて近寄りたくない雰囲気が出てくる。それは、もしかすると売れないアイドル時代も、カメラのないところではそうだったのかも知れないが、モオルダアにはこのギャップが信じがたかった。

「何か、昔の一芽実田社長は楽しそうですねえ」

モオルダアは思わず独り言のようにつぶやいたが、すぐにどうでもいいことを言ってしまったことに気付いて、すまなそうに一芽実田社長に視線を移した。

モオルダアは一芽実田社長の表情が一瞬だけゆるんだように感じた。彼女はまたすぐに元どおりの毅然とした表情を取り戻したが、声色が多少穏やかになっている感じがした。

「そりゃ、その時は若いだけで何でも出来るような気がしていた頃ですからねえ。怖いもの知らずですから、楽しくないわけありませんよ」

モオルダアのどうでもいい一言に一芽実田社長が反応している。

「それじゃあ、今は怖いものがたくさんあるということ？」

何を言っているのか知らないが、モオルダアがこういうと、一芽実田社長は一瞬口をつぐんでしまった。

「誰かに殴られたりするんじゃないかって、怯えてたりしませんか？」

「なんのことだか知りませんが、本題に戻りませんか？ いったいあなたはここへ何しに来たんですか？」

人を苛立たせるのは得意なモオルダアは例によって一芽実田社長もイライラさせている。モオルダアは彼女の顔のファンデーションの下に隠されているアザのことが知りたかったようだ。それが何になるのかは知らないが、彼にはちょっと興味があったのだ。しかし、一芽実田社長が苛立ってしまったので、それ以上は詮索できそうにない。

「用がないのならお引き取り願います。私にはやるのが沢山ありますので」

一芽実田社長が社長室のドアを開けるために立ち上がったが、モオルダアはここで引き下がるわけにはいかない。

「いや、失礼いたしました。優秀な捜査官というのは、時に本来の目的とは違うことに興味が行ってしまうんですよ。それも優秀な捜査官のさがつていうやつですから、そこは目をつむっていただきたい」

「私がここへやって来たのは、ある事件に関してなんですけど。ある女性がどういうワケだか、どんどん不細工になっていくという事件です。それに関して調べていくとその女性が『ビューティー・アップ・サプリ』を常用していたことが解ったんです」

モオルダアが言うのを聞いて、一芽実田社長は何を言われているのか理解するまでの多少の時間を要した。それからこう言い返した。

「それだったら私どものところへこられるのは間違っています。私どもの『ビューティー・アップ・サプリ』は必ずしも美人になるという保証はしていませんが、飲んだから顔がおかしくなるなんてことはあり得ませんから。あれは基本的にビタミン剤だということはあなたも解っていますよね？」

それはモオルダアも知っていたが、そこで話をやめてしまうとこれ以上一芽実田社長から話を聞けなくなりそうだった。それはボクも知っていますよ。顔の変化の理由は別にあつたんです。というより、元から少しも顔は変わっていません。ところが、ある日その女性が誰の目にも美しい女性に変わっていったんです。しかし、変わったのは容姿だけではなくて性格も変わってしまったんです。手も付けられないくらい凶暴な性格になってしまったんです」

「それが『ビューティー・アップ・サプリ』のせいだとも言いたいですか？」



一芽実田社長はこのモオルダアの作り話のような説明に真面目に答えた。

「さあ、それはどうだか解りません。あなたがこの事件に関わっているのかどうかは知りませんが、放っておけばあなたも凶暴化した女性に狙われる可能性がありますよ。というより、もうすでにあなたはエフ・ビー・エルの女性捜査官に襲われていますね？」

一芽実田社長は口元を引きつらせながら、何とか笑顔を作るところ言った。

「なんだかあなたは見当違いなことをしていらっしやるようです。どうかお引き取りください。もうこれ以上あなたの空想に付き合っていただけませんか」

そういわれてもモオルダアは席を立とうとしない。というか、ここまで適当な感じで確証のない話をしてしまったら引くに引けない。それに入り口で見た「エフ・ビー・エル立ち入り禁止」と一芽実田社長の顔のアザを結びつけるところにスケアリーが来ていたことがうかがえるのだ。一芽実田社長の反応からするとその可能性は大いにありそうだ。

「そうはいきませんよ。今頃はテレビでも大騒ぎになっているはずです。女性が婚約者を斧で襲った事件のことが。もしかすると似たような事件が別のところでも起きているかも知れない。でもボクはあなたがその事件の黒幕だとは思っていません。もしかするとあなたは被害者なんです」

「もし、あなたが『ビューティー・アップ・サプリ』が原因でそういう事件が起こったなんて言い出したら、私は被害者ということになりますけど。そろそろ帰っていただかないと警備員を呼びますから」

「あのスケベな警備員なら多分来ませんよ。あの人はあなたのギリギリビキニが見たくて仕方がないみたいですから。それより、これだけは教えてください。あなたの顔に出来たそのアザは何が原因なんですか？」

一芽実田社長は立ち上がって電話のところまで行くと受話器を取って警備員を呼んだ。そして受話器を置くと、モオルダアに向かってこういった。

「あなたの思っているとおおり、そのエフ・ビー・エルの女性捜査官はここへ来ましたよ。スケアリーとかいう人。それが解れば充分でしょ？」

社長室の外には警備員が近づいてきていた。

「あなたがもう少し器用だったらよかったのに」

一芽実田社長が最後に言った言葉をモオルダアはよく理解できなかったが、それを確かめる間もなく警備員が社長室へ入ってきた。入り口にいた警備員とは違って、ここへやって来たのは、こわもてで体格の良い「本格的な」警備員だっ

た。その警備員によってモオルダアは軽々と抱えられて社長室から連れ出された。それから一階まで降りてくると、入り口にいた警備員が近寄ってきて、モオルダアのポケットから「熱血投稿」を取り出した。モオルダアはそのままビルの外に放り出された。

情けない悲鳴をあげる間もなくテキパキとビルから放り出されてしまったモオルダア。しかもあのスケベな警備員に「熱血投稿」までとられてしまった。まあ、これは約束だから仕方ない。しかし、このまま引き下されるのか？ モオルダアの半分思いつきの推理は見事当たってスケアリーがここへ来たことは解ったのだ。もう少し一芽実田社長に話を聞けばもっとすごいことが解るかも知れないのだ。もう一度美人女社長に会いたいのだが、ビルの入り口では「本格的」な警備員がモオルダアを睨みつけている。悔しいがここは帰るしかないようだ。そう思ってモオルダアはトボトボと歩き出した。

「モオルダアさん！ いったいこんなところで何をやっているんですか？」

モオルダアがその声に驚いて顔を上げると、クライチ君が不思議そうにして彼を見ていた。

「キミこそこんなところで何をしてるんだ？」

「捜査ですよ。もしかしてモオルダアさんは知らないんですか？ 双江さんの事件のこと」

危うく殺されたモオルダアが知らないはずはない。それでもなるべく平静を装って「知ってる」とだけ答えた。

「じゃあ、もしかしてビューティー・アップ社の社長のことはもう調べたんですか？ 私はあなたが今日エフ・ビー・エルに出勤してこないから自分で判断してこうやって来たんですけど。双江さんはビューティー・アップ・サプリーを飲んでいたんだから、あの行動にもビューティー・アップ・サプリーが関わっていてもおかしくないと思っただけです。それにしても、私に黙って勝手に捜査なんかしてずるいなあ。あの事件に関しては私達はまだパートナーなんですからね」

クライチ君を見ていたモオルダアは、えこひいきをされてすねている子供を想像してしまった。

「残念だけど今あのビルはエフ・ビー・エル立ち入り禁止だよ。ボクも何も聞けなかった」

モオルダアは早くスケアリー探しの続きをしたいので、ホントのことは言わないようだ。

「エフ・ビー・エル立ち入り禁止っていつても、事件の捜査なんだからそんなことも言ってもらえないでしょう？」

「でもあの警備員を見てみるよ」

モオルダアはビルの前でモオルダア達を睨んでいる「本格的な」警備員を指した。

「それよりキミに面白いことを教えてあげよう」

「何ですか急に怪しい感じですか？」

クライチ君の言うとおり、いいことを思いついたモオルダアは怪しい感じだった。

「キミはどうして双江さんが婚約者の中場を襲ったのか知ってる？」

「さあ？ 近くにいれば誰でもよかったんじゃないですか？」

「それは違うんだよ。双江さんはわざわざ電車で中場を追いかけてきて彼を襲ったんだ。周りには人が沢山いるにもかかわらずにね。ビューティー・アップ・サプリを飲んで常軌を逸した者は『絶対嫌い度』が多い順に人を襲うんだよ」

「何ですかそれは？」

モオルダアの変な推理にはスケアリーに限らず、正常な人間なら誰だって困惑してしまう。そんなことはおかまいなしにモオルダアは先を続けた。

「一緒にいる時間が長ければ長いほど、相手の良いところが解ってくる。それと同時に同じくらいの悪いところも解るよねえ。それでも一緒にいられるのは良いところが悪いところを打ち消してくれるからだと思うんだよ。だけどビューティー・アップ・サプリの影響で相手の良いところがまったく見えなくなってしまうたら、その相手は世界で一番嫌なヤツになりうるだろ？」

「まあ、無理はありますが、あり得なくもないですかねえ？ それで、なんだって言うんです？」

「つまりキミはここで新たな事件が起きないように見張っている。ということだよ」

「何でそうなるんですか？」

「ビューティー・アップ・サプリを飲んでいる人が身近な人間の次に嫌いなのは誰だと思う？ それはつまりビューティー・アップ・サプリを作った一芽実田社長だよ」

「全然意味が解りませんよ」

「ダメだなあ。それじゃあいつまでたっても優秀な捜査官にはなれないぞ。ビューティー・アップ・サプリを飲んでる人っていうのは、いくら飲んでも全然美人にならない物売りを売った一芽実田社長に相当な恨みを抱いているはずだからねえ。たとえ一芽実田社長の美貌に憧れてビューティー・アップ・サプリを飲んでいても、その憧れがなくなれば『絶対嫌い度』は相当上がっているはずだよ」

モオルダアは得意げだったが、クライチ君はまったく納得していない感じでモオルダアに聞いた。

「それじゃあ、私がここで見張っていればビューティー・アップ・サプリーで頭が変になった人が一芽実田社長を襲いにやって来る、ということですか？ それを私が阻止することですか？ それじゃあ、あなたはどのようにするんです？」

「ボクはちよつと調べる必要があるから、一度エフ・ビー・エルに戻るよ。それじゃあ、頼んだよ！」

そういつてモオルダアは駆け足でその場を去っていった。明らかに逃げ出すような感じで。

## 25 モオルダアのボロアパート周辺

モオルダアはエフ・ビー・エルには戻らずに自分の家に戻ってきた。クライチ君には絶対本当のことを喋らないつもりらしい。ボロアパートの前まで来たモオルダアは突然背後から呼び止められた。

「ちよいとあなた！ いったいどういうことなんですの？」

この言葉にモオルダアはギョツとして振り返った。こんな話し方をするのはスケアリー以外に考えられないのだが、そこにいたのはスケアリーではなかった。

「あなたは、うちの娘と一緒に働いてる変態のモオルダアさんでございませう？」

「どうやら、この女性はスケアリーの母親のようだ。彼女はモオルダアが「はい」とも「いいえ」とも答える前に話を続けた。」

「いったいどういうことでございますの？ 最近、娘と連絡を取れないから心配になってエフ・ビー・エルの方へ連絡してみたんです。そしてあなた、驚いたことに娘の行方が解らないって言うじゃありませんか。まったく信じられませんわ。そんなことなら最初からあたくしのところへ連絡を入れるべきなんですのよ。そう言ったらエフ・ビー・エルの方は『余計な心配をかけないように知らせなかった』なんて言うんですのよ」

ここでやっとモオルダアが話に割り込めた。

「あなたはスケアリーのお母様でございますね？」

いつものように、この話し方は感染するようだ。

「そうでございますけど。いったいどうなっているのか説明してもらいたいものですわ！ スケアリーがいなくなっておかしいと思っていいたらあの子の姉までおかしなことを言いだして。悪い夢を見たとか言うんですのよ。何でも、スケアリーがうちの別荘で殺されている夢を見たとか言っつて。そんなことを言っつてたかと思っつたら今度は姉までいなくなっ

てしまったんですの。まさかと思って、うちにある別荘の鍵を調べてみたら無くなっているじゃありませんか」

母親だけあって、スケアリーよりも強烈である。モオルダアは完全に相手のペースにはまっている。しかし、ここへ来てやっとスケアリーの居所をつかめそうな気がしてきた。

「つまり、その別荘に行つて確かめてこい、というところでございましょう？」

「当たり前じゃございませぬこと？ あたくしがわざわざ寒い思いをしてあの別荘まで行くこともありませんでしよ？」  
スケアリーの母が本当に娘達のことを心配しているのかどうか解らない感じになってきたが、モオルダアは捜査が進展しそうなことに喜んでいた。だいたい、どうして始めから身内に話を聞かなかったのだろうか？ 基本的な過ちだ。それにしてもスケアリーの姉が見た夢というのが気になる。殺されているとはどういうことなのだろう。モオルダアはスケアリーが殺されるなんて夢にも思つたことがない。彼の夢の中ではスケアリーはいつでも彼を殺そうとして追いかけてくるのだ。それに、昨日は現実にも思つたことだ。彼女が殺されるはずなどないのだ。万が一のことを考えると焦りにつながるから、自称優秀な捜査官モオルダアはそれ以上は考えなかつた。

モオルダアはスケアリーの母から別荘の場所を聞いた。すぐにそこへ向かいたかつたのだが、ちょっとした問題があつた。調べてみると、電車とバスを使ってそこへ辿り着くにはこの時間からだと言ひ過ぎだ。しばらく考えた後、モオルダアは仕方ないという感じでポケットから携帯電話を取り出してヌリカベ君に連絡した。彼の速そうなバイクで連れて行つてもらつてもらうつもりらしい。

## 26 ビューティー・アップ社の社長室

ノックの音が続いてドアが静かに開くと、先程入り口でモオルダアの裏取引に応じた頼りない方の警備員がうつむいて入ってきた。入つて来るなり警備員は一芽実田社長に向かつて深々と頭を下げ「もうしわけありません」と謝罪をした。

「謝ることはありません。あなたの判断は正しかつたのですから」

社長にこう言われると、彼は驚いて口を半分開けたまま顔を上げた。それから社長にいわれるまま一芽実田の前の椅子に座つた。椅子に座ると彼はモオルダアから取りあげた例の工口本を社長に差し出した。

「それがまだこの世に存在していたなんて、思いもせませんでした。でも、せつかくあなたのおかげでその雑誌を手に

入れることが出来ても、もう私達は終わりかも知れません」

座ってもうつむいたまま話を聞いていた警備員はまた驚きで口を半分開けたまま一芽実田を見つめた。一芽実田社長はモオルダアと話していた時とはまるで別人のように優しい口調で話している。

「あなたが私の『追っかけ』だった頃から、あなたはいつだって私の味方でしたねえ。私が全然売れないアイドルだった時にも、あなたはいつも応援してくれましたねえ。地方の誰も来ないようなイベントにもあなたは来てくれました。そして、私がこんなに変わってしまったも、あなたはいつでも私の味方をしてくれました」

「社長は昔も今も少しも変わりません。あなたはボクの太陽なんです」  
顔を真っ赤にしてこう言った警備員の声は最後が聞き取れないほど小さくなっていった。

「あのモオルダアとかいう捜査官はそうは思っていないみたいです。でもあなたにとってはそうなのかも知れませんねえ。私にもあなたが昔と同じに見えますよ。今でもあなたはステージのすぐ近くで大声を張り上げて私の名前を呼んでくれたあなたです」

この後しばらく二人の間に沈黙が訪れた。警備員はゆっくりと一芽実田社長の方を見た。すると社長は目に涙をいつぱいためて、泣き出すのをこらえているようだった。警備員は一芽実田社長の身に悪いことが起ころうとしていることがすぐに解った。

「もう終わりなんです」

一芽実田社長が震える声で喋りはじめた。

「あの捜査官が言ったとおり、私は変わってしまったのです。そして、その代償はいつか払わなければいけないのです。それがどういう形でやって来るかは解りませんが、これは私だけの問題です。ですから、あなたは今のうちにどこかへ逃げてください」

「そ、それは、ダメです！」

警備員は今にも立ち上がりそうなくらいに興奮して言った。

「何が起ころうとも、ボクが、あなたを、守るのです！」

興奮のあまり警備員は変なところで息継ぎをしながら話している。それを聞いて一芽実田の目から涙があふれ出てきた。

「その気持ちだけで十分です。私のためにあなたまで巻き添えになることはないんです。あなた一人の力ではどうにも

出来ないことなんですから。私は今まであなたに応援されるばかりで、あなたには何もしてあげられなかった。だから、私からの感謝の気持ちだと思って私の言うことを聞いてください。今すぐここから逃げるんです」

「いいえ、あなたはいつもボクに元気を与えてくれました。だからボクは何があらうとあなたのために…」

「ここにいるのはあなたの好きな美田時子ではありません。殺人犯の一芽実田塗黄子なのです」  
「でも社長」

こう言って警備員が一芽実田を見た時、彼はその瞳が訴えているものを知って言葉を失った。彼はがっくりと方を落とすと小さく「解りました」と答えた。

「その雑誌はあなたが持っていてください。その雑誌に写っている私の姿が本当の私の姿だということを知っているのはあなただけかも知れません。その雑誌を私だと思って大切にしてください」

警備員はほとんど泣きそうな感じで一芽実田を見ながら立ち上がると、大事そうに目の前にあつた雑誌を抱えて社長室を後にした。彼が社長室から出ていくのを見届けると、一芽実田は机に突っ伏してすすり泣いた。

## 27

ビューティー・アップ社の社長室では妙にドラマティックな展開になっていることは少しも知らず、モオルダアはヌリカベ君のバイクの後ろに乗ってスケアリーがいるであろう山奥の別荘へと向かっていた。そこには多分彼女の姉もいるであろう。姉は妹のスケアリーとは違い、自分の見る夢に特別な意味があると思っている人間のようだ。

しかし、その別荘でスケアリーが殺されているということなら、そんな場所へ女一人で行くことは危険なのだ。ヌリカベ君は二人の女性が危険な状態にあるかも知れないということをもモオルダアから聞かされると、驚くほどのスピードを出して高速道路を走る乗用車やトラックの間を縫って走った。きっとスピード違反で捕まってもモオルダアがいるから大丈夫だとも思っているのだろう。しかし、モオルダアがエフ・ビー・エル的身分証を見せたところで警察は何も反応しないのはモオルダアには解っていた。彼はそこが心配だったが、二人の乗ったバイクは無事に目的地に近い出口で高速道路を降りることが出来た。

恐ろしいスピードで走るバイクに乗って、モオルダアは必死になってヌリカベ君にしがみついていたのだが、ここでようやくホッとすることが出来た。しかし、それもつかの間、今度は山道の急カーブを右へ左へとバイクを傾けながら

走り出した。こっちの方が真っ直ぐな高速道路を走るよりモオルダアには恐ろしかった。別荘に続く舗装されていない道につく頃にはモオルダアの両腕は力を入れすぎたためにほとんど感覚がなくなっていた。

舗装されていない小道ではさすがにゆっくりと慎重に走らざるを得ない。やっとモオルダアにも喋る余裕が出てきた。

「キミ。こんなに飛ばしたら、もしかするとスケアリーの姉さんよりも先に着いてしまうかも知れないぞ」

「それは、ありません」

ヌリカベ君はそう一言だけ言って後は黙っていた。どういう根拠でそういったのか知りたい気もしたが、ヌリカベ君は必要以上のことは喋らない。モオルダアはヌリカベ君がそう言えばそれが正しいのだ、と考えることにした。

彼らの走っている舗装されていない道は次第に細くなり、深い木々に覆われて薄暗くなってきた。ホントにこんなところに別荘があるのか心配になってきたが、その道を五分ほど走ると前方に駐車している自動車の一部が見えた。モオルダアは慌ててバイクを止めるように指示した。そして、バイクを降りると「キミはここでまっていたまえ」と言いながら、上着の下のホルスターからモデルガンを取り出すと慎重に別荘の方へと近づいていった。

木の陰に隠れてモオルダアはログハウスの様子をうかがった。その前には車が二台。一台は彼がこれまでに何度も見たスケアリーの車だ。そしてもう一台はスケアリーの姉の車なのか。それとも違う何者かの車か。いずれにしてもここにはモオルダア達とスケアリーの他に誰かがいるということは確かだ。

しかし、ここはあまりにも静かだ。たまに吹く冷たい風が木々の間を通り抜ける音や、モオルダアが少し動いたびに足下でカサカサいう枯れ葉の音がとても大きく感じられる。ログハウスの窓には板が打ち付けられていて、中の様子はまったく解らない。だが、人がいるなら暖をとるために暖炉に火が灯されていることもあり得る。それならば幽かに明かりが漏れてきたりもするだろうが、そんな気配は全くない。

もしかすると、来るのが遅すぎたのだろうか？ あの静かなログハウスの中には姉妹の死体が横たわっているのでは？ モオルダアは頭にその光景を思い浮かべてから、すぐにそれを消そうと努めた。全てはこの静けさのせいだ。変な想像はやめて自分のやるべきことをやれば良いのだ。モオルダアはモデルガンを構えたままの姿勢でログハウスの方へと進んでいった。

入り口の前まで来るとモオルダアはドアノブに手をかけて回してみた。鍵は掛かかっていないようで、それは軽く回すことが出来たのだが、そこから押しても引いてもドアは開かなかった。内側から掛け金でもあるのだろうか。そう



なると、ここはあれをやるしかないな。モオルダアは一步ドアから後ずさり考えた。体当たりしてドアを破るか、それ

とも足で蹴破るか。どっちが優秀な捜査官らしいか。どちらにしても一度で成功させないことには…。

その時、ログハウスの裏の方で何かを落とすようなガチャンという音がした。モオルダアはハツとしてモデルガンを構えた。ログハウスの裏に回るには左側しかないようだ。反対側は木の生い茂った急斜面だ。それを確認すると足音をさせないように慎重に入り口から左の端まで移動した。そこで立ち止まって耳を澄ましてみると、幽かな足音がこちらに向かつてくるのが解った。この時、モオルダアは気付いていなかったのだが、モデルガンを構える彼の姿が影となって彼の前に伸びていたのだ。それはこちらへ近づいて来る誰かにもよく見えていた。

近づいてくる足音が大きくなりモオルダアのすぐ近くで止まった。次の瞬間モオルダアは「動くな！」と叫びながら飛び出した。それと同時に彼は大きな鉄の板で顔を強打されてそのまま気を失った。

「あらまあ、どういたしましたしょう？」

大きなスコップを持った女性が倒れたモオルダアを見下ろしながら呆然としていた。

## 28

モオルダアのいる部屋は火に包まれた。セクシー下着を身にまとった美女のスケアリーが部屋の出口を探している。モオルダアはどうしてスケアリーがそんな姿なのか不思議に思っていたが、それはそれで嬉しいのでそれ以上は考えなかった。部屋に横たわっていたモオルダアは立ち上がってスケアリーと一緒に出口を探すべきだと思ったが、思ったように動けない。どうやら彼は怪我をしているらしい。ひたいからは血が流れて、脈打つたびにズキズキする痛みが感じられる。

「ここから出られるわ」

スケアリーが出口を見つけた。なぜか言葉遣いが普通なのだがそれも気にしない。彼はいま美人捜査官とスリルに満ちあふれた冒険のさなかにあるのだ。この状況を何年待ちわびたことか。ということはここでモオルダアは優秀な捜査官の台詞を言わないといけないのだ。

「ボクはもうダメだ。キミ一人で逃げてくれ！」

これを聞いたスケアリーがモオルダアに駆け寄ってきた。



「あなたがモデルガンなかを持ち歩くからいけないんですわ。自業自得ですよ」  
スケアリーがそう言いながらモオルダアのひたいに絆創膏を貼ると、その上を軽く叩いた。モオルダアはまたキャットと情けない悲鳴をあげた。スケアリーはもう一度叩いたらまたその悲鳴が聞けると思っ叩こうとしたが、モオルダアが可愛そうなのでやめておいた。

それにしても、モオルダアには現在のこの状況が全然理解できない。美女になり凶暴化してモオルダアを襲った後に失踪したスケアリーが目の前にいて、同じ部屋にスケアリーの姉がいる。その向こうには窓に打ち付けられた板の隙間から外の様子をうかがっているヌリカベ君が見える。部屋は暖炉に火が入れられているため暖かく快適だ。「確かボクはスケアリーを助けにここへ来たはずなんだけどなあ」そう思ったモオルダアだったが、これではまるで自分が彼らに助けられたような気分だった。どうしてこうなったのか説明を聞きたいのだが、いまだに意識がボンヤリして何を聞けば良いのか解らない。ゆっくりを上半身を起こしてスケアリーの方を見た。

「キミ、美女だったのに…、元に戻っちゃったねえ」

「あたくしはいつでも美人ですわ！」

そう言ってスケアリーは恐ろしい形相でモオルダアを睨んだ。それでモオルダアはやつと我に返ったようだ。スケアリーの鉄拳をくらわれないように身構えたが、怪我をして倒れていたモオルダアを殴るほどスケアリーは非情ではないらしい。遠くからヌリカベ君がクツクツと笑う声が聞こえたが、モオルダアは特に気にしなかった。ヌリカベ君とはそういう人なのだ。

「いったいキミに何が起きたんだ？」

モオルダアはやつと聞くべき質問をすることが出来た。

「これを話すとちよつと長くなつてしまいますけど」

そういつてスケアリーは私を見た。私とは、私のことである。

「作者さま。今回はあたくしの出番が少なすぎる上に美人だとか美人じゃないとかいろいろ言われて、あげくの果てにはいやらしい下着まで着せられましたわ。あたくしはあなたがこんなムカつくことをする人だとは思っていませんわ。ですけど、ガツカリしてしまいましたわ。でもこの償いとしてあたくしは次の章を乗っ取っている説明しますわ。そうさせてくれたら、きつと全てが説明されてあなたもきつと大助かりですわ。ホントに、作者だからって神のように振る舞えると思っていいたら大間違いなんですからね」

ということ、彼女がいろいろ説明するようだ。

## 29 スケアリーの説明

まずはじめに、どうしてあたくしがビューティー・アップ・サプリなんてものを飲んでいたかということから説明いたしませんといけませんわ。ヌリカベ君の説明を聞く限り、あたくしがおかしな行動をしたのはあのビューティー・アップ・サプリのせいということですから。でもあたくしは何も美人になれると思っただってビューティー・アップ・サプリを飲んでいたわけではありませんのよ。そのくらいはあたくしも解りますわ。だってあたくしは優秀な無免許医師なんですから。あたくしがあれを飲んでいたのはあれが理想的なビタミン剤だということを知っていたからなんです。エフ・ビー・エルのようなきつい職場で働いていると、食生活が乱れたり、生活が不規則になったりいたしますでしょ。そういう生活はお肌の大敵ですから、ビューティー・アップ・サプリでそれを補っていたんですの。

それが、どういうワケか私の買ったビューティー・アップ・サプリの中身が怪しい薬物に入れ替えられていて、このようなひどい事態になったということなんですのよ。モオルダアならきつと政府の陰謀だとか言うでしょうけど、これに関してはあたくしも説明することが出来ないんですのよ。ビューティー・アップ・サプリの中身を入れ替えた犯人が私を狙っていたのか、それとも標的は誰でも良かったのか。それによって捜査の仕方が大きく変わってしまいますわね。捜査のことは後回しにして、ここはあたくしがどのようにしてエッフエッフエドリンの悪夢から逃れることが出来たのかということをお話した方がよろしいですわね。中身の入れ替えられていたビューティー・アップ・サプリを飲み始めてからしばらくして、あたくしは自分の行動や思考がおかしくなっているのは薄々気付いていたのですけれど、それはエフ・ビー・エルという過酷な職場で働いているための影響だと思っただけなんですのよ。でもしばらくすると、これが仕事上のストレスからくるものだとは思えない状況だということが解ってまいりましたの。あたくしはまだベテランというには若すぎるお年頃ですが、それでも仕事のストレスだけでこれほどまでに精神がおかしくなることはあり得ないということは解っていますわ。

それで、あたくしは独自にあらゆる可能性を考慮してみたのですが、これといったものを見つけれないままですのよ。そうしているうちにあたくしの精神がいよいよおかしくなっていくって、ふと気付くとどこか知らない場所にいたり、或いは部屋にいたつもりがエフ・ビー・エルのオフィスにいたり、そんなことが続いていたんですの。

そんな状況が続くとあたくしはホントに不安になってしまいましたのよ。でもある時気付いたんですの。あたくしは不安になるたびにビューティー・アップ・サプリを飲んでいたということに。それであたくしはビューティー・アップ・サプリに関して調べていたんですけれど、その後は良く覚えていないんですの。だって、その頃にはもうあたくしの意識と無意識は区別できないくらいあたくしは何かに侵されていたのですから。

あたくしが最後に我に返ったのはモオルダアを襲った後でエフ・ビー・エルの職員に取り押さえられていた時ですわ。その時にはあたくしもビューティー・アップ・サプリが怪しいということに気付いていたのですから、それまでしばらくはビューティー・アップ・サプリを飲んでいなかったのだけど、それが良かったのかも知れませんが。あたくしは、もうすでに自分で自分が制御できていないということに気付いて最後の賭けに出たんですの。

あたくしは意識のあるうちに急いで家に帰ると、この前モオルダアを助けるために手に入れた動物用の麻酔薬の残りを持って車でこの別荘までやって来たんですの。(どうして動物用の麻酔薬をあたくしが持っているかということはこれまでのペケファイルを全部読んでない人には解りませんわね。ウフッ!) それで、この別荘に来るとあたくしは誰もこの部屋に入ってこれられないようにドアのところに柵を倒しておきましたのよ。こうやって言うと言と簡単なことのように思えますでしょうが、エッフエッフエドリンの影響を受けている状態でそんなことが出来るのはあたくし以外にいませんわ。

そのあとあたくしは自分の腕に麻酔薬を注射して眠っていましたの。それによってどうなるかは解りませんでしたけど、あたくしが意識の無いまま覚醒していて誰かに危害を及ぼすよりはマシでございませう?

それからあたくしは長いこと意識を失っていましたのよ。あたくしの姉やヌリカベ君や気絶したモオルダアがここへやって来るまで。あたくしの姉はモデルガンを持っていたモオルダアを悪人と間違えてスコップで殴ってしまったというのですが、それは仕方ありませんわ。モオルダアがおバカなんですから。そのスコップはドアをこじ開けようとして持っていたんですのよ。その後、あたくしの姉はヌリカベ君と協力してこの別荘のドアを開けて中に入ってあたくしを見つけたということなんですの。気を失っているモオルダアなんか置いて帰ってしまいましたけど、ここに来るまであたくしのことを一生懸命探してくれていたということなので、あたくしは医師として応急処置をしてモオルダアの意識が戻るのを待っていたということなんですのよ。

これでいろいろ説明できたのかどうかは知らないが、ここでスケアリーの説明はおしまい。

スケアリーの説明を聞いたモオルダアは、納得したようなしなやかな中途半端な感じだった。スケアリーが無事に見つかって、これでペケファイルの再開かも知れない。しかし、この事件はここで終わりということは決してない。妙な胸騒ぎが、少女的第六感がモオルダアに何かを訴えかけていた。

「キミはその無意識のうちにビューティー・アップ社に行っているよね？」

モオルダアがスケアリーに聞くと彼女は少し気まずい感じになった。

「ええ、まあ。行きましたわよ。社長室で警備員に取り押さえられている時に正気に戻ってそのまま逃げてしまいましたけど。まさか、あたくしが訴えられていたりするんですの？」

もしそれでもスケアリーは潔く自分の非は認めようというつもりらしい。特に慌てている様子もなかった。

「そうじゃないよ。逆にビューティー・アップ社ではキミがあそこに行ったことを隠そうとさえしている気もするんだ」

「どうして、そんなことをなさるんでしょう？ 企業のイメージが悪くなることを恐れているのかしら？」

「それだけなら良いんだけどねえ。ボクが思うにそれ以上の何か複雑な事情があるようなんだ。それよりも、ボクが聞きたいのはキミがどうしてビューティー・アップ社を襲撃したのか、ということなんだけど」

「襲撃なんて大げさですわ！」

勢いよくそういったもののスケアリーはすぐにうつむきかげんになり、ゆっくりと話し始めた。夢の中の出来事を一つずつ何とか思い出しているように。

「そうですわねえ。私がビューティー・アップ・サプリが怪しいと思って、そのことでいろいろ考えていたからかしら？ もしかするとあたくしはあのサプリメントの中身について詳しいことを聞きに行っただけかも知れませんわ。きっとその時に暴力の発作に襲われたんですわ」

それを聞いてもモオルダアはあまり納得がいかないようだ。彼にはもっと怪しげで根拠のない仮説があるのだから。

「それじゃあ、ボクを襲った時はどうだったんだ？ あれはボクに用があつて来た時に発作が起きたということ？ ボクはそうは思わないんだよね。ボクのいる部屋に入ってきた時に、ボクとキミとの間には何人もエフ・ビー・エル職員がいたんだ。もし、そこで発作が起きたのなら一番近くにいた職員を襲うはずだよ。それなのにキミは何人もいる職員の間を通り抜けてボクの方へ突進してきた。エッフエッフエドリンの作用で人を襲う時に、その相手は誰でも良いということではなくて、相手はあらかじめ決められているんだよ」



さつきからモオルダアの話が聞かされてイラついていたスケアリーは、姉の良く解らない発言が気に入らなかったようである。

「あたくしは何か協力できれば、と思って言っただけなんですのよ!」

姉は彼女を睨みつけるスケアリーを睨み返した。この恐ろしい姉妹の姿を見てモオルダアはどうすることも出来なかった。まずいことになった。どうしようか? なんだめたところでこの二人はおさまるのか?

「誰か来ました」

このヌリカベ君のこの一言がモオルダアには何よりの救いだった。しかし、いったい誰が来たというのだ? モオルダアが窓のところへ行き、そこに打ち付けられた板の隙間から外を覗いてみた。山の麓の方から車のライトがこちらへ向かって来るのが見えた。エフ・ビー・エルがこの別荘のことを知ってやって来たとは思えない。彼らにはやる気が全くないのだから。だとすると、警察だろうか。スケアリーの母親が捜査願いを出したのならこの別荘へやって来てもおかしくはない。しかし、その車は回転灯を点けていなかった。どうやら警察でもなさそうだ。

「早くここを出た方が良いみたいだ」

モオルダアはそういって出口へと向かったが、誰もついてこない。

「どうして出た方が良いんですの?」

そう聞かれてもモオルダアには良く解らない。ただ嫌な予感がするのである。

「ヤツらが来たんだ!」

苦し紛れにそう言ってモオルダアはドアを開けると早く外に出るように促した。これを見て、スケアリー達もとりあえず納得したようで慌てて外へ出た。

モオルダアは他の三人が各自の車やバイクに乗るのを見ていたが、ここである問題が発生していた。ヌリカベ君のバイクの後ろは怖いのもう乗りたくない。という事はスケアリーの車の助手席に乗ることになるのだが、果たしてそこは安全なのだろうか? 彼女がエツフェツフェドリンの影響でまた凶暴化しないとも限らない。しかし、ここでさつき会ったばかりのスケアリーの姉の車に乗るといふのはあまりにも不自然だ。

「ちよいとモオルダア! グズグズしないで早く乗りなさい!」

ドアを出たところでブーツとを考えていたモオルダアはスケアリーのこの一言に思わず「はい」と返事をしてスケアリーの車に乗り込んだ。



この別荘の方へ向かっていた車はもうすぐ近くまで来ているだろう。スケアリーはその車に見つからないように、近づくと反対の方へ進んでそこから国道へ出る道を進んだ。姉とヌリカベ君も後に続いた。

### 31 車内

モオルダアは助手席からリアウィンドウ越しに後方を確認した。スケアリーの姉の車とヌリカベ君のバイク以外には何も彼らを追いかけてくるものはない。これで一息つけるはずのだが、モオルダアにはいろいろな納得のいかないことだらけである。モオルダアはスケアリーに襲われてから、こうしてスケアリーの車で別荘へやって来た謎の車から逃げている今までの出来事を何度も思い返してみた。全ては関連しているようにも思えるのだが、そう考えても個々の出来事が一つの線で上手くつながらない。こう言う時には、必ず裏で糸を引く人物がいるものなのだ。これは全てが偶然とそこから発生する必然のつながりで起こる事件とは思えない。

モオルダアはここで引き返して、別荘に来たのが誰なのか確認すべきかとも思った。しかし、今さらそんなことを言ったらスケアリーの機嫌が悪くなるに決まっている。しかも、もしスケアリーが怒ってモオルダアを車から放り出すようなことがあったら、彼のこれまでの苦労が水の泡。彼がまず始めにすべきことはスケアリーを連れて帰ることだ。ペケファイルを開き直して、彼のこれまでの苦労が水の泡。彼がまず始めにすべきことはスケアリーを連れて帰ることだ。必要なのだ。そうでなければ彼はバイトの雑用係だから。

モオルダアは落ち着かない感じであれこれ考えていた。車はもうすでに山あいを抜けて平地の真っ直ぐ伸びる高速道路をひた走っていた。道の両脇にはビルの明かりも見え始めている。このまま夜の交通量の少ない道路を走っていれば一時間ほどで東京に着きそうだ。

「ちよいと、モオルダア。さつきからそわそわして、気味が悪いですわ！もしかして徐々に美人の隣に座って緊張しているんですの？」

モオルダアの頭の中はそれどころではないのだ。しかし、ここでモオルダアが思ったままをスケアリーに言ったら、スケアリーの機嫌を損ねることになるかも知れない。モオルダアは出かけた言葉を飲み込むと「へへ」と笑っただけだった。それがスケアリーには余計に気味が悪かった。スケアリーは前方から目を離して一度モオルダアを見た。スケアリーの苛立ちに満ちた視線を感じながら、モオルダアは車から放り出されないように祈っていた。

モオルダアは、何があっても大丈夫なようにスキヤナー副長官にスケアリーを無事発見したことを連絡しようと思った。上手くいけばこの場でペケファイル再開ということになるかも知れない。モオルダアは携帯電話を取り出してスキヤナーに電話をかけた。

スキヤナーは低く、くぐもった声で電話に対応した。

「モオルダアか。どうした？」

「副長官。スケアリーを見つめましたよ。約束どおりペケファイルは再開ですね？」

「そうか、それは良かったな」

素晴らしいながらスキヤナーは最初に電話を受けた場所から移動したらしく、電話の向こうでガタガタという音が聞こえたあと、さっきよりは明瞭な声で話し始めた。

「それじゃあ、ここで私の幽体離脱の体験談でも聞いてもらいたいところだが、そうもいかなかったんだよねえ」

モオルダアの表情が曇った。「少女的第六感」はいつでも正しい。なにか悪いことが起こったに違いない。

「何か問題でも？」

「それがねえ、例の双江さんっていただろう？ 私はてっきり死んでしまったと思ったんだが、奇跡的に弾丸が急所をはずれていたんだよ。意識は無かったけど命に別状は無いということで。それで病院に入院してただけだな」

「それが問題なんですか？」

「いや、そうじゃないよ。ついさっき双江さんが病院から脱走したという連絡が入ったんだ」

モオルダアはこれを聞いて、言い知れぬ恐怖を感じると共に、そんなことが本当にかと可能なのかということを考えていた。銃で撃たれて意識不明だった女性が、意識が回復するなり立ち上がって病院から逃げたというのか？ しかし、双江さんはいまだにエッフエッフエドリンの影響下にあるのかも知れない。元々エッフエッフエドリンは兵士の身体能力を高めるために開発されたものなのだ。そういう薬品を使えばそれぐらいは可能なのかも知れない。しかし、問題は病院の警備だ。いくら相手が女性で意識不明といっても、彼女は婚約者を斧で襲って足をちよん切ったのだ。そんな患者には警備がつくの普通だ。

「双江さんには警備が付いてなかったんですか？」

「それがおかしいんだ。私の指示で双江さんの病室では警察が交代で警備をするはずだったんだよ。それが病院に確認

すると私のいない間に誰かが来て警察を引き取らせたというんだよ」

聞いているうちにモオルダアはこれまで一つの線をつながらなかった出来事が、少しずつ整然とした形で並んでいくような感じがしていた。しかし、それは依然として複雑で入り組んだものである。

「中場さんはどうなんです？ 双江さんが狙っているのはフィアンセの中場さんですよ」

「それなら大丈夫だ。私がいるのは中場さんの入院している病院なんだ。双江さんの脱走を知って私が病院内と周辺に警察を配備しておいたから、ここは安全なはずだ。しかしねえ、双江さんのいた病院とこの病院はそれほど離れていないけどね、いまだに彼女が現れないんだよ。キミには何か思い当たるところがあるのか？」

モオルダアにはビューティー・アップ社の他に思い浮かぶ場所はなかった。

「副長官。ここはボクにまかせてください」

「まかせてください、って言われてもキミは何か知ってるのか？」

モオルダアはスキヤナーに彼の知っていることを話す気はなかった。彼に知らせれば警察やエフ・ビー・エルが動き出す。そうなれば今度はホントに双江さんが射殺されるかも知れない。或いは双江さんと一芽実田社長の二人ともそうなるかも知れない。とにかくことを大きくしては裏で動いている誰かがやりやすくなるだけなのだ。このエッフエッフエドリソ事件の真相を暴くには双江さんも一芽実田社長も重要な証人になるに違いないのだ。

「優秀な捜査官の第六感ってやつですよ！」

そう言うとモオルダアは電話を切って無理矢理会話を終わらせてしまった。こんなことをしたらペケファイルの再開はおあずけになってしまうかも知れないのだが、盛り上がってきたモオルダアにはそこまで考えることは出来ない。

「スケアリー、緊急事態だ！ もつととばしてくれ！ 行き先はビューティー・アップ社のビルだ！ 今からならまだ間に合う！」

モオルダアがビックリマークだらけでスケアリーに言った。

「何なんですの、もう」

スケアリーは迷惑そうにモオルダアを見た。一瞬これにひるんでしまったモオルダアだが、両手をあわせて顔の前に持ってくる。「お願いだから…」と弱々しく言った。スケアリーは渋々アクセルを踏み込んで車を加速させた。スケアリーの高級セダンは一気に加速して後続の車を引き離していった。

## 32 怪しい部屋

薄暗い部屋に電話の音が響き渡る。男が受話器を取ると黙ってそれを耳に当てて電話の向こうの声を聞いていた。話が終わると男は一言「よろしい」とだけ言って受話器を置いた。それから傍らにあったウイスキーのビンを握ってそのまま一口流し込むと、彼は再び受話器を持ち上げて別のところへ電話をかけた。

「スケアリーは失敗した。そっちの方をよろしく頼む」

そう言って、静かに受話器を置くと、また一口ウイスキーを飲んだ。

## 33 真夜中のビューティー・アップ社

ビューティー・アップ社のビルはもうほとんど明かりが消されていて、周辺にもほとんど人通りはない。その暗がりの中を白い人影がビルの入り口に向かって動いていく。それは入院着を着た双江さんだった。彼女がまだエッフェル・フェドリンの影響下にあることは彼女の容姿をみればすぐに解る。入院着を着て裸足で外を歩き回る双江さんは前にもまして美人になっていた。

双江さんは、ビルの入り口のガラス扉を開けようとしたがそこは鍵が掛かっていた。それに気付くと彼女は扉から少し離れると、そこから扉に向かって突進した。彼女の体が扉にぶつかった瞬間、ガラスに無数のひびが入り放射状に広がったかと思うと、次の瞬間にはバラバラに砕け散った。双江さんはガラスの破片とともにビル内へ転がり込んだ。ガラスの破片が額を切ったのか、双江さんは血を流していたが、何ともないという感じで立ち上がると、そのまま奥へと入っていった。

これだけ派手な侵入者があるにもかかわらず、警報機は鳴らなかった。このビルに警報機が設置されていないわけではない。この夜に限ってなぜか警報機が動作しなかったのだ。

先程からこの様子を見ていたものがある。彼はビルから道路を挟んだ反対側の歩道にある街路樹の影に隠れていたが、双江さんがビルの中へ消えるとその後を追うようにビルの中へ入っていった。

それから何分もしないうちにスケアリーの車がビューティー・アップ社の前に到着した。車の中にいるモオルダアからもビルの入り口の扉が壊されてガラスの破片が散乱しているのが解った。モオルダアは車が止まるなり車を降りると

一度ビルの上の方を見上げた。最上階にある一室だけ明かりがついている。これを見るとモオルダアは慌ててビルの中へかけていった。

「ちよいとモオルダア！ いったい何がどうなっているんですの？」

後ろからスケアリーが聞いたがモオルダアにはほとんど聞こえていなかったようだ。これまでほとんどちゃんとした説明をされていないスケアリーはムツとしながら車を降りたが、ビルの入り口の状態を見て何か事件が起きていることは解った。

社長室のドアが開くと一芽実田社長は静かに顔を上げて入ってきた人物を確認した。彼女の前にある机は綺麗に整頓されていて、彼女がこの時間まで職務に追われていたという感じはしない。彼女はこの来客を待っていたのだ。

一芽実田社長はドアのところで薄笑いを浮かべている双江さんを見るとゆっくり立ち上がった。

「お待ちしておりました」

一芽実田社長は笑顔でこういったが、目には涙をいっぱいにためていた。彼女は双江さんを知らない。しかし、ここに誰かが来ることは解っていて、それで夜遅くまでこの部屋で待っていたのだ。

「私のしたことで貴方にまで迷惑をかけてしまいますね。ホントになんて謝ってたら良いのか。でもきつとあのエフ・ビー・エルの捜査官なら貴方を助けてくれるはずです。貴方には何の罪もないことを証明してくれるでしょう。…こんなことを今の貴方に言っても理解できないでしょうけど」

双江は一芽実田社長がこう言うのを聞いているのかどうか解らない。気味の悪い薄笑いのまま、虚ろな瞳を一芽実田社長に向けていた。そして間もなく一芽実田社長に襲いかかった。一芽実田社長は双江が向かってくるのが解って目を閉じると、あふれ出た涙が彼女の頬にひとすじの線を描いて流れていった。

モオルダアはエレベーターの中でなかなか最上階に到達しないエレベーターの表示を眺めてイライラしていた。もちろんエレベーターはいつもどおりの速さで動いているのだが、今の彼にはこれほど遅いエレベーターはなかった。その中でモオルダアはふと気付いた。スケアリーと一緒にいない。彼は上着の下のモデルガンに手を当てて考えた。もし、双江さんがモオルダアに襲いかかってきたらこんなオモチャでは太刀打ちできないだろう。本物の銃を持っているスケアリーがいたほうが…。そこまで考えたが、それは良くない考えだった。もし誤って双江さんを殺してしまうようなこ

とがあれば、この事件の証人がいなくなる。

やがてエレベーターは最上階に到達してドアが開いた。ちょうどそのときガラスの割れる音と、それに続いて銃声が聞こえた。モオルダアはエレベーターを飛び出して社長室へ走った。

社長室の開けっ放しのドアから冷たい風が廊下の方へ入ってきていた。さっきの音は社長室の窓ガラスが割れた音に違いなかった。何かが窓ガラスにぶつかってガラスが割れたのだ。そして、その何かはそのまま下に落ちていったのかも知れない。いったい何が？ モオルダアは頭の中の恐ろしい光景を振り払うことが出来なかった。

開けられたドアから社長室の中を覗くと、まず倒れている双江が見えた。彼女にはもう奇跡は起こらなかったようだ。額の真ん中に穴を開けた双江が横たわっている辺りは彼女の流した血で赤く染まっていた。ここでいつもなら腰を抜かしかねないモオルダアだがドアの影に立っていた人物に気付いてそれどころではなかった。

「クライチ君!？」

モオルダアが絞り出すようにしてかすれた声を出すと、クライチ君が振り返った。明らかにうろたえている彼の手には拳銃が握られていた。

「仕方なかったんです。こうしなければ私も……」

こう言うクライチ君の表情は極度の緊張のためか、ほとんど固まっているようだった。

モオルダアにおいて行かれたスケアリーはビルの一階でエレベーターが降りてくるのを待っていた。ここには他にエレベーターが無く、階段へ続くドアは鍵がかかっている使えなかったのだ。スケアリーには最上階で何が起きているのかまったく想像できなかったが、それだけに不安は増していった。彼女も先程のモオルダアのようになかなか降りてこないエレベーターの表示を見ながらいらついていた。

しかし、彼女が最上階に上がる前に全ては終わってしまったのである。ビルの出入り口のすぐ外で大きな音がした。それは何か大きな物が落ちてきて地面と衝突した音だ。スケアリーは驚きで全身の筋肉が一瞬硬直したのを感じたが、すぐに体が反応して彼女は出口の方へ向かった。

「あらまあ……」

青ざめたスケアリーは片手を口にあてて立ちつくしてしまった。彼女の前には最上階の社長室から投げ出された一芽実田社長が横たわっていたのだ。

一時間もするとビューティー・アップ社のビルの周りは警察やエフ・ビー・エルの人や車でごった返しという感じだった。中には数人の報道関係者も来ていたが、これは彼らにはさほど興味を惹く事件ではないようだ。新聞の一面やテレビのトップニュースにするには少し派手さに欠けるということなのだろう。ただしビル最上階から落下したのがビューティー・アップ社の一芽実田社長だと解れば、相当な騒ぎになるかも知れない。

モオルダアは先程から警察に事情を聞かれている。警察の質問に答える彼の表情にはほとんど活力が感じられない。これで終わりなのだ。双江さんと一芽実田社長が消えてエッフエッフエドリンなんてものは誰にも知られることはないだろう。それが、この事件を影であやつる人間の書いた筋書きだったのかも知れない。いずれにしても今のモオルダアは無力だった。

モオルダアは警察にこう話した。「ビューティー・アップ社の前を通りかかるとビルの扉が壊されているのに気付いたので、エフ・ビー・エルの捜査官として中を調べた。その時、唯一明かりのついていた最上階の部屋へ行くともう全ては終わっていたのだ」そう話して、それ以上は何も話さなかった。彼が手に入れた証拠や彼の推理を話せば、彼が変人あつかいされるだけ。なんの根拠もないそんな話はするだけ信用されなくなるのだ。

失意の中にあるモオルダアがこの事件現場の慌ただしい雰囲気の中で行われた最後の隠蔽行為に気付くことはなかった。彼がうつむきかげんで警察と話している間に、警察でも医療の関係でもない車に双江さんと一芽実田社長の遺体がのせられてそのままどこかへ消えていったのだ。

一方、同じ頃に事情を聞かれていたクライチ君もだいたいモオルダアと同じことを警察に話したようだ。それはなぜだか知らないが、ビューティー・アップ社の前で張り込んでいたことは話さなかった。ただ「自らの身分を名乗って双江を制止させようとしてもそれを聞かず、彼は襲われそうになったので銃の引き金を引いたのだ」というところは強調して話した。

そして二人と同じく事情を聞かれていたスケアリーだったが、彼女は警察の質問に真面目に答えている場合ではなかった。少し離れたところにいるモオルダアとさらに離れたところにいるクライチ君を交互に眺めながら、警察の質問には適当な返事をしていた。ここ数日間の記憶がいまいちなスケアリーはその間に何が起きていたのか気になって仕方がない。あの蔵衣地という捜査官は何者なのか？ それからモオルダアはどうしてあんなに落ち込んでいるのか？

何を聞いてもスケアリーからは手応えのある返事がこないので隣にいた刑事はあきれていたが、一通りの質問が終わ

ると形だけの礼を述べてその場を立ち去った。この現場にいた三人ともエフ・ビー・エルの捜査官であるので、警察もそれほど彼らに疑惑の目は向けていないのであろう。スケアリーはそれにも気付かず、その場でモオルダアとクライチ君を眺めていた。

### 35 翌日、エフ・ビー・エル・ペケファイルの部屋

モオルダアは一人この薄暗い部屋におかれた椅子に座って何かを読んでいる。スキヤナーが約束どおりペケファイルを再開させて、エフ・ビー・エルには再びモオルダアの居場所ができたのだ。しかし、モオルダアの顔色はすぐれない。読んでいた書類を机の上になかば投げ出すようにして置くと「こんなはずじゃないのに」とつぶやいた。このあいだのビューティー・アップ・サプリに関する後味の悪い事件からずっとモオルダアは浮かない表情だったのだが、彼の読んでいたその書類が追い打ちをかけたようだった。

その時、ペケファイルの部屋の扉が開いてスケアリーが入ってきた。彼女は入って来るなり「もう、イヤになっちゃいますわ!」と言ったが、その言葉とは対照的に彼女の動きは活力に満ちている。スケアリーは別にイヤになることなくてもイヤになっちゃうタイプの人間なのだ。つまり「イヤになっちゃいますわ」は彼女の口癖。モオルダアもそれには気付いていたから、何も言わずに薄暗い表情のままスケアリーを見ただけだった。

「あら、どういたしましたの。そんな死人のような顔をして?」

そう言うスケアリーの顔を見ていたモオルダアは彼女の变化に気付いてギョツとしていた。彼女の顔つきが昨日とは少し変わっているのだ。まさかまたスケアリーに襲われるのでは、とモオルダアは心配になってきた。

「なんだかキミ…」

その後の言葉が出てこない。

「ちよいとモオルダア、言いたいことがあるならハッキリ言えば良いんですわ。でもあたくしがどんどん美しくなるのに驚いているのも解りませうけども」

どうやらスケアリーも自分の顔つきの变化に気付いているようだ。

「これどう思います? 検査の結果が出るまでヒマでしたから、雑誌に載っていたメイク方法を試してみたんですの。まああたくしは元が良いからどんなメイクでもバッチリきまってしまうのですけど」



それを聞いてモオルダアは安心した。もうスケアリーが怪しい薬物入りのサプリメントを飲んでいるということはないようだ。

「良いんじゃない」

モオルダアは適当な感想を言った。本当に思っていることを言ったらスケアリーの機嫌が悪くなるだけだ。

「ところで検査の結果は？」

「ダメでしたわ。私の体内にはもうエッフエッフエドリンなんてものは残っていませんでしたわ」

モオルダアはこの報告を聞いてまたさらに表情をくもらせた。凶暴化していた双江さんの遺体があれば彼女がエッフエッフエドリンの影響下にあったことが証明できるのだが、彼女の遺体は何者かに持ち去られてしまったのだ。最後の望みはスケアリーだけだったのだが、彼女の体内にエッフエッフエドリンが残っていないことは始めから解っていた。それでもモオルダアがどうしてもというのでスケアリーはしぶしぶ検査を受けたのである。

「そんなに落ち込むこともありませんわ。ビューティー・アップ・サプリに変な薬物を入れた一芽実田社長には天罰が下ったということですわ」

「それなら良いんだけどねえ。キミはホントに一芽実田社長が自分の会社の製品に薬物を入れると思うのか？ あの事件は誰かに仕組まれたものなんだよ。ボクらはまんまと彼らの書いた筋書きどおりに行動してしまっただ。それで、もしかすると助けられたかも知れない二人を犠牲にしたんだ」

そう言ってモオルダアは机の上に置かれた、さつき彼の読んでいた書類をスケアリーに渡した。スケアリーがそれを見ると、手書きの細かい文字が一面にビッチリ書かれていた。書き出しの部分を読んでもみると、それはモオルダアに宛てられた手紙のようだった。

「何なんですの？ これは」

スケアリーはこの几帳面で細かい文字を何枚も読む気にはなれなかったのでモオルダアに聞いた。スケアリーの期待どおりモオルダアは内容を説明し始めた。

「この手紙には書いた人の名前がないけど、これを書いたのは元ビューティー・アップ社の警備員であり、一芽実田社長の熱烈なファンでもある男が書いたものなんだ。今朝その男が直接ボクに渡しに来たからそれは確かだよ。一芽実田社長への熱い思いからだと思うけど、所々に脚色されたような感じはあるけどねえ。でもここに書かれたことが真実であるならば今回の事件は決してこれで解決とはいきそうにないんだ」

「それで、そこにはなんて書いてあるんですの？ 要点をまとめて話してくださいるかしら？」  
もったいぶって話し始めたモオルダアをスケアリーが急かしている。要点をまとめる、といってもこれだけ長い手紙の要点をまとめるのは少し苦勞しそうだ。モオルダアは少し考える間をいってから再び話し始めた。

「まず始めに驚くべき真実が書かれているんだ。一芽実田社長は美田時子として芸能活動をしている時代に殺人を犯している。でも美田時子は何の嫌疑をかけられることもなく、その後芸能界を引退してビューティー・アップ社の社長になったんだ。殺されたのは美田時子が当時交際していた映画プロデューサー。彼女はそれまで売れないアイドルだったんだけど、女優に路線変更してからはそこそこの仕事も来るようになっていたみたいなんだ。でも問題は彼女の変化なんだ。女優に転向してから彼女の顔つきは少しずつ変わっていった。それはもしかすると年齢と関係しているのかも知れない。二十歳をこえたぐらいから顔つきががらりと変わる女性って多いから。でも彼女の場合それだけじゃなくて性格まで変わっていったということなんだ。女性としての美しさに磨きがかかる一方で、撮影現場では終始イライラしてスタッフに暴力をふるうことさえあったということなんだよ」

モオルダアはここまで話して一度スケアリーの顔色をうかがった。

「つまり、一芽実田社長はエッフエッフエドリンを使っていたということですか？」

いつものように怪しい話を始めたモオルダアに向かってスケアリーは疑念の表情を向けていた。

「その可能性は大いにあるねえ。問題は誰が美田時子にエッフエッフエドリンを与えたか、ということだけだね。この手紙を書いた男は美田時子ひとすじという感じで、彼女の関わる仕事のスタッフのことやら事務所の人間のことまで知っているのだけど、それでもいわゆる『追っかけ』にそれ以上のことは解らないよねえ。彼にも美田時子のプライベートまでは解らなかつた。でも後で映画プロデューサー殺害のことを一芽実田社長から聞かされて、彼女の背後に謎の男がいることも解ったんだ」

モオルダアはまだスケアリーが話に着いてきているかを確認するためにここで間をあけた。スケアリーが「それで？」と言うのを確認して先を続けた。

「この手紙を書いた男は美田時子が芸能界を引退して一芽実田塗黄子としてビューティー・アップ社の社長になっても『追っかけ』は辞めなかつた。一芽実田社長もビューティー・アップ社の警備員の面接に訪れた彼を覚えていたみたいなんだ。何しろ彼は美田時子が売れないアイドルだった時からどんな小さなイベントにも顔を出していたから。どうや

ら彼女も彼のことを頼りにしている部分があったらしいんだ。地方の小さなイベントでタチの悪い客が来ていたりすると、その男がファンを代表して客席のごたごたを解決していたということだからね。そんな感じで彼はビューティー・アップ社の警備員として採用されたんだ。それだけではなくて、時には一芽実田社長の相談相手として社長室に呼び出されることもあったそうなんだ。もちろん会社の経営とかに関する相談ではなくて、一芽実田社長の精神的な支えという感じだよ。まあ二人の関係はそれ以上にはならなかったみたいだけど、手紙の中の表現をかりるなら『二人は心の底では通じ合っていた』ということらしいよ。まあ、そんなことはどうでもいいけどね。そうやって一芽実田社長の話を聞いているうちに彼女が犯した殺人のことを聞いたらしい」

要点をまとめると言ったのに、全然そうならない話にスケアリーは飽き飽きしていたが、ここで殺人の話がやっと出てきて興味を取り戻すことが出来た。

「いくら頑張っても売れそうにない美田時子は引退を考えていたらしい。でもそんな時に魔法の薬を持った謎の男が現れて彼女に映画のオーディションを受けるように進めたらしいんだ。男の言うことを信じて薬を飲み続けていると不思議と自分が以前よりも美人になってくる。女優としてもそこそこ知られるようになってきて、とうとう主演女優として撮影が始まった頃には売れないアイドル時代とはまったく別人と思えるくらいの美人になっていたそうだよ。主演女優と言っても誰が見るかも解らないVシネマだけどね。でも撮影が終わる前にその映画はお蔵入りになってる。プロデューサーが殺されてしまったからね。一芽実田社長はこの時の記憶が全くないにもかかわらず、殺したのは自分だと言っているんだ。それも無理はないよね。ホテルの一室でふと我に返ると辺りは血だらけ。しかも手には彼を刺し殺す時に使ったであろうペーパーナイフが握られていたんだから。そこへまた謎の男が現れた。その男の手によって事件は闇に葬り去られると同時に一芽実田社長はどうにも出来ない弱みをその男に握られてしまったと言うことなんだ」

「ちよいと待っててくださいませんか？ それって本当にその手紙に書かれていたことなんですの？ なんだかあなたの作り話を聞いているような感じになってまいりましたわ」

スケアリーはたまらず話を遮った。モオルダアはこうなることを半分ぐらいは予想していたから慌てずに先を続けた。「まあ、キミが疑うのも無理はないけど。でもこれはちゃんとここに書いてあることだから。それでねえ、その謎の男によって殺人犯は別の男にされてしまって、その犯人にされた男は拘留中に自殺したことになっているんだよ。これは後で調べてみればホントかどうか解るはずだけど。それから一芽実田社長は謎の男に言われるままビューティー・アップ社の社長になったということなんだ。どうしてその謎の男がそんなことをさせるのか一芽実田社長には良く解らな

かったみたいで、この手紙を書いた警備員はよくその話を一芽実田社長から聞いていたみたいなんだ。殺人事件をもみ消してしまうような男がどうして一芽実田社長を使って美容のためのサプリメントなんかを売なのか。確かにおかしい話だよ。でもボクの考えでは、これはある種の実験だと思うんだよ。人体に何らかの影響を与える薬物を多くの人間に密かに投与するためにはどうすれば良いのか。それを調べるための実験だったんだと思うんだよ。そしてそれはほぼ成功したといえるんじゃないかなあ。キミでさえ気付かずにエツフェツフェドリンをサプリメントとして飲んでいただけ。普通の食べ物に変な味だったら食べないけど、錠剤っていうのは変な味がして当然だしね」

「それはそれでつじつまが合うかも知れませんが、だいたいその警備員の書いたことが真実である証拠がどこにもありませんわ」

「そうだよねえ」

モオルダアにしてはめずらしく彼女の反論を否定しなかった。

「ホントにこの警備員が言っているような謎の男がいるのなら、それを知っている警備員だって一芽実田社長と一緒に消されているかも知れないしねえ」

モオルダアは自信がなさそうに小さくなっていく。スケアリーはなんだかモオルダアが気の毒になってきた。

「それで、どうなさいますの？ その謎の男を捜すんですの？」

「さあねえ。警備員はボクに真実を暴いて欲しいなんて言ってたけどね」

「それなら、そうすればいいじゃない」

「でも、この手紙を手掛かりにしたところでビューティー・アップ社に関して新しい情報は得られないよ。今では今回の事件に関する証拠は全て消えているはずだよ。もし謎の男がいるのならね。でもボクらがペケファイルで捜査を続けていけばいつか必ず謎の男につながるはずなんだ。ボクはそんな気がするんだよねえ」

スケアリーは理解しているのかどうか解らなかったが「そう」と一言だけ答えた。それからモオルダアにはもう言うことがないようだと言っていると、彼女が話し出した。

「あたくし、そろそろお腹が空いてきましたからお昼を食べにいきますわ」

この薄暗い地下の部屋で沈みに沈んでいるモオルダアとは対照的にスケアリーは明るく見える。もちろんモオルダアの変な話を聞いている時は別だが。もしかするとペケファイルが再開されて一番喜んでるのは彼女なのかも知れない。

「キミなんだか…」

モオルダアはスケアアリーを見ながら言いかけたがそこで口を閉じた。生き生きとした彼女を見ているとなんだかいつもよりも輝いて見えた。いやもしかすると雑誌に載っていたメイク方法のためかも知れない。

スケアアリーはドアのところまで行くと一度振り返った。

「あなたもこんな薄暗いところでクヨクヨしていないで、外に出たらどうなんですか。なんだか最近のあなたは老け込んで見えますわよ。よろしかったらあたくしがお昼を御馳走してあげますわ。あたくしを探し回ってくれたお礼に」

自分に向かって笑みを浮かべ、思ってもいなかった言葉を口にしたスケアアリーにモオルダアは一瞬たじろいだ。

「ああ、そうなの？ でもボクはもう昼食を用意してあるから」  
そう言ってモオルダアはぎこちない感じで引き出しの中から今朝買ってきたビニール袋に入ったカレーパンをスケアアリーに見せた。

「あらそうです。人の好意を素直に受け取れないあなたは、そのカレーパンみたいだ袋の中でギトギトしてればいいんですわ。それじゃああたくしは一人でフレンチのランチをおいしくいただきますから」  
こう言ってモオルダアを睨みつけたスケアアリーはやはりいつものスケアアリーだった。

モオルダアはそれからしばらく机の上の手紙を眺めていたが、一度そこから目をそらしカレーパンの入った袋を見た。そのあと彼は手紙をまとめると封筒に入れて書類をまとめてある引き出しへと持っていった。彼は再び元の椅子に座るとカレーパンを手にとった。

「これでいいのかなあ」

そうつぶやいたモオルダアの瞳には何か吹っ切れたような輝きが感じられた。彼がカレーパンの袋を破くと、中からカレーと古びた油の混ざったとても食欲をそそると思えないニオイが漏れてきた。

「これでいいんだな」

手にしたカレーパンを見ながらまたつぶやくと、モオルダアは不味そうにそれを頬張った。



## #015 「GONE」

0

この話は Little Mustapha's Black-hole 内の別コーナー Black-holic で書かれた Little Mustapha 達の登場するフィクションに関連してまいります。そのために、この話の中だけでは多少の謎が残るはずですが、それでは気持ちが悪いです。そのため、別冊（というよりも別PDFファイル）に特典としてその Black-holic でのフィクション集を掲載します。それでも謎は解決しないかも知れませんが、それもまた the Poke-Files ということでもあります。

### 1 ヨシオ君とヨシオ君のお母さんとヨシオ君の家

昼の一時を過ぎ、ヨシオ君のお母さんはヨシオ君のために用意した朝食をゴミ箱に捨てたところだった。ヨシオ君は最近まったくヨシオ君のお母さんと顔をあわせていない。ヨシオ君のお母さんは「思春期の男の子などそういうものだ」と思うことで彼女の不安をなんとかごまかそうとした。

ヨシオ君は家にいる間、ほとんど自分の部屋から出てこない。時には本当にヨシオ君がこの家に住んでいるのかどうかすら解らなくなるほどだ。ヨシオ君のお母さんが心配になってヨシオ君の部屋の前で聞き耳を立てるとヨシオ君がパソコンのキーボードをたたく音は聞こえてくる。それを聞いてヨシオ君のお母さんはヨシオ君が何かに夢中になっていることは知っていた。しかしパソコンのことはまったく解らないヨシオ君のお母さんはそれ以上ヨシオ君のことを詮索することはしなかった。

しかしヨシオ君のお母さんは、そろそろ行動を起こさなければいけないところまで来ていた。この三日の間ヨシオ君は家族と顔を合わせないばかりか、学校にも行かずに部屋に閉じこもりきりなのである。

本当はもっと早くにヨシオ君の異常に気付くべきだったのだが、今となってはもう遅い。ヨシオ君のお母さんはヨシオ君の部屋に無理にでも押し入って、今のヨシオ君の身に何が起きているのかを知るべきだったのだ。しかしヨシオ君のお母さんにはそれが出来なかった。「愛情が足りなかった」などということは決して考えなくなかったが、ヨシオ君のお母さんには確信が持てなかった。

父親は仕事でほとんど家にいることがないため、ヨシオ君のことはほとんど彼女が世話してきた。彼女の育て方に間

違いがあったのかどうか、そんなことは到底解らない。つい最近まではヨシオ君は普通に学校に行き、帰ってくると母親と二人でその日の出来事を話したりしていたのだ。それが、突然部屋に閉じこもりがちになり、ついには出てこなくなった。たまに部屋から出てきた時にヨシオ君の姿を見ることはあったが、ヨシオ君のお母さんは彼を見るとまるで幽霊を見たかのようにゾクツクとしてしまうのだ。何かに取り憑かれたような薄暗い目つき。それにヨシオ君の体をすかして後ろの壁が見えるような錯覚。ヨシオ君に何かが起きていることはヨシオ君のお母さんには解っていた。

何かは知らないがヨシオ君はヨシオ君ではない何者かに変わってしまったのかも知れない。そんなことを考えると、ヨシオ君のお母さんは彼の部屋へ押し入るようなことは出来なかった。本当はそんなことは想像したくもないのだが、彼女がヨシオ君の部屋に入るなり、逆上したヨシオ君が襲いかかってくる光景が思い浮かぶ。

ヨシオ君のお母さんは彼の部屋の前にいきドアノブに手をかけた。「変な想像をして不安になるのは私の悪い癖。中に入ってゆっくり話せばきっと問題は解決するに違いない」そう思っただけで見たものの、ヨシオ君のお母さんはドアノブを回すことが出来ない。中からは絶えずパソコンのキーボードを叩く音が聞こえていたのだが、ヨシオ君のお母さんがドアノブに手をかけるたびに、何かの警告のようにキーボードを叩く音が大きくなるような気がしたのである。

ヨシオ君のお母さんがヨシオ君の部屋の前で逡巡していると、ヨシオ君の家のドアベルが鳴った。ヨシオ君のお母さんは少し救われたような顔をして玄関へ向かった。「やるべきこと」の順番が都合によって変わるの誰でも同じである。ドアベルが鳴ったおかげでヨシオ君のお母さんはヨシオ君との対面を後回しにすることが出来たのだ。

ドアを開けるとそこには学生服を着た中学生が二人立っていた。

「あら、あなた達はヨシオのお友達の…」

「はい。ヨシオ君が最近無断欠席してるから、様子を見に来ました」

一人の少年が多少モジモジしながら言った。ヨシオ君のお母さんはこれで本当に救われた感じがした。親に解決できない問題を友達が解決してくれることだってあるのだ。そんな風に思いながらヨシオ君のお母さんは二人を家に入れた。「わざわざ来てくれて。本当にヨシオはしょうがないわねえ。別に病気がってわけじゃないんですけどねえ」

二人の中学生はヒョコヒョコとアタマを下げながらヨシオ君の家にあった。二人はヨシオ君の部屋がどこにあるかを知っていたので、その先は二人だけで進んでいった。

ヨシオ君のお母さんは思いがけず訪れた二人のために紅茶でも入れようと台所へ向かっていた。そこへ、思いがけな



い声が聞こえてきた。

「あれ?! ヨシオのやついないじゃん」

これを聞いてヨシオ君のお母さんは思わず持つていたティーカップを落とすところだった。ヨシオ君がいらないとはどういうことか? ヨシオ君のお母さんは慌ててヨシオ君の部屋へと向かった。

開いたドアの前でヨシオ君の友達が部屋の中をながめている。一人がヨシオ君のお母さんに気付いた。

「ヨシオ君いませんよ」

ヨシオ君のお母さんは青ざめた顔を二人に見せないようにしながら、ヨシオ君の部屋に近づいてきた。

「あら、おかしいわね。トイレかしら?」

そう言ったものの、さつきから誰もトイレに入った気配は無かった。それよりもつきさつきまで部屋のなからはパソコンのキーボードを叩く音が聞こえていたのだ。

ヨシオ君のお母さんは恐る恐るヨシオ君の部屋を覗いてみた。カーテンを閉め切って薄暗い部屋の中にパソコンのモニターだけが煌々と輝いていた。だれも操作していないのにもかかわらず、そのモニターには次々に意味をなさない文字が表示されていき、先に表示されていた文字をどんどん上へと押しやっていた。

「ちよつと! ヨシオはどこへ行ったの?」

二人を押しつけて部屋に入るとヨシオ君のお母さんは誰に聞いたわけでもなく、わめくように言った。二人の友達はヨシオ君のお母さんがあまりにも動揺していることに驚いて、タダ彼女を見ているだけだった。そうしている間にもモニターには次々と文字が表示されていく。

「ヨシオー! ヨシオー!」

ヨシオ君のお母さんはそういいながらヨシオ君の部屋の中をグルグル回って、そのまま倒れ込んでしまった。ヨシオ君の友達の二人は驚いて後ずさりながら互いの顔を見合わせるのが精一杯だった。

## 2 妖怪ポストとモオルダアとスケアリー

ペケファイルの部屋へとつづく地下の廊下をスケアリーが鼻息を荒げて大股で歩いていく。彼女に何か気に入らないことがあったに違いない。彼女はそのままペケファイルの部屋までいき、勢いよくドアを開けるとモオルダアに向かっ

てまくし立てるに違いない。「ちよいと、モオルダア！ 何なんですよー！」という感じで。

スケアリーがペケファイルの部屋のドアを開けるまでは、予想どおりだった。しかし、彼女が勢いよくドアを開けた瞬間に何かドアにぶつかって多少派手な音を立てて倒れた。モオルダアに不満をぶつけようとしていたスケアリーはちよつと調子が狂ってしまった。スケアリーが倒れたものを見ると、そこには竹の棒の先に鳥の巣箱のようなものを付けた薄汚いものが倒れていた。

「ちよいと、モオルダア！？ 何なんですよ、これ？」

スケアリーは言おうとしていたセリフを予定とはまったく違った調子で言わざるをえなかった。

スケアリーがなんともいえない不思議な気持ちで倒れた何かを眺めていると、モオルダアは不機嫌な感じで立ち上がって、ドアのところまでくると倒れていたものを元のように立てた。よく見るとそれは巣箱ではなくて郵便受けのようだった。

「妖怪ポストだよ」

モオルダアがそれを立てると得意げに言った。古びた木材にツタなどが絡まっていて怪しげな雰囲気満載の作りになっている。しかし、どうしてこんなものがペケファイルの部屋にあるのか。そんなことはスケアリーに理解できるはずがない。

「ちよいと、モオルダア！？ 何なんですよ、これ？」

スケアリーがもう一度聞いた。

「だから、妖怪ポストだって」

だって、と言われてもスケアリーは少しも納得できない。彼女はモオルダアに不満をぶつけようとしていたことなどすっかり忘れて、あっけにとられてモオルダアを見ていた。

「つまりこういうことだよ」

スケアリーの様子を見てモオルダアが説明を始めた。

「ボクらは警察では解決できないような不思議な事件が起こると呼び出されて、そして見事にその事件を解決するだろ？ だからこの妖怪ポストはボクらにピッタリなアイテムということなんだ」

スケアリーは半分ぐらい理解していたが、少しも納得していなかった。

「つまり、こういうことごさいますよう？ 不思議な事件が起こったらこのポストに手紙を出すとあたくし達がやっ

て来て事件を解決する、ということですか？ でもこの部屋にあったら全然意味がないんじゃないですか？ ここまで来たのならあたくし達に直接相談すればいいんですわ。それに前回の話からエフ・ビー・エルにはお客様相談窓口が出来たみたいですから、こんなものは無用ですわ！」

確かに、そうかも知れない。モオルダアは言い返すことが出来なかった。

「でも、雰囲気は出てるだろ？」

モオルダアはどうしてもこの妖怪ポストをこの部屋に置いておきたいようだ。

「これ知人に頼んで3つ作ってもらったんだよ。一つはここに。あとの二つはボクの家の前と、キミの家の前にね」

「ちよいと！ なんてことをするんですの。あたくしの家の前にこんなものを置かれたら付近の住民から大ひんしゅくですわよ！」

「でも、もう決めちゃったから。今頃、その知人がキミの家の前に妖怪ポストを設置しているはずだよ」

スケアリーはこのあと何を考えるか考えていた。とりあえずモオルダアに鉄拳をくらわせるか、それともすぐに家に行つて妖怪ポストを捨ててくるか。そうしている間に、最初にしようとしていたことも思い出した。モオルダアを殴るのも妖怪ポストの廃棄もとりあえず我慢して、最初のテンションに戻らなくてはいけない。

「ちよいと、モオルダア！ 何なんですの！」

スケアリーからいきなり大きな声で怒鳴りつけられたのでモオルダアは少しビクツとなった。

「何って、何が？」

ここでモオルダアが変なアイテムを作ったせいでそれていた話をやっと本題に戻すことが出来る。スケアリーは今日これまでに起こった納得のいかないあれこれについて話し始めた。

「今日はあたくし早くに目が覚めてしまったものだから、早めにここに到着していたんですのよ。ホントにそれまではすごくステキな気分だったのに」

今の彼女の状態からはそんなステキな気分は少しも想像できない。

「それなら、警察からニコラス刑事って方がみえてるって言われたから、会ってみたんですのよ」

「ニコラス刑事って、以前一緒に捜査をしたちよつと男前の刑事のこと？」

「あたくしも始めはそう思ったんですけど、あのニコラス刑事様とは似ても似つかない定年間際の刑事さんでしたの」

「ああ、なんだ。それで機嫌が悪いのか」

モオルダアはそれだけ聞いて全てを理解したかのような口振りだったが、それでもなさそうだ。

「あたくしはそんなことで怒ったりはしませんわよ。それに、どうしてニコラス刑事さんが別の人だからってあたくしの機嫌が悪くなるんですの？…まあ、どうでも良いことですよ」

スケアリーはあのことと男前のニコラス刑事のことを話してしまいそうになったが、モオルダアに変な想像をさせないために、話を元に戻した。

「それで、そのニコラス刑事さんは少し厄介な事件が起きたから協力してくれてきてきたんですよ」

ここで少しモオルダアの目が輝きだした。

「それってもしかして警察にも解決できないような不思議な事件ってこと？」

「ちよいと、人の話は最後まで聞きなさいよ。あんなのはゼンゼン不思議な事件じゃありませんわ。ニコラス刑事さんのお知り合いが二三日行方不明になっていて、警察に捜索願が出されていたんですけど、でもそれは警察で捜査するよいうな失踪事件じゃなかったんですよ」

「なんだか、言ってることが良く解らないなあ」

「あたくしも、最初はそう思いましたわよ。それで詳しく聞いてみると、その失踪なさった方は家にもいないし、携帯電話にも出ない。しかもいなくなる直前まで友人と一緒にいたそうなんですのよ。それが、その友人がちよつと席を外していた間にいなくなってしまうって、それっきりだったんですよ」

「それだったら、普通の失踪事件じゃないか？」

「そうなんですけど、警察がわざわざ捜査をしない決定的な理由があったんですよ。その人は失踪しているにもかかわらず自分のブログを毎日更新していたそうなんですのよ」

「なんだよそれ?! それじゃあ失踪じゃなくて、外出中ということじゃないのか?」

「そうですね、その人は誰にも行き先を告げずに旅行をする人じゃないし、何かの事件に巻き込まれた可能性もあるってニコラス刑事さんも言ってましたし、あたくしニコラス刑事さんと一緒にその方の家に行ってみたんですよ。薄汚い家に行くと、その方の友人達がいたから、あたくしがいろいろお話をうかがっていたらすごいことが起きたんですよ」

スケアリーにしてはめずらしくもったいぶった話し方をしている。きっとすごいことが起きたに違いない、と思ってモ

オルダアは「すごいこと!？」と聞き返した。

「なんと、その失踪していた人が帰ってきたんですのよ。あたくしがあつげにとられているのも気にせずに、そこにいた方達は大喜びでその人を迎えていましたわ。しかも、その後がひどいんですのよ。ニコラス刑事さんは私に向かつて、もう解決したからキミは帰っていいよ、なんて言うんですのよ! まったくひどいじゃありませんこと? あたくしを呼び出しておいて、お礼の一つもしないで『もう帰っていいよ』ですのよ! ちよいとモオルダア! いったいどういうことなんですの!」

どうやらスケアリーの怒りがまた再沸騰している感じになってきた。モオルダアはここで何か上手い方法でスケアリーを取めないといけない。

「それは、大変だったねえ。ところで、その事件はそれで解決でいいのかなあ? 『その人』というのが、姿をくらましていた数日間のこととか、どうやって友人の前から姿を消したのか、とかいうことは調べなくてもいいの?」

「そんなことはどうでもいいんですのよ! あたくしはもう気分が悪くて仕方がないので、今日は帰らせてもらいますわ! 後はあなた一人でやってくださいな! もしかすると、妖怪を退治して欲しいって人が来るかも知れませんかね」

そう言っただけでスケアリーはペケファイルの部屋を出ていった。スケアリーの怒りは収まらなかったが、モオルダアが痛い目に合わずに済んだのでモオルダアはとりあえず胸をなで下ろした。そのまましばらくスケアリーの出ていったドアを眺めていたモオルダアだったが、不意に思い出したように「そうだ、メールチェックしないと」とつぶやくと、彼もペケファイルの部屋を出ていった。

### 3 モオルダアと社会の層と妖怪ポスト

モオルダアの言っていた「メールチェック」とはもちろん彼の家の前に設置された「妖怪ポスト」へのメールをチェックすることだった。駅から彼の家に向かって歩き、ポストが見える場所まで来た時にモオルダアの胸は予想以上に高鳴っていた。遠くからポストを見るとポストに入りきらない大量の手紙がポストの口からあふれ出しているのだ。「やっぱりボクぐらいになると違うなあ。何の告知もなしに設置した妖怪ポストに、もうあんなに沢山手紙が来てるよ!」この喜びがそう長くは続かないと解っていないのはモオルダアだけかも知れない。

ポストの前まで来た時にモオルダアは怒りのような落胆のような、或いはなぜか笑いがこみ上げてくるようなバカバカしい悔しさといったような、変な気分になっていた。ポストの中には通行人が捨てていった雑誌やタバコの空き箱、あんパンの袋。そんなものばかりが入っていた。もちろん手紙らしきものがないわけでもなかった。ポストイングのバイトが適当に突っ込んでいったであろう消費者金融のチラシが十枚ほど、どれも同じものだった。

モオルダアがボンヤリポストの中を眺めていると、ふとイヤなことを思いついてしまった。もしも、スケアリーの家の前に置いてあるポストもこんなことになっているとしたら？ そんなことになっていたらタダでは済まない。それだけでなく今日の彼女はかなり機嫌が悪かったのだから。しかし、どうしたら良いのだろうか？ 今からスケアリーの家に行って密かにポストを撤去することは不可能だろう。きっとスケアリーはもう家についているはずだ。

モオルダアはしばらく考えた末にスケアリーに電話することにした。彼女の怒りが爆発する前にとりあえず謝っておこう、と良く解らない結論に達したようである。

モオルダアが携帯電話を取り出したちょうどその時、電話がけたたましく鳴り出した。本当はいつもと同じ音量でなっていたのだが、モオルダアには「けたたましい」音に聞こえたのである。携帯電話のディスプレイにはスケアリーの名前が表示されていたからである。「遅かったかあ！」モオルダアはため息混じりにつぶやくと、しばらく躊躇した末に電話にでた。

「どうもすいませんでしたあ」

モオルダアはどうしても先に謝りたかったようである。スケアリーが何かを言う前に卑屈さ満載で謝った。

「ちよいと何なんですの、モオルダア？」

スケアリーは驚いた様子だったが、その口調に怒っている感じはなかった。モオルダアは少し決まりが悪い。

「いやあ、何でもないんだけどね。ちよつとしたユーモアさ」

何がユーモアか解らないが、そこを気にしても仕方がない。スケアリーもその辺はちゃんと解っている。

「それよりもモオルダア。事件ですよ。警察にも解決できないような不思議な事件が起きたんですの。ですからちよつとあたくしの家まで来てくださらないかしら？」

「何でキミの家なんだ？ キミの家で事件なの？…あ、もしかして妖怪ポストに？」

「そうですよ。だからわざわざ警察にも解決できないような不思議な事件、っていつてさしあげたのに。まったく鈍いですわ！ とにかく今すぐに来るんですよ！」

モオルダアはニヤニヤしながら携帯をしまうと、ゴミだらけの彼の家の前から急いで彼女の家へと向かった。

#### 4 少年達とスケアリーとヨシオ君の部屋

スケアリーの家の前に設置された妖怪ポストは周囲の環境に合わせてステンレス製だった。新築の家の玄関先に置いてありそうな郵便受けのようではあったが、ポストの正面にはモオルダアが書いたと思われる「妖怪ポスト」の文字が刻まれていた。それさえなければ、この妖怪ポストは郵便受けとして使われることもあったかも知れないのだが、この出来たての妖怪ポストが役に立ったのは一度きりとなってしまった。

「これ、本当に捨てるんですか？」

廃品回収業者はまだピカピカの妖怪ポストを持ち上げながらスケアリーに聞いた。

「当たり前ですわ！」

スケアリーはそう言うと、業者の人が妖怪ポストをトラックに積み込むのを見届けてから彼女の家の向かいにあるマンションへと向かった。

マンションの部屋のベランダからはスケアリーの高級アパートメントの入り口が見える。スケアリーはそこへ出てみると、彼女の高級アパートメントの前でモオルダアがうろろしているのが見えた。

「モオルダア！こちらですよ！このマンションの402号室に来てくださいな！」

予想外のところから声をかけられたモオルダアは少し驚いて振り返った。モオルダアはそのことも不思議に思っていたのだが、スケアリーの高級アパートメントの前から妖怪ポストが消えていることも不思議だった。モオルダアは首をかしげながらマンションの方へと歩いてきた。

モオルダアが四階で止まったエレベーターを降りる時、緊張感のない警官二人と入れ違いになった。モオルダアは二人の様子から、それほどの事件が起きたわけではないと解ったような気がしたが、わざわざスケアリーが彼を呼び出すほどのことから、もしかするとそれほどの事件かも知れないと思って402号室へ向かった。

モオルダアが402号室の扉を開けるとまずスケアリーの姿が目に入った。

「モオルダア、大変なことになりましたのよ！」

スケアリーにそういわれたモオルダアは部屋の中を見渡してみたが、少しも大変なことになった印象はなかった。血だらけの殺人現場でないのはモオルダアにとって良いことだが、これだけ緊張感のない事件現場もめずらしい。モオルダアには何が大変なことなのか少しも解らなかった。

モオルダアはスケアリーのあとについて部屋に入ってしまった。

「ヨシオ君が誘拐されたんですよ」

スケアリーにそういわれてもモオルダアにはなんとも言い返せなかった。第一に誘拐事件ならもつと緊張感が漂っているし、ペケフアイルの二人が捜査することでもないのだ。しかし、モオルダアはあえてそこに自分が呼ばれたことの理由があるのに違いないと思って軽く胸を躍らせていた。それよりもまず、ヨシオ君って誰なんだ？

「ヨシオ君というのはこの部屋を使っていた人の名前かな？　なんとなく少年のような気がするけど」

「ああ、そうですわね。あたくし少し話を早く進めすぎてしまいましたわ。ここに住んでいたヨシオ君は先程突然姿を消してしまったんですよ。でも状況から考えて事件性は低いということ警察は今のところ何もしてくれないんですけど。でもあたくしにはちよつと気になる場所があるんです。この事件は、あのニコラス刑事があたくしのところへ依頼しに来た事件と少し似ているんですよ」

スケアリーがこう言うのを聞いてモオルダアには少し腑に落ちないこともあった。スケアリーはニコラス刑事に頼まれて捜査に行ったがために機嫌を損ねたのだし。まあ、それはそれでいい。変な事件に関われるのならモオルダアは満足なのだから。

「それで、そのヨシオ君というのも直前まで誰かと一緒にいたのに、急に姿を消してしまった、というのか？」

「一緒にいたかどうかは知りませんが、ヨシオ君のお母さんから聞いたところによると今朝まで確かにここにいたはずだって言っていましたわよ」

「それで、ヨシオ君のお母さんは今どこに？」

「ヨシオ君がいなくなったシヨックで倒れてしまって、今は病院ですの。そんなことよりも、モオルダア。おかしい話があるんですよ。ヨシオ君の友達が言うには、ヨシオ君は妖怪によってコンピューターの世界に閉じこめられたという事なんですのよ。だから、あの二人はあたくしの家の前にあった妖怪ポストに手紙なんかを入れたんですわ！」

あの二人とは誰だ？　と違ってモオルダアは部屋の中を見回した。すると部屋の隅にヨシオ君の友達がモジモジしながら二人の方を見ていた。



「うわ、ビックリした。ここにはキミ以外にも人がいたのか。それにしてもあの二人はどうしてあんなにモジモジしてるんだ？」

モオルダアはヨシオ君の友達には聞こえないようにスケアリーに聞いた。

「そりゃ、あの年頃ですから。美人を前にして緊張するのは当たり前ですわ！」

これを聞いたモオルダアは、ここにはまだ彼が存在を確認していない人間がいるのかと思って、その美人を探すべく周囲を見回した。誰もいないのを確認すると同時にスケアリーの言っていた「美人」とはスケアリー自身のことなのだ、ということに気付いた。モオルダアは、わざと冗談っぽく「ここに美人なんていないぞ！」と言ってみた。多少疑い深いものではあったが、スケアリーは笑顔でそれに答えた。モオルダアは慌てて話題を変える。

「キミ、もしかして妖怪がどうかという話を本気にしてるの？」

「そんなことはありませんわ。ただ、この辺の高級住宅街に住んでいる子供はみんな正直ですから。何か事件が起きたことは確かですわ」

みんな正直とはスケアリーの思いこみである。

「もう少し詳しい話が聞けたら、何が起きているのか解るのですが、何しろあの子達は美人を前にして…」

「それじゃあ、美人に代わってボクが話を聞いてみるよ」

モオルダアは最後まで聞かずに少年達の方へ向かった。

モオルダアは部屋の隅にいる二人の少年に声をかけた。

「キミ達がここで見たことをもう一度話してくれないか？」

二人はお互い顔を見合わせてモジモジしていた。どうやらこの二人は誰に話しかけられようとモジモジしているのだ。きつとヨシオ君もこの友達と同様にモジモジしているのだろう。普段はモジモジ三人組で妖怪の話をしたりして遊んでいるに違いない。

モオルダアがどうでもいいことを推理していると少年のうちの一人が話し始めた。

「あれはブログのせいです。…あんな話はウソだと思っていただけ…でも本当になってしまったんです。ヨシオ君は夢中でブログを書いているうちにコンピューターに魂を吸い取られてしまったんです」

モオルダアには何のことだかまったく解らない。振り向いてスケアリーの方を見てみたが、彼女もモオルダアと同じようにきょとんとしている。

「それよりも、キミ達がここで見たことを話してくれないかな」

モオルダアがもう一度聞くと今度はもう一人の少年が答えた。

「ヨシオ君が学校に来ないからここに来てみたら、ヨシオ君がいなかったんです」

モオルダアは続きを期待したが、それ以上の話はないようだ。

「それだけ？」

少年達はいちど顔を見合わせてから同時にうなずいた。

モオルダアはスケアリーをつれて部屋の外に出た。

「これはイタズラじゃないか？」

モオルダアが小声でスケアリーに言った。

「そんなことはありませんわ。彼らは高級住宅街に住んでいるんですよ！」

スケアリーも小声で返した。

「どこに住んでいようと、イタズラするヤツはイタズラするんだよ」

「でも、警察まで呼んでいるのに……。ちよいと！ 事件現場のものをむやみに触らないでくださるかしらー！」

小声で喋っていたスケアリーがいきなり大きな声を出したのでモオルダアは思いっきりビビっていた。彼女の声はモオルダアの肩越しに見える部屋の中に向けられていた。モオルダアが振り返った時に、少年は事件現場のものをむやみに触ってしまった後だった。ちよつとすまなそうな顔をしていたが、彼には何か言いたいことがあるようだ。パソコンのモニターを指さしてモオルダア達に見せている。

「これが証拠です」

部屋の外にいた二人は中に入ってパソコンのモニターを見た。真っ黒い画面に白い文字がひとりでに次々と入力されていくようだった。ただそこに入力される文字は日本語でも英語でもない。おそらくどこの国の言語でもないだろう。意味不明の文字が次々と表示されていき、いつまでも止まりそうな気配がない。

「これがヨシオ君ってこと？」

モオルダアはモニターを凝視しながら聞いたので、隣で少年がうなずいたのに気付かなかった。しかし、モオルダアにはどうでもいいことだった。モニターに表示されていく文字を見るとなんだか気味が悪くて何も考えていなかったのである。

## 5 モオルダアとスケアリーと技術者

こうなつてくるとモオルダアにもスケアリーにも手が出せなくなってくる。モオルダアはともかくスケアリーもこの状況を理解できるほどコンピューターには詳しくなかった。二人はとりあえず少年達に必要な二三の質問をして二人を帰らせた。

モオルダアは先程から気になっていた。どうしてスケアリーはあんな少年達の言うことを真に受けているのだろうか？ 彼らの言っていることはモオルダアにとつては興味深いものだったのだが、スケアリーなら真っ先に否定するはずだ。

もちろんスケアリーもあの少年達の言うことを信じているわけではない。彼女はモオルダアがここへ来る前にヨシオ君のお母さんに会っているのだ。(ということとは、二人の少年は倒れたヨシオ君のお母さんを置き去りにして妖怪ボストのところまで行ったということになるのだが、そこは気にしない。) ヨシオ君のお母さんの様子が尋常でなかったのがスケアリーは気になっていたのだ。その様子からスケアリーはこれがただの失踪事件ではないと思っていた。同じ女性として、ヨシオ君のお母さんの気持ち理解できる気がするのだ。というようなことをスケアリーはモオルダアに話して聞かせた。

モオルダアは解ったのか解らないのか判然としない感じであつただけだった。そんなやりとりの間もずっとパソコンのモニターには新しい文字が表示され続けていた。

「宇宙からのメッセージという可能性もあるな」

モオルダアが言うと、彼は横にいたスケアリーからの冷たい視線を感じた。その後の長い沈黙のあと、彼らと呼んだエフ・ビー・エルのコンピューター技術者がヨシオ君の部屋に到着するまでの間も、モニターには新しい文字が表示され続けていた。

ヨシオ君の部屋にやって来たコンピューター技術者はしばらくおかしな文字を表示し続けるモニターを眺めながら、頭の中を整理しているようだった。あごに手を当てて考えていた技術者の頭の上に一瞬電球が見えたような気がした。

「解りましたよ！」

技術者は得意げにペケファイルの二人に言った。

「これは誰かが文字を入力しているのです。まあ、ここにいる誰もこのパソコンに触っていないのだから、この文字

を入力している人間はネットワーク経由でこのパソコンにログインしているのだと思いますけどね。ただしおかしいのは、本来ならそういうふうには外部からログインしても作業の様子がこのモニター上に表示されたりしないんですけどねえ。もしかするとこれは不正なアクセスとか、パソコンのエラーとかかも知れませんがねえ」

スケアリーは半分ぐらい理解していた。モオルダアは半分ぐらい理解したフリをしていた。

「それで、この文字はなんなんだ？」

モオルダアは解らないなりに一番疑問に思っていたことを聞いた。

「これは多分日本語ですよ」

「それはどう見ても日本語ではありませんわ」

スケアリーが言うのも無理はない。モニターに表示されるのはまったく意味をなしていないと思われるアルファベットの羅列に見える。

「いや、そんなことはありませんよ。二人とも一度や二度、こんな文字を見たことあるでしょ。これは解りやすく言うとか文字化けというヤツですよ。インターネットとかやっていると見かけるでしょ？ 私もここにどんな言葉が書かれているのかまでは解りませんが、こんなには見覚えがあります」

そう言われればそんな気もしてくる。モオルダアは詳しいフリをして何かを言おうと、知っている限りの知識を絞り出そうとしていたが、先に技術者が話し始めた。

「このパソコンがどうしてこんな状態になったのか知りませんが、再起動してみたら正常に日本語が表示されるようになって、何が書かれているのかも解るかも知れません。というか、もうシステムがおかしくなってる可能性もありますけどね。どっちにしろ一度電源を落とさないで。このキーボードにはまったく反応しないし」

そう言って技術者は机の上のキーボードを適当に叩いた。それから、強制的にパソコンの電源を落とすために、本体のボタンに手をかけた。

「それはダメだ！（ですわ！）」

モオルダアとスケアリーがほぼ同時に技術者を制止した。技術者は驚いてパソコンから手を離れた。技術者を制止した二人もめずらしく意見が合っていることに驚いていた。

「なんで、ダメなんですか？」

技術者は自分を驚かせたくせに、なぜか本人達も驚いている二人に聞いた。モオルダアとスケアリーはどちらが説明す

るのか？ という感じでお互いの顔を見合わせていたが、こういうことは自分が言うのが適當かな、という感じでモオルダアが説明を始めた。

「ヨシオ君は今、その中にいるんだよ。だから電源を落としてヨシオ君の身に何かがあったら大変なことになるぞ」この二人は変わっていると聞いていたが、これは変わっているところではない。そんなことを考えながら技術者は困った感じで二人を見つめていた。見つめられている二人も、電源を落とすことを止めたままでは良いが、その後どうすれば良いのか良く解っていない。

「ここに次々と表示される文字をどこか別のところに保存して別のところでちゃんと表示させることは出来ないんですの？」

そんなことは無理だろうと思いつながら、何かを言わないと自分たちが変人に思われると思ってスケアリーが言った。そういわれた技術者は一瞬目を輝かせてから、落ち着いた調子で言った。

「まあ、出来ないこともないですよ。でも今すぐに令状も無しでそれをやるのはちょっと問題です。少なくとも持ち主の同意がないと」

「それなら問題ないよ。持ち主のヨシオ君はそうやってモニターに書いていることを表示させているんだから。誰が見ても良いよ、ということに違いないよ」

モオルダアの考えはあまりに適當だが、特にスケアリーに止められることもなかった。それを聞いて技術者は嬉しそうに部屋を出て、外に止めてあるワゴン車から一抱えの機材を持ってきた。

技術者はそれらの機材についていちいちモオルダアとスケアリーに説明していたが、二人とも何のことだか解らなかつたので少しも聞いていなかった。三十分ほど一生懸命に作業していた技術者は、大きく息を吐き出しながら近くにあつた椅子にドカッと腰をかけた。

「もう終わったの？」

モオルダアが聞くと技術者は疲れ切った表情で首を振った。

「これから始まるんです。ボクの作ったプログラムがこのパソコンに侵入して中のデータを吸い出すはずなんです。このパソコンはそうとう特殊なシステムで動いているみたいなんです。ただしそれほど複雑でないだけ助かりましたけどね。上手くいけば二時間もすれば終わりますよ」

二時間も?! そろそろこの部屋に飽きていたモオルダアとスケアリーは技術者を置いて外に出ることにした。

## 6 スケアリーとモオルダアとスケアリーの部屋以外

ヨシオ君のマンションはスケアリーの家の目の前。スケアリーは技術者の作業が終わるまで自分の部屋でゆっくりするつもりだった。その後をモオルダアがついていく。

「ちよいと！ なんであなたがついてくるんですの？」

モオルダアは当然自分もスケアリーの部屋でコーヒーでもすすりながら二時間のヒマを潰せるものだと思っていた。

「これまでの話と同様に、あなたがあたくしの部屋に来るとロクなことにならないのですから、あなたはあの技術者が間違っってパソコンの電源を落としてたりしないように見張っていれば良いんですわ」

そんなことを言われても、モオルダアにはあの技術者がやっていることはチンプンカンプンだし、さらに変な機材が持ち込まれて自分には良く解らない作業が始まってしまっているのだから、技術者が何をしようとモオルダアにはどうすることも出来ないのだ。しかしスケアリーに睨まれて、モオルダアはただ「はい」と答えて高級アパートメントに入っていくスケアリーの後ろ姿を見送るしかなかった。

## 7 スケアリーと技術者とヨシオ君の部屋

二時間後スケアリーがヨシオ君の部屋を再び訪れると、ちょうど技術者は作業を終えたところだった。

「あら？ モオルダアは？」

「あれ？ 一緒じゃないんですか？」

機材の片付けを始めながら技術者はスケアリーの方を見ていた。

「バッチリ保存出来ましたよ。ただし今でもこのコンピューターにはどんどん新しく何か書き込まれていますけどね。でも、ここまですらでも文字にしたら相当の量をコピーしましたから捜査に使うには十分でしょう。というか、こんなものを分析して何が解るんですかねえ？」

技術者はこれまでの作業の間にヨシオ君のパソコンの中で何が行われていたのかをだいたい理解していたようだった。スケアリーは技術者のそんな態度が気に入らなかった。

「あなたにはどうでもいいことですか！ そんなことよりも早くエフ・ビー・エルのラボへ行ってそのデータをちゃんとした日本語にしていただけか知ら？」

この人は自分がどんなにすごいことをしたのかまったく解っていない。技術者はそんなふうに思っていたのだが、そんなことには慣れっこである。医者は病気を治して当たり前。医者になるまでにどんな苦勞をしていようとそれは関係ないのだ。「たくさん給料をもらっているのだから、それくらいのことにはしてくれよ！」と誰もが思っている。同様のことをこの技術者も感じているのだ。コンピューターの技術者なのだから、こんなことは出来て当たり前と、いつでも思われている。こういうことが出来るようになるまで、彼がどれだけのことを犠牲にして知識を身につけたのか、ということは誰も気にしないのだ。ただ、悲しいことにこの技術者はモオルダアと同様にアルバイトなのである。(時給1050円)

技術者が機材を抱えて部屋から出ていった後、スケアリーはパソコンに表示される文字を眺めていた。本当にこれがヨシオ君が書いているものなのかどうかは解らない。それにこのパソコンの中にヨシオ君がいるということとすらまったく信じられないのだが、彼女には救急車で病院に運ばれる時のヨシオ君のお母さんの姿が忘れられなかった。愛する息子を何者かに連れ去られて、体の自由が利かなくなるほどのショックを受けたヨシオ君のお母さんを見てスケアリーはなんとしてもヨシオ君を助けたいと思うようになっていたのだ。捜査に私情は禁物と思っていながら常に私情で捜査をしているスケアリーにはなくもない心情ではある。

## 8 薄汚い部屋と依頼人とニコラス刑事再び

この部屋は薄汚いが決してモオルダアの部屋ではない。モオルダアの部屋はもっと湿っぽくて息苦しくて地獄的な汚さの部屋である。ここは明らかにモオルダアの部屋ではない。この部屋の住人は思い悩んだ末にあるところに電話をかけた。

「もしもし、ニコラス刑事さんでしょうか？ 私はあなたの伯父様のニコラス刑事さんと知り合いのものなのですが、ちよつと相談があつて連絡しました」

同じ名前が二度も出てきて解りづらいが「伯父様のニコラス刑事さん」とはこの話の始めの方でスケアリーに協力を依頼してきたニコラス刑事さんのことである。つまり、今この男が話している相手はそのニコラス刑事さんの甥ということだ。そして、このニコラス刑事さんはペケファイルシリーズの初期(≠002「猿軍団」)に登場した二枚目のニコラス

刑事さんなのである。いろいろあって今では東京で勤務ということになっている。(主にそれは作者の都合ですけど。)

ニコラス刑事さんは伯父のニコラス刑事さんとは違い、正義感と責任感にあふれ頭脳もそれなりに明晰。電話をした男はニコラス刑事さんのハッキリとした口調に少し安心していた。少なくとも伯父のニコラス刑事さんよりは頼りになりそうだ。

「突然変な話でスイマセンが実は私の友人が失踪しまして、その捜査を伯父様のニコラス刑事さんに依頼したんです。それで、友人は無事に見つかったというか、なんとというか…結局は失踪なんかしていなかった、ということなんです。私達が友人の家にいると彼がなにくわぬ顔をして戻ってきたんです。それで、ニコラス刑事さんも捜査は終了ということにしてしまったんですけど。私は間違いだと思うのです。戻ってきた友人は元の友人とは別人なのです」

ニコラス刑事さんは相づちをうちながらこの話を聞いていたが、最後の方は相づちをうつことも出来なくなって来ていた。それからちよつと間をあけてニコラス刑事さんが話し始めた。

「それは、なんだか不思議な話ですねえ。伯父にはそのことを話したんですか?」

「ええ、もちろん。ただし元々伯父様のニコラス刑事さんもこの失踪事件を事件とは考えていなかったようで、私がいくら頼んでも詳しいことを調べたりはしてくれませんでした」

「それで、あなたは私にどうしろと?」

「もう一度、私の友人を捜索して欲しいんです」

「でも、あなたの友人はもう見つかって家にいるんでしょ?」

「ですから、あれは友人ではないのです。誰も信じてくれないかも知れませんが、この裏ではもっと恐ろしいことが行われているんです。もしかすると、私達全員の存在が消されてしまうのではないかとも思うんです」

ニコラス刑事さんはなんと言葉を返していいのか解らなかったが、相手の男があまりに熱心なためこのまま電話を切るということも出来なかった。

「そういう不思議な事件なら、うってつけの人たちを知っているからその人達に話を聞いてもらいましょう。もしかすると力になってくれるかも知れませんか」

ニコラス刑事さんは男をなだめるように言った。男は少し安心して会話を終わらせた。



## 9 モオルダアとスケアリーとペケファイルの部屋

スケアリーはペケファイルの部屋へとつづく廊下を大股で歩いていった。こういう時の彼女はモオルダアを怒鳴りつけたい衝動に駆られているか、何かに夢中になっているかのどちらかだ。書類の束をめくりながら、その書類に書かれている内容を真剣に読んでいる彼女の様子からすると今回は後者の方に違いない。

スケアリーはペケファイル部屋のドアを勢いよく開けた。中にいたモオルダアは例によって突然ドアが開いたことにビクついていた。一方のスケアリーもモオルダアがここにいるとは思っていなかったので多少驚いているようだった。

「あら、モオルダア。いったい何をしていらっしやるの？ 返事次第ではどうなるか知れたものではないですよ」

モオルダアはこう言われても、意外と冷静である。もうドアが突然開いたことへの驚きもやわらいでいたようである。

「そんなことより、キミはボクに報告することがあるんじゃない？ キミの持っているのはヨシオ君のパソコンのモニターに表示されていた謎の文字を修正して日本語にした内容だろ？」

モオルダアのこの態度に多少ムカツとしたスケアリーだが、確かに報告することがあるのだ。

「そうなんですのよ。いったいどういうことなのか解らなくなりますが。あそこに書かれていたのはヨシオ君の視点で書かれたヨシオ君自身のことだったんですのよ。：あら、これでは全然意味が解りませんわね。あのパソコンに表示されていたのはヨシオ君の日記ということになるんですのよ。つまり、ヨシオ君は行方不明になってもどこかで日記を書き続けているということになるんですのよ」

モオルダアは特に驚きもせずこの話を聞いていた。

「ヨシオ君には新しい友達が出来て、彼らと趣味の話をして盛り上がっているんだろ？ 超常現象や都市伝説の話をして」

モオルダアが得意げに話すのにはいつも腹が立つのだが、今回は怒るに怒れない。それは全てスケアリーの持っていた書類に書かれていることだったのだ。

「モオルダア、いったいどこでそんな情報を仕入れたんですのよ？」

「そんなものはわざわざエフ・ビー・エルの力を使って日本語にしなくてもちゃんと一般に公開されていたんだよ」

そう言ってモオルダアは目の前にあったパソコンのモニターを回転させてスケアリーに見せようとしたが、モニターのコードが机の上の筆立てにぶつかって、筆立てはそのまま床に落ちてペンを床にばらまいた。モオルダアは格好良くいかなかったことに腹を立てながら、ペンを拾うために立ち上がった。その間にスケアリーはモオルダアの座っていた机

の前まで来てモニターを覗き込んだ。

「ヨシオの日記?!」

スケアリーはこのタイトルを見てヨシオ君が最近夢中になって書いていたブログというのがこれなのだと解った。

「夢中になるにもほどがありますわ! こんなにたくさんの記事を書いて。これじゃあまるで自分の生活の実況中継じゃありませんこと?」

スケアリーはその内容に驚いて肝心な所を見失っていた。

「そんなことよりも、その記事が書かれた日付を見ると面白いぜ」

机の向こうに這いつくばってペンを拾っている姿の见えないモオルダアの声が聞こえた。スケアリーは言われたとおり記事の書かれた日付を確認した。それは全て行方が解らなくなった今日の日付だ。それぞれの記事はほぼ一分刻みで更新されている。スケアリーは多少ためらったが、マウスを手にとって「ヨシオの日記」が表示されているページを再読込してみた。

最新の状態に更新された「ヨシオの日記」を見てその不気味さに思わずスケアリーはマウスから手を離れた。不気味なのはその内容ではない。内容は普通なのだが、どんなに早くタイピングしたとしても、短時間にこれだけの量の文字を入力出来る人間はいるはずがない。何画面分もスクロールしてやっとページの一番下までたどりつく量の文字を数分のように書いている。

「モオルダア! これは誘拐に違いありませんわ! それに、もしかするとヨシオ君は殺害されている可能性だってありますわよ!」

スケアリーの表情に緊張がみなぎってくる。

「何で?」

と机の向こうにいる姿の见えないモオルダアから気のない返事が返ってきた。

「何で、じゃありませんわよ。こんなにたくさんの文字を普通の人間が書けるワケがないじゃありません? これは明らかに誘拐犯の仕業ですよ。ヨシオ君が生きていることを証明するためにブログにヨシオ君の名前で記事を書いたのが、何かの手違いで用意していた原稿を全部投稿してしまったに違いありませんわ!」

モオルダアはいまだに床に落ちたペンを探すために這いつくばっていた。床の方からモオルダアの声が聞こえてくる。「でも、そんなことをしても意味はあるのか? まあ、身代金目当ての誘拐犯なら誘拐した人間が生きていることを証

明するためにいろんな手段を使うけど、誘拐された少年が楽しいブログを書いてたんじゃ意味がないと思うけどね」モオルダアはまだペンを探している。スケアリーは見えないモオルダアに向かって反論する。

「それだったら、このブログを詳しく調べて投稿したのが誰だかつきとめれば良いんですわ。巧妙な仕掛けで送信元をごまかそうとしていたりすれば、それはきつと誘拐犯ですわ!」

「それなら、さつき調べてもらったよ。その投稿は全部ヨシオ君の家からだよ」

そう言うとモオルダアはやっと最後の一本のペンを見つけて立ち上がった。手に持っていたペンを嬉しそうにスケアリーに見せた。大量のペンが床に落ちたが、ちゃんと書けるインクの残っているボールペンはその一本だけだったのだ。立ち上がったモオルダアがスケアリーの顔を見るとボールペンを持ったまま固まってしまった。スケアリーは今にもキレそうな表情でモオルダアを睨みつけている。

「それじゃあ、あなたはヨシオ君がまだあの家にいるとでもおっしゃるの? あたくし達が隅々まで調べたあの家に」スケアリーがモオルダアにつかみかかる前に最後の質問をした。

「それについて調べるにはちよつと時間がかかるんだよ。だからボクはそれを調べなくちゃいけないんでね。それじゃあ」

そう言うとモオルダアは持っていたボールペンを机の上に置いて、そそくさと部屋を出ていった。

## 10 ボールペンとスケアリーとペケファイルの部屋

スケアリーは机に座ったまま先程自分の持ってきた書類の束をめくり始めた。それは何百枚あるか数える気にもならないほどの量があった。これは全て「ヨシオの日記」に書かれていることと同じ内容に違いない。ただし、実際の「ヨシオの日記」には今頃すでにこの倍以上の内容が書き込まれているかも知れない。

「ヨシオの日記」の内容が書かれている書類は一番目のページが最新の記事、ページをめくるにしたがって古い記事になるように並んでいた。書類に記録されている記事のほとんどはヨシオ君が失踪した今日書かれたものとなっていたが、最後の何枚かは昨日の日付になっている。その何枚かを読んだ時にスケアリーある異変に気付いた。「ヨシオの日記」にはヨシオ君の他に二人の友人がしばしば登場する。そのほとんどが「T」と「B」という名前で書かれているのだが、昨日の記事には「ヤスオ」と「ユキオ」という名前で書かれているのだ。

スケアリーはこの変化の意味することを考えながら、ここに書かれている名前をメモしようとさつきモオルダアが机の上に置いたボールペンを手に取った。メモ帳を開いて「ヤスコ」「ユキ…」というところまで書いたところでボールペンのインクがなくなつて「オ」がフェードアウトしていった。

スケアリーのイライラがちょうど頂点に達して来た悪いタイミングで部屋を扉をノックする音が聞こえた。

「今この部屋に入ってくる勇氣があるのなら、どうぞ入っていらして！」

多少ドスをきかせたスケアリーの声が扉に突き刺さりそのまま外にまで聞こえてきた。ドアをノックした人は恐れをなして逃げ出したのか、少しの間ドアの外には何の反応もなかった。しかし、そのあとゆっくりとドアノブがまわつて、少しだけドアを開けたものがある。

「あー、すいません。ここはペケファイルの部屋ですよねえ？」

少し開いたドアの向こうからどこかで聞いたような声が聞こえてきた。スケアリーはイヤな胸騒ぎがして姿勢を正すとドアの方に注意を向けた。外にいる人は中の様子をうかがうように喋っているが、どちらもお互いの姿までは見えないようだ。

「私はニコラス刑事と言います。覚えていますか？ 以前一緒に捜査をしたニコラスです」

これを聞いてスケアリーは頭から湯気が立ちそうなくらい顔を赤らめた。それから反射的にドアのところまで行き少し開いていたドアを体当たりするような感じで閉めた。

スケアリーは体をドアに押しつけたままドアが開かないように押さえていたが、次第にどうしてこんなことをしているのか理解出来なくなつてきていた。これでは余計に気まづくなる。本人は絶対にそのことを認めようとしないが「憧れのニコラス刑事」がこのドアの向こうにいる。ちよつと男前のニコラス刑事。運命の人と運命の再会かも知れないというのにスケアリーは必死でドアを押さえている。

こんな時にはどうすれば良いのか？ これまでこんな失態を演じたことは一度もないスケアリーにはどうすれば良いのか解らなかつた。しかし、このままではニコラス刑事が帰ってしまうかも知れない。ドアの向こうでゆっくりと廊下を去っていく足音が聞こえてきた。スケアリーは夢中で部屋の中を見渡してどうすべきか考えていた。まだ何も思いつかかったが、去っていく足音を聞いて反射的に行動に出ってしまった。

スケアリーは髪を振り乱して大きな音を立てながら部屋から飛び出してきた。

「まったく油断も隙もあつたものではありませんわ！ こんどくる時にはもっと慎重にやるんですよ！」

何を言っているのか良く解らないが、スケアリーが廊下から部屋の中に向かってわめいている。廊下を半分ほど進んだところでニコラス刑事が驚いて振り返った。

「あら、あなたはあの時の…」

スケアリーはニコラス刑事と目が合うと、彼がいたことなど知らなかったという感じで声をかけた。

「あの、大丈夫ですか？」

ニコラス刑事は何が起きたのかまったく解らなかったが、とりあえず心配そうに言いながらスケアリーのいる方へ戻ってきた。

「ええ、危ないところでしたけど、なんとかまりましたわ。あたくしみたいな仕事をしていると、いろいろなところから命を狙われてしまいますでしょう？　今も刺客がやって来て大変なことになるところだったんですが、何とか追いつくことが出来ましたのよ」

「刺客ですか？」

ニコラス刑事はそう言いながらペケファイルの部屋の中を覗き込んだ。地下にあるその部屋には刺客が入って来れるようなどころは全くない。

「どうやって逃げたんですか？」

ニコラス刑事は何にも理解出来ないままだったが、そこは聞かすにはいられない。

「あの通気口から逃げたんですの」

スケアリーは絶対に人が入れそうにない小さな通気口を指さした。ニコラス刑事は本当にスケアリーのことが心配になって通気口とスケアリーを交互に見ていた。スケアリーはなんだか落ち着かない様子でキョロキョロしている。

「それよりも、ニコラス刑事様はエフ・ビー・エルに何のご用ですか？」

ごまかし作戦が上手くいっていないと感じていたスケアリーは無理矢理話題を変えた。ニコラス刑事はいまだにここへやって来た（おそらくはもの凄く小さな）刺客のことが気になっていたのだが、これ以上この件について聞くのはよしな方が良いと思った。それと同時にこのおかしな感じのスケアリーに捜査の依頼をしていいものか不安になっていた。しかし、以前もペケファイルの二人にはどこか異常なところが感じられた。それでもちゃんと事件の捜査はしてくれたのだから、今回もなんとかなるに違いないということにして、彼がここへ来た理由を話すことにした。

「実はボクはペケファイルに用があつて来たんですよ」

ニコラス刑事が話し始めると彼を見つめるスケアリーの目がギラギラと輝きだした。やっぱり不気味な感じもなくはない、と思いつながらニコラス刑事は恐る恐る話を続けた。

## 11 スケアリーとニコラス刑事と夜の公園

日が暮れて夜の闇に包まれた寂しい住宅街をスケアリーとニコラス刑事が歩いていった。ニコラス刑事だったら、こんな寂しいところにあたくしを連れ出していったいどうするおつもりかしら、とスケアリーはおかしな期待をしていた。ニコラス刑事はスケアリーがまた小さな刺客の話とか、理解不能な話を始めないかとヒヤヒヤしながらなるべく当たり障りのない話をしながら目的地へ向かった。

暗い住宅街を歩いていると、さらに暗い児童公園が見えてきた。ニコラス刑事は「あの小さな公園です」と行ってその公園を指さした。ニコラス刑事だったらこんな暗い公園にあたくしを連れ込んで、まさかいきなりキッスなんてことはないでしょうねえ、とスケアリーはさらにおかしな期待を抱いた。ニコラス刑事はスケアリーが公園の暗がりの中にかが見える、とか理解不能な話を始めないかと心配していた。

公園に入るとほとんど明かりのあたっていないベンチに人影が見えた。その人影は二人が到着したことに気付いてこちらに向かってきた。街灯の明かりが届くところまでくると公園にいた男とスケアリーは「おや？」という感じで目を合わせた。

「あなたは今朝あの家いらした…」

スケアリーがその男に聞くとニコラス刑事は不思議そうにしていた。

「あれ、二人は知り合いですか？」

「知り合いなんかではありませんけど」

スケアリーは今朝のことを思い出して少し機嫌が悪そうに説明を始めた。

「あたくしは今朝、捜査の必要もない事件に呼び出されたんですのよ。そこにいた人たちの中にこの方もいらしたんですのよ。…もしかして、あなたの伯父様ってあのニコラス刑事さんのことですか？」

スケアリーが先程ニコラス刑事と話していた時には気が動転していたので気付かなかったが、事件の内容とニコラス刑事という名前を考えたら、伯父というのはニコラス刑事と気付くはずだった。スケアリーは不満げに目の前にいる依頼

人の男を見ていた。

「あの、今朝は失礼しました。でも実を言うと私はあの時にあなたが帰ってしまったので残念だったのです。私はどうしてもあれで事件が解決したとは思えなかったのです。それで、ここにいるニコラス刑事さんに相談したんですけど、二人ともあなたに協力を依頼したんですね。それだけ頼りにされているということを知って私も安心しました。来てくれてありがとうございます」

この男はお世辞を言うのがなかなか上手いようで、スケアリーもすっかり気分が良くなっていた。

「話ほだいたい、ニコラス刑事さまから聞きましたわ。それであなたの帰ってきたけど帰ってきていないお友達は今何をしていますしやるの？」

「他の友人達とパーティーです」

「あら、それは羨ましいことです」

と言いながら、スケアリーは自分の質問にあまり意味がなかったと思っていた。

「実はあたくし、あなたのお友達の失踪事件とよく似た事件を捜査しているんですよ。あなた達の言っていた事件当時の状況とその失踪事件はよく似ているんですの」

「本当ですか！？ その事件はいつ起きたんですか？」

「ちょうどあたくしがあなたのお友達の家から帰ったぐらいかしら」

それを聞いて男は何かの確信を掴んだかのように静かにうなずいた。「一人出て、一人入る」と良く解らないこともつぶやいていた。

「あの、変な事を聞きますが、生身の人間がコンピューターの中の仮想世界に入り込んでしまうことってあり得るのでしょうか？」

これまで黙って二人の話を聞いていたニコラス刑事だったが、男のこの質問を聞くと少し怪訝な表情になってスケアリーののこを見た。こんな質問は科学的な視点で否定するのがスケアリーの役目なのだ。しかし、スケアリーにはヨシオ君の事件のこともあり、この質問に科学的な根拠を持って否定するだけの自信はなかった。もちろん、そんなことがあり得るとは少しも思っていないのだが。彼女はここにモオルダアがないのを悔やんだ。彼ならアツと驚く理論でこの質問に答えを出すに違いない。

何も答えずにしばらく黙っていたスケアリーは彼女を見つめるニコラス刑事の視線を感じた。せつかくニコラス刑事

さまがあたくしを呼んでくださったのに、これでは失礼ですわ、と思ってスケアリーはなんとかして説明してみることにした。

「あなたの友人と今あたくし達が搜索しているヨシオ君には一つ共通点があるんですよ。それは二人とも失踪する前にブログに夢中になっていたということですね。そこに二人の共通する意志とか意識みたいなものが感じられますわ。この意識というのは本人の肉体にも大きな影響を与えることがあるんですの。例えば夢の中で死ぬと、その夢を見ていた人が本当に死んでしまうという話がありますでしょ？ あれが科学的に証明されるかどうかは解りませんが、意識が人体に影響を与えることはそれ以外にも沢山ありますわ。身近なところで言えば、心配事が多すぎて思い悩んでいるうちに内臓の病気になるってしまったり、というところでしょうか。これで二人の失踪も説明出来るかも知れませんわ」スケアリーはこれで二人が納得してくれることを願っていたが、そうはいかなかった。

「というと、つまり？」

依頼人の男が彼女に続きを促した。

「つまり、こういうことですよ」

スケアリーはこの先を続けるべきか迷ったが、ニコラス刑事も興味を持ってこちらを見つめているようなので続けることにした。

「つまり、二人は意識のどこかで自らコンピューターになることを望んでいたんですよ。もっと速くもっとたくさんのブログ記事を書きたい。ということは自らがコンピューターになるのが一番ですわね。そう思っているうちに肉体が少しずつ電波の一種になって放出されて、それが無線LAN経由でコンピューターの中に入り込んだに違いありませんわ！」

スケアリーはこういけると、チラツとニコラス刑事のことを見た。きっとあたくしのこの完璧なインテリジェンスにニコラス刑事さまは惚れ惚れしているに違いありませんわ、と彼女は思っていた。ニコラス刑事はスケアリーがペケファイルの担当になって仕事をしているうちにおかしな考え方をするようになってしまったのだ、と思いきやスケアリーを気の毒に思ったと同時に気味が悪いとさえ思っていた。

依頼人の男は意外と感心してスケアリーの話を聞いていた。

「ということは、やっぱり私の友人はまだコンピューターの中ですね」

そういう会話にはもうついていけない感じのニコラス刑事はスケアリーが何と答えるのかに興味がわいてきた。ニコラ



ス刑事の熱い視線を感じて、スケアリーも話に熱が入ってくる。

「あなたは どうして そう思うんですの？ それから今朝帰ってきたあなたの友人は誰だと思っんですの？」

「私の友人がもしもコンピューターの中に入れていたら絶対に出てきませんよ。そういう男ですから。帰ってきた偽の友人はきつとコンピューターの内蔵で本物の友人の外見をコピーした誰かだと思っんですの？」

「あなたは、ずいぶんと思っ切ったことを言いますわねえ。でも どうして その誰かはそんなことをするんですの？」

「いや、それは…何というか、身内のゴタゴタといっますか。あまり詳しくは話したくないのですが…」

「遺産相続とかの問題ですか？」

「…いやあ、そんなことよりもっとくだらないことなんで…」

「まあ、良いですわ。だいたいのは解りましたからあたくしとニコラス刑事さまで協力してみごと解決してさしあげますわ！」

スケアリーが そう言っったのを聞いてニコラス刑事は驚いていった。こんな不気味なスケアリーと一緒に捜査など出来るわけがない。その時、運良くニコラス刑事の携帯電話が鳴った。電話での短い会話を終えてニコラス刑事が電話を切るとスケアリーに言っった。

「スケアリーさん。この事件はやはりペケファイルの二人が解決してください。実はボクはこの事件に關してあまり手出しが出来ないんです。これは警察の正式な捜査ではないから。それに今担当していっる事件に進展があつたみたいで、ボクはこれからすぐに行かなくてはいけません。それでは、私はこれで失礼します」

こう言っくと、ニコラス刑事は走ってその場を去っていった。

「まあ?!」と、なんともいえない感じでニコラス刑事の後ろ姿を見送っていったスケアリーだったが、ニコラス刑事が彼女のことを不気味に思っていっるとは少しも気付いていっないようだ。

スケアリーと一緒にニコラス刑事の去っていっく姿を見送っていった依頼人の男だったが、何かを思っだしたようにスケアリーの方に向き直った。

「これは私の考えなのですが、この失踪事件にはあるルールがあるような気がしっます。コンピューターの中に入ってしまつた人間が再び現実世界に戻ってくるには、別の誰かがコンピューターの中に入ってくる必要があるのです。一人がはいると一人が出てくる。そういう仕組みになっていっるようなんです」

「どうしてですか？」

確かにいきなり言われても理解出来ないルールである。

「私も素人なりにいろいろ調べていたんです」

そう言って男は持っていた封筒をスケアリーに渡した。

「その中に私の調べていたいろいろが入っていますから参考にしてください。それじゃあ寒いんで私はこれで失礼します。私の連絡先はその封筒の中に入っていますから」

そう言って男はスケアリーを公園に残して去っていった。スケアリーは封筒を持って去っていく男を見送っていた。

「寒いから帰る、ってどういうことかしら？」

そう独り言を言うと、夜の公園に冷たい風が吹き渡った。スケアリーは封筒を手にしたままブルブルと背中をふるわせた。言い知れぬ虚無感を感じながら、携帯電話を取り出すとモオルダアに電話をかけた。こういうふうの意味が解らなくなった時にはモオルダアの意味が解らない説明でも聞いてみるしかないのだ。

しばらく呼び出し音を聞きながらモオルダアが電話に出るのを待っていたが、モオルダアは電話に出なかった。

## 12 モオルダアとパソコンとモオルダアの汚い部屋

モオルダアは自分の部屋のパソコンの前に座ってキーボードを叩いている。これほど熱心にパソコンをいじることなどこれまで一度もなかったのだが。それよりもモオルダアはパソコンの使い方すら良く解っていなかった。しかし今は一心不乱に何かを書いているようだ。

カチカチとタイプをする音が絶え間なく続いている。ほとんどパソコンを使わない人間とは思えないスピードである。しかし、モオルダアがこの部屋にやって来てパソコンで何かをし始めた時にはこれほどではなかった。いつものように目でキーボード上のアルファベットを探して一つずつ不器用に文字を入力していた。モオルダアの意外な学習能力が発揮されたというのだろうか？

モオルダアは画面を真っ直ぐに見つめている。その下におかれたキーボードの上ではモオルダアの動かない視線に相反して絶えず彼の両手が文字を入力していった。長いことその状態が続いたあと、やっとモオルダアの手が止まった。同時に時計に目をやると時刻は夜の10時を過ぎていた。

「もうこんな時間かあ」

とつぶやいてから、もう一度時間を確認した。彼がこの部屋に戻ってきたのは何時だっただろうか？ そんな事を考えながら、自分がこれまででしたことに多少驚いてさえた。少なくとも5時間はパソコンの前に座っていたのだ。そこに気付くと、モオルダアは腕組みをして椅子の上で反り返りながら何かを考えていた。何を考えていたのか知らないが、考えがまとまると電話のところへ行きスケアリーに電話をかけた。電話がつなぐとすぐにスケアリーは電話に出た。少しまずいことをしてしまったかも知れない、とモオルダアは思っていた。

### 13 依頼人と帰ってきた男とその友人達

依頼人の男は公園を去った後すぐにこのパーティー会場へやって来ていた。パーティーとはいつても帰ってきた男の部屋で酒を飲んでいただけのだが、彼らはそれをパーティーと呼んでいる。友人達はもうすでにさうとう飲んでいよう、くだらないことを言っただけは大笑いしている。帰ってきた男もそれなりに楽しそうだ。依頼人の男は彼らに怪しまれないようになるべく彼らに会わせて笑顔を作りながら帰ってきた男の様子をうかがっていた。

しらふでここへやって来た依頼人の男には何がいつもと違うのかすぐに解ったが、酔っ払っている友人達はまだそこに気付いていないようだ。帰ってきた男はさつきから甘いカクテルばかり飲んでいり。もし帰ってきた男が本物だとしたらそんな事は絶対にあり得ない。普段から飲むのが好きな男だったが甘いカクテルを飲むことなど滅多になかったのだ。

これは絶対に別人だと依頼人の男は確信していたのだが、いったい彼は何の目的でこんな事をするのだろうか？ 帰ってきた男を見つめながら考えていると唐突に声をかけられた。

「何だよキミ。何か言いたいことがありそうな顔をしてるなあ」

依頼人の男はなるべく驚いた事を悟られないように冷静さを保とうとしていた。もしかすると、そう思っているのは自分だけで周りの全員が必要以上に驚いた彼を怪しんでいるのかも知れない。ただしここで黙り込んでしまつてはもっと怪しい。これまで彼はこの友人達に何かを聞かれて黙り込んでしまうことなどなかったのだから。

運良く彼はあることに気付いた。

「あの、さつきから気になってたんですけど、留守番電話にメッセージが残されているみたいですよ」  
依頼人の男は小さなランプの点滅している電話機を指さした。全員がそれに気付いて、興味の対象はその留守番電話に

移ったようだ。ただ帰ってきた男だけは時々依頼人の男の様子をうかがうようにチラチラと彼を見ていた。

## 14 スケアリーと捜査資料とペケファイルの部屋

スケアリーは依頼人の男から渡された資料を感心しながら読んでいた。時刻はもう夜の10時を過ぎていた。普段ならこんな遅くまで仕事をしているはずはないのだが、ヨシオ君の捜索のためには寝る時間も惜しんで仕事をする覚悟らしい。

しかし、依頼人の男から渡された資料にヨシオ君を見つける手掛かりがあるのだろうか。スケアリーにその辺の確信はなかったが、その資料には十年ぐらい前からのあらゆる失踪事件に関する記録が書かれている。どうやら依頼人の男は図書館か何かで新聞を調べたのだと思われるが、実際の新聞の切り抜きではなく記事を書き写したもので、本当にそれが新聞に掲載された記事だとは断定出来ない。もちろんエフ・ビー・エルの膨大な資料を調べればそこに書かれているのが真実かどうかは確かめられるのだが、スケアリーはそれよりもこの資料が言わんとしていることの方に興味があった。

その資料に書かれているのはある日の新聞に書かれた失踪事件の記事。そして、その同じ日に見つかった別の失踪者の記事である。A4の用紙にして50枚ほどであろうか。そのような記事ばかりが書かれている。誰かが失踪するたびに他の誰かが見つかっているという事が言いたいに違いない。依頼人の男が言っていた「一人出て、一人入る」というのはこのことだったのだろう。しかし、どうして依頼人の男はこんな遠回しな方法でスケアリーにこのことを伝えたのだろうか？ スケアリーはこの資料を読むのに費やした無駄な時間を考えてだんだん腹が立ってきた。それにこの資料に書かれていることが本当かどうかを調べるためにまた面倒な事をしなくてはいけない。

スケアリーの怒りが沸点に達しようかというところで彼女の携帯電話が鳴り出した。見るとそこにはモオルダアの名前が表示されている。彼女はとっさに携帯を掴み取った。

「ちよいとモオルダア！ どういう事なんですの！」

この「どういう事」にはあまりにもたくさん意味が含まれている。もちろんその中にはモオルダアには答えられない「どういう事」も含まれてはいる。スケアリーは何か納得のいかないことがあると、その全てに対して納得のいく説

明を求めようだ。

この場合モオルダアに理解出来る「どういう事」はどうしてスケアリーに電話をしたのか？ という事ぐらいだ。少なくとも彼には納得のいく説明をしなくてはならないような失敗をした覚えはない。いきなり怒鳴られて多少まごついた感じだったが、モオルダアはいつものように話し始めた。

「スケアリー。ボクはだんだんヨシオ君の事が解り始めてきたよ」

「どうでもいいですけど、あなたは何をしていたらっしゃるの？ あたくしはあなたがどこかへ行ってしまったおかげで、また面倒な事をするはめになってしまいましたわ。ヨシオ君の事が解ったって、どういう事なんですの？」

やはりスケアリーは怒っているのだが、モオルダアには何が原因かは解らないのでそのまま話を続けることにした。

「このブログというのは面白いよ。なんていうか中毒性があるとも思えるんだ」

「何のことだか解りませんが、ヨシオ君のブログを見れば確かに中毒ともいえる感じで更新されてましたけど。そんな事は人それぞれですし、それにそれが解ったとってなんになるというんですの？ ヨシオ君はまだどこにいますかまったく解らないんですよ」

「そんな事はないよ。ボクはこの数時間でかなりヨシオ君に近づいた気がするんだ。とにかくボクのブログを読んでみてくれよ」

「あなたのブログって何なんですの？ そんなものを読んでる時間がないことぐらい解っていらっしゃるでしょ？ ヨシオ君がどこかにいてブログを驚くべき速度で更新しているのは解りますけど、それでもヨシオ君は中学生なんですよ。中学生がずっと帰らないままそんな事をしていうこと自体が問題なのですから、あたくし達は一刻も早くヨシオ君を見つけないといけないんですよ！」

「だからボクはこうしてブログを始めてヨシオ君に近づこうとしてるんじゃないか。いわゆるプロファイリングというやつだよ。いいからボクのブログを読んでみてよ。メールにURLを書いて送っておいたから」

「なんのことだかさっぱり解りませんわ！」  
そう言いながらスケアリーは電話で話しているモオルダアの声に混じって小さくカタカタいう音が聞こえていることが気になっていた。

「ちよいと、モオルダア。あなた今何をしてらっしゃるの？」

「この会話から得られた事実に関してブログを書いているんだよ。ちよと面白い内容だと思ったからね。ブログには何

を書いてもいいんだよ。自分の思ったこととか日記とか。何を書いてもいいとブログを始める時の説明に書いてあったからね。とにかくボクのブログを読んでくれれば全部解るよ」

スケアリーはモオルダアが何を言っているのか良く理解出来なかったが、今はモオルダアのブログなんかを読んでいる場合ではない。ヨシオ君を見つけるには他にやるべき事が沢山あるのだ。

「どうでもいいですけど、エフ・ビー・エルに来て捜査をしてくださらないかしら？ あたくし一人ではどうにもならないほどたくさん問題があるんですから。それにあなたが喜びそうな怪しい資料もあるんですよ。最初に失踪して戻ってきた方がいらしたでしょう？ あの方の友人が言うには、戻ってきた方というのが外見は元のままなんですけど、中身が別人になっているらしいんですよ。それでその方が持ってきた資料なんですけども……」

「そんな事はやるだけ無駄だよ。ボクはこうしてブログを書かなくちゃいけないんだから。それじゃあ」

「ちよいとモオルダア!？」

そう言った時にモオルダアはすでに電話を切っていた。これからモオルダアに電話をかけても多分無駄だと思ったスケアリーはグツとこらえ別のところに電話をかけた。警察はそろそろ本気でヨシオ君を捜し始めたらしいのだ。警察に電話して確認してみたが、ヨシオ君はまだ見つからないようだ。それを聞いて彼女はもう一度依頼人の男から渡された資料を見直すことにした。

## 15 モオルダアとパソコンとモオルダアの臭う部屋

モオルダアはスケアリーと電話での会話を終えた後もキーボードを叩いて何かを書いていた。多分、さっき言っていたスケアリーとの会話から得られた事実に関することに違いない。モオルダアが最後まで書き終えないうちに、モオルダアの携帯電話がモジモジと鳴り出した。モオルダアはそれを聞いて電話が怒り狂うスケアリーからかかってきたのではないことはすぐに解った。携帯の液晶画面には電話番号しか表示されていないが、電話に出ると相手はモオルダアの予想どおりだった。

「もしもし、モオルダアさんですか？ ボクはヤスオです」

ヨシオ君の友達の一人、ヤスオ君は多少モジモジしながらも慌てた感じで話している。

「モオルダアさん。もしかしてブログを始めてませんか？」

これを聞いてモオルダアはあまりにも早くに自分の書いたブログに対して反応があったことに驚いていた。

「そのとおり、始めたよ。でも何か言いたかったらコメントとかトラックバックをしてくれないと。いきなり電話というのは失礼じゃないか？」

ヤスオ君は思ってもいなかったモオルダアの反応にモジモジしながら困惑していたが、少しの間をあけてからなんとか話し始めることが出来た。

「そうじゃなくて、そのブログはダメなんです」

いきなりダメと言われてもモオルダアには良く理解出来ない。モオルダアが何のことだか解らずに黙っていると、ヤスオ君がもう少し詳しく話し始めた。

「モオルダアさんの使っているブログサービスがダメなんです。それは妖怪が運営しているサービスなんです」

「確かにそうかも知れないね。こんなに楽しいブログというのは史上最強の妖怪かも知れないよ。ところでキミは妖怪というものがどんなものか知ってるか？ 妖怪というのは元々幽霊とかお化けとかとは違って…。おっとそれはボクがブログで解説することにしよう。それじゃあ、次の次でキミにボクの妖怪知識を伝授するための記事を書くから期待して待てるよ。さらにその次にはプロフィールについて徹底解説をするから、ボクがどうしてブログをやっているのかがわかるだろう。でもその前にボクはスケアリーという超常現象について書き上げなくてはいけないからね」  
完全にブログに取り憑かれてしまったモオルダアはヤスオ君とまともな会話も出来ないまま電話を切ってしまった。

## 16 スケアリーと技術者とペケファイルの部屋

スケアリーは先程まで依頼人の男に渡された資料を分析していたが今は困った顔をして電話で話している。

「それはあなたがヨシオ君を心配するのは解りますけど、そんな事はあり得ないことなんですのよ」

スケアリーに優しい口調で言われると彼女の持っていた電話はモジモジした。それはモオルダアのところに電話をかけて失敗したヤスオ君からの電話に違いない。

「確かにモオルダアは何をやっているか理解出来ませんが、あれはいつもの事ですから心配はいらないんですよ。あれは絶対に妖怪のせいなんかではないんですから。お解りになった？」

電話の向こうではモジモジとした沈黙の後「はい」と小さな声が聞こえてきた。しかし、そのすぐ後にモジモジとした

勇気を振り絞ったような声でヤスコ君が言った。

「でもヨシオの使っているブログのサービスがどんなものだったかは調べてくれませんか？」

スケアリーはそろそろ機嫌が悪くなりそうだな。これもきつと少年達の間で流行っている都市伝説か何かには違いないと思っていた。彼女には本当にそうする気があったのかどうか知らないが「解りましたわ」とだけ答えた。そうするとヤスコ君もモジモジと安心して電話を切った。

スケアリーが電話を置いたすぐ後にペケファイルの部屋のドアが開いた。スケアリーは反射的にドアの方に向かって言った。

「ちよいと、モオルダア！ 何なんですの！」

驚いた顔をして入ってきたのはモオルダアではなくコンピューターの技術者だった。

「ああ、ビックリした。てっきりここにはモオルダアさんがいると思って……」

技術者が部屋に入ってくるとドアが入り口脇の妖怪ポストに当たり危うく倒れそうになったが、ギリギリの所で持ち直して元の状態に戻った。

この技術者はモオルダアと同様に時給のアルバイトなので夜遅くまでエフ・ビー・エルに居座って時給を稼いでいる。そこは同じバイト仲間のモオルダアと同じである。だから彼はモオルダアがいつも遅くまで用もないのにエフ・ビー・エルに居座ることを知っていたのだ。

技術者は少しガツカリしたようにスケアリーを見ていた。昼間のことで彼はあまりスケアリーに好感を持っていないようだ。「どうせまたボクの仕事はあまり評価もされないばかりか、感謝もされないに決まっている」と技術者は内心で思っていた。せめてモオルダアならもう少しは自分の仕事に感心してくれるはずだ。

「それで、何の用なんですの？」

スケアリーは先程ドアに向かって怒鳴った事など忘れていいのか、或いは忘れようとしているのか知らないが、すまじた感じで技術者に聞いた。

「ヨシオ君の使っていたレンタルブログのサービスですけど、そのサービスを提供していた会社か個人か知りませんが、もしかするとこの世に存在していないみたいなんです」

それを聞いてスケアリーは「いい加減にしてくださいませんか？」と言わんばかりに眉をひくつかせていた。

「あなたまでそんなことをおっしゃって。それにどうしてあなたがそんな出過ぎたマネをするんですの？ この事件は



あたくし達が扱っているんですから、余計なことはしてくれなくても結構ですよ」

「そういわれても、私はモオルダアさんに頼まれて調べていたんですから」

「でもモオルダアはその、この世に存在していないブログサービスで楽しくブログを書いているそうですわよ」

そう言うってから、さつきモオルダアがメールにURLを書いて送ったと言っていたことを思い出した。スケアリーはパソコンに向かって必要な操作をしてモオルダアのブログを画面上に表示させた。(そこにはスケアリーを苛立たせるには十分すぎる内容が書かれていたが、きりがないのでそこに触れるのはやめておく。)

「確かにそのサービス自体は存在しているんですけど」

技術者はめんどくさそうに言った。彼の言わんとしていることを解りやすくスケアリーに伝えるのは面倒な事なのだ。ある物事に精通している人間が普通の人間に解りやすく専門的な事を伝えるのには普通の人の方が普通の人に伝えるよりはるかに多くの労力を使うのである。これまで何度もそんな事を感じてきた技術者は大きく息をついてから続きを話し始めた。

「例えば、モオルダアさんがそのブログを書くためには自分のパソコンで書いたものを一度サーバーのプログラムに送らないといけないんです。そこでしかるべき処理をして今表示されているような形にするんです。でもそのサーバーがないんです」

技術者は普通の人ふうに説明したが少し簡単すぎたようだ。

「でもサーバーがなくてもちゃんところやって画面に表示されているのですから、サーバーのいらぬブログなんですか」

スケアリーの言うのを聞いて技術者はやはりもう少し詳しく話すべきだと思った。しかし、スケアリーはサーバーというのをなんとなく理解しているようなので多少は楽かも知れない。

「サーバーはなくてはいけません。いまそのパソコンで表示しているモオルダアさんのブログはサーバーにアクセスしているからこそ表示出来ているのだし、そこに書かれていることは本来サーバーに保存されているものなんです。ですから、サーバーがなくてはブログを公開するなんて事はできないのです。でも、そのサーバーの所在がどうしてもつかめないんです」

これで解ってくれただろうか？ 技術者はスケアリーをじっと見つめていた。スケアリーは「これは言葉のだまし絵ですわ」と思った後に、自分でも上手い例えだと思っとうかつにも笑みもこぼしそうになっていた。気を取り直して真面

目に考えてみる。

「サーバーがなくては存在出来ないものが存在しているんですから、サーバーだって存在するはずですよ！」  
スケアリーの精一杯の反論だったが、確かに的を射ている。

「そうなんですよ。それはそうなんです。でも本来ならどこの誰がサーバーを運営しているのかはすぐに解るはずなんです。巧妙な細工がしてあったとしても専門家が調べたらすぐに解るはずなんです。だから私もエフ・ビー・エルにある全ての機材と頭脳を集めて調べてみたんですけど、どうしてもそのサーバーがどこにあって誰が運営しているものか解らないんです。目の前にあったものを掴んだつもりがそれが幻だったというような感じですよ」

そう言っただけで技術者は「最後の例えはまずまずだったな」と納得の表情だった。そんなことよりもスケアリーは理解してくれたのだろうか？

「何だ、そんなことでしたの。それだったら始めからそう言ってくれたらいいんですわ」

「どうやら、スケアリーは技術者が思っていたよりも詳しくかつたらしい。しかし、スケアリーが最後に「まるで妖怪ですわね」と付け足したので技術者は多少不安になった。何で「妖怪」なんだ？ という感じで。そんな不安もとりにあえずスケアリーに状況を報告出来たという満足感がかき消していたのかどうか知らないが、技術者はそのまま部屋を出ていこうとしていた。

「ちよいとお待ちになって！」

呼び止められた技術者はまた面倒なことになりはしないかと思いつつ振り返った。

「今の話はもしかするとすごく重要な事かも知れませんが、あたくしから連絡があったらいつでも行動を起こせるようにしておいていただけますかしら？」

「いいですよ。どうせボクは今日一晩中ここにいますから」

技術者は専門職の利点を最大限に生かして時給をもらっているらしい。何をやっているのか周りからは解らないので、パソコンの前に座っているのだけばそれで仕事をしていると思われているのだ。実際にはエフ・ビー・エルとは何の関係もないプログラムをしているのだが、そんな事は誰も知らない。それに、実際に彼がエフ・ビー・エルで任される仕事というのは、彼が即席のプログラムを作ったソフトを使うとアツという間に終わってしまうものばかりなのだ。彼に仕事をまかせた人間からすると「こんな作業を良く一人で、しかもこんな短時間にやったねえ！」と驚いてしまう事なのだ、実はそれは彼が昼食を食べている間、或いは自動販売機まで行ってコーヒーを飲んでる間に全て彼の作っ

たソフトが自動でやっていた事なのである。でも、あまり早く終わってしまうとまったく皆さんの仕事を任せられるのを知っているので、技術者は彼の作ったソフトが仕事を終わらせてもしばらくのあいだ別のことをしてわざと時間がかかったように見せかけている。

こういう感じの天才をエフ・ビー・エルはそうとは気付かずいつまでもバイトあつかいしている。とはいってもこの技術者本人も自分の才能をどのように使えばいいのか自分でも解っていないので今のところはバイトで十分だと思っているようである。

## 17 SとMとオルダモアの捜査ファイル

「オルダモアの捜査ファイル」とは今日の夕方に開設されたブログのタイトルである。超常現象や未解決の事件などに関する考察が、でたらめではあるが真面目な文体で書かれている。一般的な日記やマメ情報系のブログに比べたらその文章はかなり長い方だ。驚異的な短い間隔で更新されるこのブログの記事数は半日にしてもうすでに10を越えている。

オルダモアとはどうやらモオルダアのアナグラムというつもりらしい。ただし彼を知っている人間なら誰でもオルダモアがモオルダアだと気付くには違いない。そんなオルダモアの書いた記事の中に「同僚Sに関する謎」という記事がある。先程から謎のブログサービスを運営している謎のサーバーに関して考えていたスケアリーは成り行き上「オルダモアの捜査ファイル」を読まなくてはならなかったのだが、運悪くこの禁断の記事を見つけてしまったのである。

### 「同僚Sに関する謎」

世の中には異常な犯罪を繰り返す者はたくさんいるのだが、もしかすると私の同僚のSという女性もその一人になるかも知れない。Sが普段生活している様子を見れば、それは他の女性と変わらないものに見えるだろう。(多少気取りすぎなところはあがあるが。)しかし、その何の変哲もない素顔の下には恐るべき凶暴性が潜んでいるのである。

私はこれまで何度もSから暴力を受けてきた。一度は私を殺そうとしたことさえあるのだ。(これに関しては「恐怖のサプリメント」参照のこと。)何故Sがこのような行動に出るのか。彼女の名前の頭文字がS

で私の本名の頭文字がMだという事で説明出来るのなら、それは単なるジョークに他ならない。この謎を深く考察するためには、他の異常者達の行動を理解する時と同様に彼女の育った環境やこれまでに彼女が遭遇した事件や事故などを調べる必要があるかも知れない。Sがこれまでに受けた心の傷が現在の状況から何らかの影響を受けて彼女に異常な行動をとらせているのかも知れないからだ。

Sは私に絶対に年齢を教えようとしませんが、結構いい歳だということはその風貌から明らかである。そんな歳になって結婚もしそびれて、特にボーイフレンドもない彼女にとってはそのことが異常行動の原因になっているのかも知れない。それでは、どうしてその原因によって彼女が暴力的な行動に出るのかを考えなくてはいけない。

これは推測でしかないのだが、もし彼女が結婚というキーワードによって暴力行動に出るとしたら、彼女は以前に結婚に関して何か心の傷を負っている可能性が考えられる。或いは一番身近な夫婦である両親の関係が彼女の精神に何か影響を与えたのでは、とも考えることが出来る。もしかすると、毎年開催される同窓会で自分の周りからどんどん独身者が消えていくという現実からもそうどうのストレスを受けているのかも知れない。

原因は何であれ、それらの要因によってなぜ暴力行動が誘発されるのが最大の謎である。このSというモンスターをこのまま放っておけば…

「何なんですの！ これは！」

スケアリーは最後まで読まずに立ち上がると、怒りに全身を震わせていた。他にやるべき全てを忘れてペケファイルの部屋を飛び出していった。行く先はもちろんモオルダアのポロアパートである。

## 18 依頼人と帰ってきた男と静かな部屋

先程まで良い感じに盛り上がっていたパーティー会場だったが、今ではそこにいた友人達は寝てしまい、起きているのは依頼人と帰ってきた男だけになった。二人の間には何度も気まずい沈黙が訪れた。いつもなら二人になってもくどい会話が続いていたのだが、今日に関してそうならないのも無理はない。依頼人は帰ってきた男が別人なのだと思いきこんでいるし、帰ってきた男は依頼人が何かを隠していると勘ぐっている。

「今日はあまり飲まないんですね」

静けさに耐えかねた依頼人が聞いた。帰ってきた男は先程からずっとカシスソーダの入ったグラスを持っていたが、その中身はなかなかなくなかない。

「そうかな？ でもまあ飲んでばかりというのも、もう飽きたしね」

帰ってきた男はあまり表情を変えずに静かに言う、持っていたグラスの中身を飲んだ。それでも中身は少しも減らなかった。

「ここからいなくなった間に何かあったんですか？」

こんな事を聞いても帰ってきた男は適当な答えを言うに違いない、と依頼人の男は思ったが、聞かずにいるよりは聞いた方が黙っているよりもいいという考えであった。

「いや、特に何もしてなかったよ。でもねえ……」

「でも？」

「なんか自分の事をいろいろ考えてたら、ホントにこれでいいのかなあ？ って思っちゃってねえ」

これを聞いて依頼人は思わず納得してしまった。確かに以前はこんなに落ち込んだ調子で話す事はなかったのだが、何かの拍子に客観的に自分を見てしまったら、この男ならそうとう落ち込むに違いない。帰ってきた男は以前とはまったく別人だが、それは別の人間がこの男に姿を変えたという意味ではなく、考え方やものの見方が変わったという意味での別人なのかも知れない。

そうだとすると、依頼人の男はちよつと困ったことになる。わざわざエフ・ビー・エルの捜査官に捜査を依頼してしまったのだが、どうやって言い訳すればいいのだろうか？ 今さら「私の思いこみでした」とは言えないだろう。でもまあいいか。結構時間をかけて調べた資料もあるし。あれも何かの役には立つだろう。というように、依頼人の男は適当にこの問題を解決して、これから帰ってきた男と「人生のお悩み相談」でもするつもりでいた。

## 19 モオルダアとオルダモアと汚い部屋

夜も更けてきて、もうモオルダアを邪魔するものは何もなくなった。彼がオルダモアの偽名で書き続けているブログの記事数は50を優に超えていた。キーボードで文字を入力する速度もどんどん速くなっていて、疲れて一休みしよ

うなどということもないようだ。その姿を見てみると、彼が本当に頭で考えて何かを書いているのではなく、ただ適当にキーボードを叩いているようにも見えるのだが、画面上にはきちんとした文章が表示されていく。モオルダアはまばたきもせずその文字を目で追っている。

部屋の明かりは小さな電球が一つ点いているだけである。じつとパソコンのモニターを見つめているモオルダアにはその周りがあるものの事などまるで視界に入っていない。モニターに映るものだけが世界の全てである、という気にさえなっていた。

しかし、いくら夢中になったとしても人間には限界がある。一心にモニターを見つめていたモオルダアだったが、モニターが周囲がスッと暗くなったような気がした。「さすがに疲れたなあ」といつてモオルダアは目をつぶって頭を左右にゆっくりと振った。彼が首を曲げるたびにポリポリと首が鳴った。それから目を開けると軽く周囲を見回してから再びキーボードに手をのせた。

モオルダアがまた何かを書き始める前に、彼には少し気になることがあった。さっき部屋の中を見回した時に、そこが自分の部屋でないような気がしたのだ。彼は手をキーボードの上のせたまま目だけを動かして壁や天井を確認してみた。そこは確かにモオルダアの部屋なのだが、いつもよりも暗い。それに、その壁や天井は本当にそこに存在しているのか？　と思えるほど存在感がない。この妙な状態にモオルダアは背中が冷たいものを感じずにはいられなかった。いったい何が起きているのだろうか？　そう思いながらモオルダアは振り向いた時、そこには二人の人間がいてモオルダアをじつと眺めていた。モオルダアは驚いて飛び上がりそうになった。彼はその拍子に腕を思い切りモニターにぶつけていたのだが、それよりも驚きの方が優先していたのか、少しも痛いと思わなかった。

二人はそのモオルダアの様子を黙って見ていた。モオルダアはこの二人がさほど危険ではない、少なくとも緊急に防衛本能を働かせなくても今のところは大丈夫だと思い、先程まで座っていた椅子を二人の方へ向け直すとそこに腰掛けた。

「オルダモアさん。コメントしに来ました」

一人が言った。

「オルダモアさん。トラックバックしに来ました」

そのすぐ後にもう一人が続いた。

モオルダアの頭の中ではいろいろな考えがグルグルと駆け回っていたが、それはグルグルするだけで一つのまとまっ

た考えとしてモオルダアに明確な答えを示すとは思えなかった。モオルダアは黙って二人を見つめるしかなかった。

## 20 スケアリーとモオルダアと薄暗い部屋

スケアリーは車に乗って夜道をスッ飛ばしていた。怒りにまかせてエフ・ビー・エルビルディングを飛び出してきたとはいえ、一応の理性は働いているようで赤信号ではちゃんと停止する。停止線を大きくはみ出してはいたが、とにかく停止はする。

「なんなんですか、あの記事は！」

停止した車の中でスケアリーは誰に言うでもなく言った。もう何度この言葉を口にしたのか解らないが、とにかく言った。信号が青になるとスケアリーの車はタイヤをきしませながら急発進してまた夜道をスッ飛ばした。

スケアリーの車はモオルダアのボロアパートの前に止まった。本来ならもつと道の端に車をよせないといけないのだが、スケアリーはそのまま車を降りてモオルダアの部屋へと向かった。それから間もなくスケアリーはモオルダアの部屋のドアを勢いよく開けた。そのドアには鍵が掛かっていなかったのか、それともスケアリーが怒りにまかせて力ずくで開けたのか、それとも鍵は掛かっていたがボロすぎたために鍵の役割を果たしていなかったのか。とにかくドアを開けるなりスケアリーは怒鳴った。

「ちよいと、モオルダア！ 何なんですか！」

モオルダアの薄暗い部屋にこの声が響き渡ったが、その直後に部屋は夜の静寂に帰っていった。ドアノブを握ったままスケアリーはこの静けさにイヤな胸騒ぎを感じながら部屋の中を見回してみた。二部屋しかないこの小さなボロアパートは入り口からでも部屋の隅々まで見渡せる。

「ちよいと、モオルダア……」

スケアリーの声は先程とは比べものにならないくらい小さく寂しげだった。スケアリーはゆっくりと部屋の中へと入っていった。小さな電球が一つとパソコンのモニターが部屋の中を照らしている。ここはただのボロアパートの汚い部屋なのに、どこか気味が悪い。スケアリーは鳥肌の立った両腕をそれぞれ逆の手でさすりながら部屋の中を見回している。

「ちよいと、モオルダア！ いるのは解っているんですよ！」

スケアリーはいつものようにモオルダアを脅す時の勢いで言ったつもりだったが、この部屋の気味の悪さのためにそれ

はあまりにも情けない声になっていた。それはスケアリー本人にも良く解っていた。認めたくはなかったが、この部屋の妙な雰囲気言い知れぬ恐怖を感じていたのだ。「気味が悪いですわ」そうつぶやいて、スケアリーは部屋から出ていこうと玄関へ向かった。

「何だキミか」

スケアリーの背後で突然声がした。スケアリーは驚いて冷や汗が吹き出してくるのを感じたが、その聞き覚えのある声に少し安心して振り返った。

「ちよいとモオルダア、どういうこと…」

スケアリーは最後まで言えずに言葉を詰まらせた。そこにモオルダアの姿は見えなかったのだ。スケアリーはまた玄関の方を見た。それからもう一度振り返った。

「モオルダア？」

そこにはうつすらとしたモオルダアの姿が見えた。見えたというより浮かび上がったという感じで。

「来るんだったら連絡してくれないと、いきなり入ってきたらビックリするじゃないか」

モオルダアはいつものように喋っているが、スケアリーにはそれが亡霊か何かのように見えていた。彼女の目にはモオルダアの体をすかして後ろの壁が見えるような気がしたのだ。スケアリーは目を閉じてなんとか正気を保とうとした。「こんな事はあり得ませんわ！ こんな事は…」そして目を開けるとモオルダアが不思議そうにスケアリーを見ていた。

「いったいどうしたの？」

そういうモオルダアはやはりいつものモオルダアだった。

「どうしたじゃありませんわよ！ さっきから何度もあなたを呼んだのに。あなたは今までどこにいらしてたんですの？」

「どこって、ずっとここにいたよ。それよりもキミの方がボクの部屋にいきなり入ってきたりして。みんなに失礼じゃないか」

これを聞いてまたスケアリーは鳥肌を立てた。

「みんなって、どなたですか？」

そう言われるとモオルダアは辺りを見回した。

「あれ？ キミが来たから帰っちゃったのかなあ。どうやらキミは彼らからそうとう恐れられているみたいだな」



スケアリーには何も理解出来なかった。それよりもここにいるモオルダアでさえ彼女がここに入ってきた時に姿が見えなかったのだ。ここはもう一度冷静になって考えてみようとしたが、それよりも前に彼女はこの部屋にいること自体が危険な気がしていた。これ以上モオルダアが理解不能な事を言ったり、不思議な事が起きると彼女までも常軌を逸してしまうような気がしてきたのである。

「あの、あたくしあなたがエフ・ビー・エルに戻ってこないから体調でも悪くしたのかと思って来てみたんですけど、大丈夫そうで良かったですわね。オホホホホ！」

そう言いながら玄関まで後退っていくと、ちゃんと靴も履けないまま外へ出ていった。

「なんか、変な感じだなあ」

そう言うとモオルダアは再びパソコンに向かって座ると次の記事を書き始めた。

## 21 スケアリーと技術者と高級セダン

スケアリーは慌てて車に乗り込むと急いでエンジンをかけた。その時ブレーキペダルにのせた足と反対側の足に何かがぶつかった。それを手探りで探して掴んでみると彼女の携帯電話だった。さっきこの車に乗り込んだ時か、降りる時に落としたのだろう。彼女はとりあえずそれをポケットの中にしまうと車を発進させた。とにかくこの不気味なボロアパートの前から遠ざかりたかったのだ。

どこへ向かうか解らないまま、スケアリーは車を走らせていた。モオルダアのアパートから遠ざかるにつれて次第に落ち着きは取り戻してはいたのだが、これから何をすべきかがまだ解らなかった。ヨシオ君のことも別人にすり替わってしまったという「帰ってきた男」の事も、さらには気味の悪いモオルダアの事もまったくどう考えれば納得のいく説明が出来るのか解らない。行き場のない数々の問題とともにスケアリーの車は右折したり左折したりして、ほとんど人いない道を進んでいた。

しばらく、あてもない深夜のドライブをしているとスケアリーのポケットの中でメールの着信を伝える音が鳴った。ボンヤリと考え事をしながら車を運転していたスケアリーはハッとして車を止めるとメールの内容を確認した。

至急連絡ください。技術者

スケアリーがさらに携帯電話を操作すると、彼女が車から離れている間に技術者から何度も着信があったことが解った。何かすごいことが解ったのだろうか？ スケアリーは慌てて技術者に電話をかけた。

「スケアリーさん、どこに行ってたんですか？ 家にもつながらないし、モオルダアさんは全然電話に出ないし」

「そんな事はどうでもいいんですのよ！ それより何か解ったんですの？」

「ええ、すごいことが解りましたよ。とにかくエフ・ビー・エルに戻って来てくれませんか？ ついでにモオルダアさんもつれてきてくれると助かりますが」

スケアリーはモオルダアの事はあまり考えたくなかった。あの気味の悪い部屋のうっすらしたモオルダアのことは。

「モオルダアは…、あれですね。なんだか体調が悪いですわよ。ですからあたくしがここはなんとかかいたしますわ。そんな事よりも、もったいぶらないで何が解ったのかぐらい話してくれたらどうなんですか？」

「それはそうなんですけど、言葉で説明すると結構ややこしい感じですしねえ。それにこういうことはモオルダアさんの専門だと思うんですが…」

「だから、そんな事はどうでもいいと言ってるんですよ！」

ハッキリしない技術者の態度にイラついたために、少しずつスケアリーらしい態度が戻ってきた。

「まあ、解りやすく言おうとウイルスが見つかったんです。これまでに見つかったどんなウイルスよりも強力なコンピューターウイルスです」

多分、技術者はまた少し解りやすくしすぎた、と思っっているかも知れない。解りやすすぎると、少しは知識のある人にとっては解りづらい説明になるのだ。

「まあ、どうでもいいですわ。とにかくあたくしはそちらに行きますから」

スケアリーは理解したのか、それとも少しは知識があるにもかかわらずこれ以上の説明は期待出来ないとあきらめたのか知らないが、とにかくエフ・ビー・エルへ向かうことにしたようだ。

## 22 スケアリーと技術者とオルダモアの捜査ファイル

スケアリーはエフ・ビー・エルビルディングに戻ると技術者の待つ研究室へと向かった。コンピューターと何に使うのか良く解らない機材とオシロスコープのような物がたくさん並んでいる。

「ちよいと、どういう事ですの？」

スケアリーは入るなり技術者に聞いた。その声には疲れ切った感じがして力が無かった。技術者はスケアリーの顔が多少青ざめていることに気付いたが、それよりもこれから彼女に報告することの方が重要な気もしていたので、特にそのことには触れなかった。その前に技術者は何から報告すればいいのか迷っていた。

「ウィルスが見つかったんでございませよ？」

順番はスケアリーが決めてくれたようだ。しかし、ウィルスのことから話して全てを上手く説明出来るかが問題だ。別のことから話したとしても彼が知ったことを上手く説明するのは困難なことではあるのだから、何から話しても同じ事だ。

「そうなんです。ウィルスなんです。ボクが謎のログサービスを調べるのに、そのホームページにアクセスしたら、このコンピューターも感染していたんです。そのウィルスを解析してみると面白いことが解りました。感染したパソコンを使って謎のログサービスでログを書くためにログインすると、そのパソコンにさらに危険なウィルスをインストールする仕組みになっていたんです」

「感染すると使っている人間の体が見えなくなってしまうということですか？」

技術者はコンピューターを見ながら話していたのだがスケアリーの発言に驚いて彼女を見た。彼女はまだ疲れた顔をして立っていた。

「そうじゃないですけど…。あの座ったらどうですか？ それからコーヒーでも飲みますか？」

スケアリーは黙って椅子に座ると、今の発言は失敗だったと後悔した。だが、もし「そうなんですよ」などという答えが返ってきたとしたら、スケアリーは元氣を取り戻していたかも知れない。いずれにしてもさっきモオルダアの部屋で体験したことに納得のいく説明が出来ればそれでいいのだ。

技術者がコーヒーを入れて戻ってきた。見かけによらず意外と親切ですね、と思ってスケアリーは笑顔でそれを受け取った。笑顔といっても口元を動かすだけで精一杯ではあったが。

「それで、そのウィルスに感染するとすねえ…」

技術者はまたスケアリーの変な発言で話を中断されないようにスケアリーの方を向いて話を始めた。

「感染したパソコンは画面上では今までどおりでも中身はまったく別のシステムになってしまふんです。ヨシオ君の家にあったパソコンの状態はその最終形みたいな感じなんだと思いますけど」

「別のものになると何が問題なんですか？」

「分散コンピューターの一部になります。それは、ある処理を複数のパソコンを使って負荷を分散されることで処理能力を高めるための技術ですけど…」

「そんな事をしてなんの意味があるんですか？」

スケアリーが分散コンピューターの事を知っていてくれたので技術者は多少ホツとした気分だった。これで面倒な説明は省けるようだ。

「それが解らないんですよ。謎のブログサービスがそのウイルスを利用者のコンピューターにインストールしているとしても、そこにはもの凄い矛盾があるんです」

そう言って技術者は別のパソコンのところに行ってスケアリーにモニターを見せた。

「これは謎のブログサービスの入会用のページなんですけど、ここを見てください。定員三名って書いてありますよね」

「分散コンピューティングをするのに三台じゃ少なすぎますわ」

「そうなんです。何をするのが目的か知りませんが、分散コンピューターならもっとたくさんの方のコンピューターを使わないと意味がありません。それで、実際にここにあるパソコンも意図的にウイルスに感染させてみたんです」

そう言って技術者はまた別のパソコンを指さした。スケアリーは少し考えてから技術者に聞いた。

「そのウイルスってどこにあったんですか？ 確か謎のブログサービスの謎のサーバーはどこにあるか所在がつかめないって言ってませんでしたか？」

「まあ、それはそうですね、こうやってパソコンからはアクセス出来ずし、幸いモオルダさんがブログを始めるにあたってボクにいろいろ聞いてきまして。それで、聞いてもいないのにモオルダさんのIDとパスワードまで教えてくれて、それでモオルダさんのブログの編集画面にもアクセス出来たんですよ。アクセスしたら自動的にウイルスに感染しますから」

モオルダは始めからこのことを知っていて技術者にIDとパスワードを教えたのならすごいことだが、多分違うだろう。とにかくモオルダのIT社会における危機管理能力の欠如にスケアリーは感謝した。

「それで、何か解りましたの？」

「正確には何も解らないんですけど、面白いことが解りましたよ。感染したパソコンは定期的に何かの暗号のようなものを画面に表示させるんです。暗号と言うよりは信号の方がいいですかねえ。これを見てください」

「それ、パソコンに表示される信号の部分だけをプリントした物なんですけど、実際には画面上でその模様に対応する部分が一瞬点滅するだけなんです。もしかすると、この信号を送ることが、ウィルスの本来の目的なのかも知れません」

「それで、この模様になんか意味はあるんですの？」

「それはまだ解りません。バーコードとして読みとつても、機械は反応しないんです。たまに意味のない文字を読みとることがありますが、それは偶然だと思います。多分これはバーコードではないんです」

スケアリーは渡された謎の信号のプリントされた紙を見ながら、この信号とさっきのうっすらとしたモオルダアや別人になった返ってきた男やヨシオ君の事などとの関連性を考えてみたが、そんな事は解るわけがない。スケアリーは心身に疲弊していた。そんな彼女にとってこの信号と謎のブログサービスでブログを書いていた人間達の事を結びつけるのは、彼女自身がでっち上げたおかしな理論以外になかった。「肉体が少しずつ電波の一種になって放出されて、それがコンピューターの中に入り込んだ」という彼女の思いつきの考え。もしかして、この信号をモニター上から送信されるのを網膜が読みとつて人体に何らかの影響を与えるのかも知れない、とスケアリーは本気で思いこみそうになっていた。

「これは妖怪ですね」

技術者はこの言葉を聞いてちよつとスケアリーの事が心配になってきた。

「あの、スケアリーさん。ちよつと休んだ方がいいんじゃないやありませんか？ あなたは、今日の朝早くからずっと働いてばなしでしょ？」

「それはそうですけど、チャンスは今しかありませんでしょ？」

技術者はスケアリーが何を言っているのか良く解らなかつたが、ちよつと恐ろしい気もしていた。実は技術者も先程オルダモアの書いた「同僚Sに関する謎」を読んでいたので。その内容を信じていたわけではなかつたが、読んだ後にこんな怪しい事を言うスケアリーを目の前になるとちよつと恐ろしくなる。

「チャンスって、なんのチャンスですか？」

「ちよいと！ あなたは技術者なんだからそのくらいは気付いてくださらない？」  
スケアリーが少しきつい口調になって技術者はたじろいだ。

「貴重な三名の定員の中にモオルダアがいて、あたくし達はモオルダアのIDとパスワードを知っているんですよ！」  
それを聞いて、技術者は安心した。まともな考えだ。

「そうですね。そう考えたらボクらは普通の状態より一歩だけ謎のプログサービスの謎のサーバーの近くにいるんですよ」

とは言ったものの技術者は何をしたらいいのかまでは解らなかった。

## 23 モオルダアと帰ってこない男とヨシオ君

モオルダアは部屋の中を見回していた。ここはいつものボロアパートの汚い部屋のはずなのだが、どこか様子が違って  
いる。

「ここは確かにボクの部屋だよ」

彼は目の前にいる男に言った。男は例の「帰ってきた男」と同じ顔をしている。この場所では「Thermal Talisput（多分サマル・タリスプットと読む。以下「T」）」という名前を使っている。

「そんなことはないよ。隅の方をよく見てみなよ。普段あまり見ないようなところを」

モオルダアは言われたとおりにした。普段あまり見ないところというのは考えてみれば沢山ある。机の下に放置されているがらくたや本棚の中の読む気のない本など。或いは引き出しの取っ手はどんなデザインだったのか。自分の部屋と  
いってもいちいち覚えていないところは沢山あるのだ。そう思いながら部屋を見渡すと不思議な事にそれらの忘れてい  
る物がある部分はボンヤリとした影のようになっていた。

「確かにおかしいねえ」

「いずれ全てが影になるんだよ。じゃなくて面影といった方がいいかな」

Tはモオルダアに説明した。モオルダアはそれでも良く理解出来なかった。

「でも、どうしたらそんな事が出来るんだ？ 物を消す事なんてできないだろう？」

「これは物ではありません」

ヨシオ君が言った。

「これはオルダモアさんの記憶なんです。今はまだこの部屋もかなりハッキリしていますが、ブログを書いているうちにすぐに忘れてしまいますよ。そうなったとしても自分で作り直せば良いんですけどね」

「ボクらには部屋なんか元々必要ないと思われてたんだよ。それから肉体だって必要ないんだ。ボクらには思考だけがあれば十分なんだ。ボクも始めは大歓迎だったよ。考えたことが全部ブログの記事になるんだから。だけど、もうそろそろここをやめたいと思ってるんだけどね」

Tは少しウンザリした感じで言った。

「やめるのは自由じゃないのか？」

モオルダアは聞いたがTは首を横に振っただけだった。

「退会については特に何も書かれていなかったはずですよ。次に誰かが入ってくるまでTさんはやめられないんです。でもそれも難しいでしょう。ボクら三人は書きすぎてしまうタイプの人間ですから。それ以上に書く人が現れないと入会は出来ないんです」

ヨシオ君が説明するとモオルダアは気の毒そうにTの方を見たが、そこにTの姿はなかった。

「あれ、どこ行ったんだ？」

と言ってヨシオ君の方を見たがヨシオ君もいなくなっていた。

おかしいな感じだ、とモオルダアはまた部屋の中を見回してみた。確かに時間が経てば経つほど部屋の中はボンヤリと霞んで見える。記憶なんてこんなものなのだろうか？ 試しにモオルダアは自分が子供のころ住んでいた家を思い出してみた。色褪せた写真に写っている自分の後ろの壁。自分が頭をぶつけてケガをした柱。人の顔に見えて恐ろしかった天井のシミ。思い出せたのはそれだけだった。

モオルダアは考えるのをやめてもう一度今いる場所に目を戻した。するといなかった二人が戻っていた。

「ちよつとブログの更新をしに行ってたんだよ。ブログをやめたい、ということを書き文字ぐらいで詳細に書いてみたよ」  
Tが言うのを聞いてモオルダアはおかしい話だと思った。

「どうしてそんなことをするんだ？ そんなに書くから新しい人が入ってこないんだろ？」

「でも、思ったことが全部記事になるんだから仕方ないよ。オルダモアさんだってさっき記憶についていろいろ書いて

たじゃん」

「あれは書いたんじゃないかと思ってただけだよ」

モオルダアは言ったが前にいる二人に笑われただけだった。

「信じられないと言うのなら、試しに何かを考えてみればいいんですよ」

ヨシオ君に言われるとモオルダアはちよつと視線を下に向けて考え始めた。するとモオルダアの姿が二人の前から消えた。

「考えてるね」

「考えてますね」

二人はお互いを見合つてにやついていた。

## 24 スケアリーと技術者と研究室

技術者はスケアリーに頼まれてウィルス駆除のプログラムを書いている。始めはそんなことは一人で出来ることではないと言つて、朝まで待つてエフ・ビー・エル他の技術者が来るのを待つことを提案したのだが、スケアリーに優しい笑顔で頼まれるといやいやながら承諾した。もしかするとスケアリーの女の武器が初めて通用したのかも知れない。しかし、そんな事はどうでもいいのだ。本当に一人でウィルス駆除のプログラムを作ることが出来るのかどうかは解らないが、天才肌の技術者ならなんとかしてくれるかも知れない。

スケアリーはというと「オルダモアの捜査ファイル」の内容をチェックしている。アクセスするたびに記事の数が百以上増えていき「同僚Sに関する謎」の記事などその他の記事にまぎれて忘れ去られてしまった。その全てを讀んでいる気などスケアリーにはなかったのだが、先程から更新される記事の数が減っていることに気付いた。スケアリーは注意深く調べてみると、ある記事に大量のコメントがついているのが解つた。

そのコメントを表示させると、それはまるで同じ場所にいる三人が会話しているようなおかしな内容だった。

「みんなコンピュータの中に吸い込まれてしまったんですわ」

スケアリーがつぶやいたその言葉は技術者の耳にも届いていたが、彼はなるべく気にしないようにしていた。きっとそうとう疲れているに違いない、と思つて彼は黙々と作業を続けた。



スケアリーの見ていた記事のコメント欄には新しいコメントが書かれなくなった。そこで彼女は新着の記事を確かめてみた。思ったとおり新しい記事が投稿されていた。

「ヨシオ君について」

ヨシオ君に言われたとおり考えてみることにした。何を考えればいいかしばらく迷ったのだが、ヨシオ君の顔を見ていたら、始めの私の推理が間違っていたことに気付いたのだ。そのことについて考察していこう。

ヨシオ君に会う前、彼の友人の態度から察して私はヨシオ君もきつとモジモジしているに違いないと思っていたのだ。しかし私がいかに会ったヨシオ君は少しもモジモジしていなかったのだ。少し無口な感じはするが、それは年長者である私やTに気を使っているだけでも考えられる。

しかし、気になる事がある。私の会ったのはヨシオ君であるが、それはヨシオ君自身と言うよりヨシオ君の書いた文章である可能性もあるのだ。文章には少なからず本人の性格が現れるものだが、そこから考えてもヨシオ君がモジモジしている可能性は低いと言えるだろう。

ただ、問題なのは文章が思考から離れるのはいつなのかということである。人は言葉を使って考える。しかしその言葉をそのまま文字にしたところでそれが意味をなすとは限らないのだ。考えたことがそのまま記事になるといっても、その考えには何らかの加工が必要になるのである。…。

面倒なことになってきたのでスケアリーはここで読むのをやめた。そして机に顔をうずめると眠りに落ちた。

それからどれくらい経ったのか、深い眠りについてしまったスケアリーには解らなかった。目を開けると窓の外はうっすらと明るくなっていった。すごくイヤな夢を見ていたような気がしたが、もう一度眠りにつけばそんな事は忘れられると思えた。もう一度目をつむろうとすると、誰かに肩を揺さぶられてスケアリーは顔を上げた。

「出来ましたよ。行きましょう」

そう言う技術者の目の下にはくつきりとクマができていたが、何かを達成した時の満足感が滲み出ていた。それを見て

スケアリーはやっと自分がどこで何をしていたのかを思い出しかけていた。彼女の肩にはいつの間にか毛布が掛けられていたが、まだハッキリしない意識の中でそれをたたんで机の上に置くと、目をこすりながら技術者についていった。

## 25 モオルダアとTとヨシオ君とスケアリー

ヨシオ君のところへモオルダアがやって来た。モオルダアはどこかで見たような部屋だと思ったが、すぐにどこか思い出した。ここはヨシオ君の部屋だ。まあ当たり前といえば当たり前だが、この部屋は全てがかなり鮮明だ。

「キミはズいぶんと記憶力が良いようだねえ」

「そうじゃなくてボクが作り直したんですよ」

ヨシオ君のこの言葉にモオルダアは軽いシヨックを受けていた。しかし、そんなふうに混乱させられるためにここへ来たわけではなかった。

「そんなことよりも、ボクはすごいことに気付いたぞ。キミにいわれているいろいろ考えていたんだけど、もしかするとボクらはまだ現実世界にいるのかも知れないぞ」

「そんな事はありませんよ、何を根拠にそんなことを言うんですか？」

「思考が勝手に文章になっているというところだよ。キミがどうやって考えるか知らないが、ボクはものを考えるのに言葉は使うけど、文章は使わないんだ。ボクの思考は言葉の羅列から始まる。そこから結論を導き出すということなんなんだけど、そんなものは文章になりえないだろ？　もしかするとボクらは無意識のうちにキーボードを叩いて文章を書いているのかも知れないだよ」

ヨシオ君にとっては興味深い話ではあったが、少し難し過ぎたかのかも知れない。しばらく黙って考えたあとにヨシオ君は言った。

「でも現実世界じゃこれは出来ないでしょ？」

彼らの間に質感のない球体が現れた。モオルダアは驚いてそれを見ている。

「なんだこれは？」

「今ボクがこの部屋のコードを書き換えて出現させたんです。ボクの実力じゃそれが限界ですけど」

「コード?!」

「そうですよ。慣れてくればブログの見た目は自分で変更することが可能です、って説明に書いてありましたよ。読まなかったんですか？」

「：読んだけどなんだか意味がわかんなくて。これ、ボクにも出来るのか？」

「ええ慣れてきたら出来ますよ」

モオルダアは変なところに興味を示している。そこへTが現れた。

「なんだこの球は？ 影ぐらいつけないと不自然で気持ち悪いよ」

「すいません。オルダモアさんが変なことを言うから、その球で説明してたんです」

モオルダアはそんな事を言ったかどうかなどすっかり忘れて部屋の真ん中に現れた不自然な球体を眺めていた。

「これ、どうやるのかボクに教えてくれないかなあ？」

「そんな難しいことでもないよ。設定ファイルの開き方さえ解れば後は考えるだけだからね」

Tは設定ファイルの開き方というのを説明し始めた。モオルダアとまだ初心者であるヨシオ君はその説明を聞き入っていた。すると突然モオルダアの口が開いた。

「ちよいとみなさま！ お話の途中で割り込んで失礼ですけど、助けにまいりましたわ！」

Tとヨシオ君は驚いてモオルダアの方を見た。モオルダアの口からスケアリーの声が出たのだ。

「なんだこれは？」

同じ口でモオルダアが言った。

「なんですか？」

「なんなんだよそれは？」

続いて二人も似たような事を繰り返した。しばらく沈黙が続いたあとにまたモオルダアの口が開いた。

「みなさま、あたくしはキーボードを使っているんですから、もつとゆっくり話してくれないと追いつけませんわよ」

「これってもしかしてオルダモアさんのIDを使って誰かがログインしているって事か？ これは完全な規約違反だ」  
そうやってTがモオルダアを睨んだ。モオルダアは自分のせいじゃないと言おうとしたがまたスケアリーがモオルダアの口で話し出した。

「それでは説明しますわね。あたくしの名前はスケアリー。これからあたくしがある操作をするとあなた方のいるシステムは壊れてあなた方はそこから追い出されますわ」

口を使われているモオルダアは困った顔をしながらスケアリーに代わって話している。それが終わるとすぐに言い返した。

「システムが壊れるってどういう事だ？ それに追い出されたらボクらはどうなるんだ？……残念ですけど、あなた方が書いた全ての記事は消えてなくなりますわ。それであなた達はこちらに戻ってくる事が出来るんですよ。ただし、確実に安全なのはヨシオ君だけですけど。……それどういう事？……そりゃ子供が最優先に決まってるじゃありませんか。ですからあたくし達はヨシオ君の部屋でこの作業をしているんですよ」

「そんなの無茶苦茶だ！ これまで苦労して書いてきた記事を消されるなんて」  
Tが抵抗した。

「そうですね。ボクらはみんなここが気に入っているんです。それに、球体や立方体も出せるようになったばかりなんです。まだまだやることは沢山あるんです。いづれ全ての思考を使い切って、ただのマシンになって……」

そこまで言ってヨシオ君はまずいと思ったのかTの方を見た。Tは少し気分が悪そうだ。ヨシオ君の言葉に興味を持ったモオルダアが何かを言おうとしたが、先にスケアリーがモオルダアの口を使った。

「ヨシオ君！ あなたいったい何のおつもりですか？ あなたがやることはそんなところにはありませんわよ。それに、あなたはお母様の事が心配じゃないんですの？」

「そんなの関係ないですよ」

ヨシオ君が思いきった調子で言い返した。

「悪ぶっても後悔するだけですのよ。あなたのお母様はあなたを心配するあまり気を失って入院しているんですよ！」  
それを聞いたヨシオ君は明らかに動揺して言葉を失った。Tはその様子を見てここにとどまることを諦めかけていた。ここで抵抗しても、この様子じゃヨシオ君はこれ以上何も書かなくなるだろう。それに、規約違反のモオルダアはすぐに登録を取り消される。新しい誰かがここにやって来たら次に出行かなくてはいけないのは彼自身なのだ。

「それじゃあ、残念だけどもきらめるしかないのかなあ」

しかしモオルダアにはまだ気になることがある。

「ねえ、さっきヨシオ君が言ってたマシンがどうのこうのって、アレはいったい……」

最後までいう前にモオルダアの口はスケアリーに乗っ取られた。

「それじゃあ、準備は良いですわね？ エフ・ビー・エルの技術者が即席で作ったこのプログラムで、この面倒な失踪

事件は見事……ちょっと待ってよ、スケアリー。それよりも先にもっと重要な話が聞けそうなんだよ。マシンがどうのこうのって、いったいどういう……きつとあなた方の脳みそがコンピュータの一部となってしまふということですよ！ そんなことより早くしないと、あなたは今規約違反中なんですから見つかつたら接続が切られてしまいますわ！ それにあたくしもう眠いんですから、何があろうとこれでみなさんはその世界とお別れですよ！」

そう言うとモオルダアの動きが止まった。彼の口からはスケアリーの声も彼自身の声も聞こえてきそうにない。部屋の真ん中にある球体のように、モオルダアは不自然な気持ち悪さを醸し出している。存在するはずのないものが存在しているという感じた。

「何が始まるんだ？」

モオルダアの姿を眺めながらTがつぶやいた。見ていると固まって動かないモオルダアの色が薄くなっていく。モオルダアから色が抜けていき、次第に白黒写真のようになっていった。そして、モオルダアの周囲にもそれは広がっていった。彼を中心にして部屋全体が白黒写真になっていく。驚いてモオルダアを眺めているだけだったTとヨシオ君もいつしか自分たちの体が白黒になっているのに気がついた。

「すげー！」

Tは自分の両手を顔の前に持ってきて感心していた。確かに「すげー」ことである。自分の肉体が消えていくのを体験出来るのは彼ら以外にいないだろう。そのころ、モオルダアの体はすでに半分消えかかっていた。全身が砂粒の固まりのようになり、それがどんどん崩れていった。崩れ落ちた粒は床に落ちる前にどこか知らない空間へ煙のように消えていくように見えた。

モオルダアの体が消えてなくなるころには部屋全体が崩れかけていた。崩れた壁の向こうに何が見えるのか。Tは思わずそこを見てしまったから、見なければ良かったと後悔した。そこには終わりなく続く無の世界があるように思えたのだ。彼がその時に考えたことが記事になっていたらどんな問題作になっていたかを想像して、すこし惜しい気もしていた。しかし、もう全ては終わりがかけていた。部屋のほとんどは消滅して形のあるものはほとんどなくなっていた。最後にTのニヤつく口が残っていたがそれもすぐに消えて、無が訪れた。

## 26 依頼人の男と帰ってきた男

その頃「パーティ会場」と彼らが呼んでいる部屋ではいまだに「人生のお悩み相談」が続いていた。依頼人の男は傍らで寝ている他の友人達を恨めしそうに見ていた。

あれからずっと帰ってきた男は自分の身の上話を依頼人の男に聞かせ続けている。依頼人の男にはそれがほとんど聞こえてこない。ただひたすらこの話が早く終わることを願っていたのだ。彼にとってこれほどつまらないものはない。こんな暗い話を聞かされては、いくら飲んでも楽しくならない。それでも、真面目に話を聞くよりは飲んでいた方がマシだということで、先程からすごいペースで強い酒を飲んでいる。もう依頼人の男は目の前の男が本物かどうか、ということはどうでもよくなっていた。

依頼人の男の持っていたグラスが空になった。彼はまたビンを開けてそこに酒を注いだ。その間もずっと帰ってきた男は暗い話を涙ながらに続けている。依頼人の男は身体的にはそうとう酔っていたのだが、気持ちは沈んだままだ。「こんな時はあとでトイレに駆け込んで汚い音を外に響かせることになるに違いない」と依頼人の男は暗い気持ちで考えた。目の前の帰ってきた男が霞んで見えるほど飲んでるのに。

帰ってきた男の話はさらに暗くつまらないものへ進展していきそうになっていたのだが、その時に異変が起きた。依頼人の男には帰ってきた男の体が、電波の届きづらい所で見るとテレビのように見えてきたのだ。「これはそうとう酔ってしまったなあ」と思っている間に、帰ってきた男の姿はどんどん見えづらくなってくる。そればかりか、時々グニャッと異様な感じに歪んだりしていた。依頼人の男はこれは酒のせいではないかも知れないと少し焦りだしていたが、次の瞬間プツンという音と伴に帰ってきた男は消えてしまった。壊れたテレビがそれを最後に永久に映らなくなる時のように。

依頼人の男は驚いてしばらく帰ってきた男が座っていた辺りを見つめていたが「まあ、いいか」とつぶやいて、その場で横になった。が、すぐに起きあがるとトイレに駆け込み、外に汚い音を響かせていた。

## 27 ヨシオ君の部屋

「ちょいと！ どうしてヨシオ君は戻ってこないんですの？」

スケアリーが涙を浮かべて技術者に詰め寄っていた。ヨシオ君の部屋にあるパソコンにはウィルス駆除のために使った

装置とスケアリーがモルダアの口を使って喋るのに使ったキーボードが接続してある。これらの装置を使って問題は全て解決したと思っていた技術者は少し困惑していた。

「戻ってくるって、こんなに早くは帰ってこないでしょう。ブログがなくなったんだからそのうち帰って来ますよ」

「そんなはずはないんですよ！ ヨシオ君はここで消えたんだから、ブログがなくなった瞬間にこの部屋に戻ってこないといけないんですよ！ あなたは自分のミスに気付いていらっしやるの？」

技術者は装置が出力したものをチェックして自分の作ったプログラムがちゃんと謎のブログとウイルスを消去するのに成功したのが解っていた。それなのに、スケアリーは涙ぐんで彼を攻めている。

「もしかしてスケアリーさんは本当にヨシオ君がそのパソコンの中にいると思ってたんですか？」

この答えは言いたくなかったが、言うしかなかった。「だってそれ以外考えられないじゃないですか」と。しかし言う前にいいタイミングでスケアリーに電話がかかってきた。電話に出るとスケアリーの声のトーンはそれまでとは一段高くなっていた。

「あら、そうですね？ それは良かったですわ！ きつとあたくしとあなたの努力が実ったって事ですわね。…えっ？ あらいやだ、それは冗談ですわよ。オホホホホ！」

電話を終えると、スケアリーは不思議そうに彼女を見ていた技術者に言った。

「ご苦労様、これで事件は解決ですわ！」

それからにつこりと微笑んだ。良く解らないが技術者も嬉しかったので彼女に微笑み返した。

彼女にかかってきた電話は警察からのものだった。しかもたまたま署に居合わせたニコラス刑事（甥）からだった。とあるネットカフェの前をうろついているヨシオ君をパトロール中の警官が見つけたという事だったのだ。モジモジしていたが身体に異常はなく健康そのものということだった。そして彼の希望でそのまま母の入院している病院へ向かったそうだ。

それにしても、せっかくニコラス刑事（甥）を復活させたのに全然出番がなかったのが残念である。いろいろこまかいネタが多すぎて、さらに彼を登場させてしまうと話がどれほど長びくか予想も出来ない、という事なので仕方がない。また今度に期待しよう。

技術者は時給を稼ぐため家には帰らずエフ・ビー・エルに戻っていた。今は暇つぶしに今回の件で得られたデータの整理をしている所だった。そこへモオルダアから電話がかかってきた。

「もしもし、技術者君？ ちょっと助けて欲しいんだけどねえ。これはいったいどういう事なんだろう？」

「ボクは自分の家にいたはずなんだけど、気がついたらここはどっかのビルのサーバールームみたいなんだよ。ドアには鍵が掛かってて出られないし、なんとかしてくれないかな？」

技術者は神妙な面もちで頭の中を整理してみた。なんでモオルダアが鍵の掛かったサーバールームに？ この問いに技術者は理論的な答えを出したかったが、もしかするとスケアリーのように考えた方が納得出来るかも知れないと思った。彼は近くにあった整理済みのデータを見た。

「モオルダアさん。多分あなたのいるサーバールームは、あなたが謎のブログに接続するために経由していた256のサーバーのうちのどれかです。どれも結構大きな会社ですから、そのうちセキュリティがやって来て警察に連行されるでしょうから、安心してください」

「なんで、安心なんだよ！」

「もしかして、エフ・ビー・エルのIDとか持ってないんですか？」

「家にいたんだから持つてるワケないだら」

「ああ、そうですか。それじゃあ警察に捕まったらエフ・ビー・エルに連絡するように警察の方に頼んでください。ボクが上の人に事情を説明しておきますから。…あと、それから、モオルダアさんの家の前にある変なポストに関してエフ・ビー・エルに苦情が殺到してるみたいですよ。アパートの前がゴミだらけだって」

技術者は妙に明るい声で話している。彼が電話を置く時に電話の向こうから幽かにモオルダアが警備員に捕まって変な悲鳴をあげているのが聞こえてきたが、技術者にはそんなことは気にならなかつた。ニコニコしながら受話器を置いてパソコンの操作をするとエフ・ビー・エル職員のデータベースにアクセスした。画面にはスケアリーの顔写真とプロフィールが映し出された。うわ、技術者が恋をしている…。



## 29 十三階スキャナーのオフィス

翌日、モオルダアは大量の書類を持ってスキャナーのオフィスに入ってきた。目の前に積み上げられた書類の山をスキャナーが呆然として眺めている。

「なんだね、これは？」

「報告書ですよ」

モオルダアは誇らしげに言った。タイピングが上手くなったモオルダアは調子に乗ってこのとてつもなく長い報告書を書いてきたらしい。長ければ良いというものではないのだけれど。

「悪いが私にはこれを全部読んでいるヒマなどないぞ」

「また、そんなこと言って。副長官はいつもヒマそうじゃないですか？」

「キミ、これはシーズン2だぞ。都合によってエフ・ビー・エルの職員はヒマになったり忙しくなったり出来るようになったんだよ」

「なんですかそれ？」

「どうでも良いから、かいつまんで説明してくれたまえ」

モオルダアは不満げである。

「かいつまんで言うとういうことです。ある少年が失踪したんですが、ボクはその少年がコンピューターの世界に閉じこめられたのだと思います。そこでボクもコンピューターの中に入ってみたら、やっぱりそこに少年がいました。どうしてそんな事になるのか説明出来ませんが、ウィルスに感染したパソコンから送られる信号と関係しているはずですよ。それからこれも証拠がないのですが、それらは人間の脳をコンピューターの一部にするための実験だったと思われます。補足ですが、少年はやっぱりモジモジしていました」

「また今度も何も起きなかったことと一緒だな？」

「まあ、そう言ってしまうばそうですね」

「わかった。もういいって良いぞ。…この報告書も忘れずに持っていけよ」

モオルダアが書類を抱えて部屋から出ていく。ドアの所でしっかりとまとめられていない書類をモオルダアが落として紙がそこら中に散らばる音がしていたがスキャナーは気付かないふりをしていた。

### 30 謎の建物

謎の建物の地下室ではスーツを着た男が作業服を着た男に向かって話していた。

「それで、結局のところ原因はなんだったんだね？」

「謎のメッセージが多量に送信されてきたためだと思われます」

「そのメッセージとは？」

「面倒だから何も考えたくない、考えるの大嫌い！ という内容でした」

「そうか、それは第一に修正しないといけない問題だねえ」

「はい、いま修正済みのプログラムをチェックしているところです」

「とにかく実験の第1段階は無事終了したんだ。この調子で頼むよ。それで、今回の実験データは？」

「はい、こちらです」

スーツを着た男は作業服を着た男から大きな封筒を受け取ると部屋を出ていった。

スーツを着た男は長い階段を登り続けてやっと一階に辿り着いた。いくつかの部屋を通り抜けて安っぽいドアを開けて外に出た。最新の設備が整っていた地下室とは比べものにならないほど普通のドアの表札には小さく防衛省2.0（「庁」の文字が消されて上からマジックで「省」と書かれていた。そこは見た目には良くあるアパートのようだった。

### 31 その他のダラダラしたこと

その後の行方が書かれなかったTに関してだが、彼もきつとどこかにひよっこりと現れて、どうして自分がここにいるのか不思議に思いながら家に帰っていったことだろう。どうせ詳しく書いたところで特に面白いこともなさそうだし。今頃はもう飲みたくないと思っっている友人達を集めてパーティをしているに違いない。

それから、ヨシオ君の無事を確認した後のスケアリーは家に帰るとそのまま寝てしまった。目覚めてからは、今回の事件での自分の活躍がいまいちだったということを全部モオルダアのせいにしてイライラしていた。

あと、彼女に好意をよせている技術者だが、最後まで名前を付けてもらえなかったということは、今後登場する可能性は低そうだ。ただ、彼は想像以上に優秀な上にモオルダアと同じくバイトという面白さもあり、もしかすると名前付きで再登場するかも知れない。ただし、スケアリーは彼のことをなんとも思っていないようだ。

モオルダアの家の前にあった妖怪ポストはエフ・ビー・エルが費用を負担して処分された。一つ残ったペケファイルの部屋にあった妖怪ポストは清掃員がゴミと間違えて捨ててしまったということだ。結局全ては最初とあまり変わっていないようだ。



## #016 「アパートメント」

### 0 はじめに

それぞれの部屋には違った人がいて、違った生活があるが、外から見ればそれは一つの建物。そういうアパートをネタにして書いたので、この「アパートメント」を一つのストーリーとして読もうとすればワケの解らないことになる。各章では違う話が展開するのだが、それでも「アパートメント」という一つの話を外から眺めるとそれは一つの物語になっっているようにも感じられる。そういうお話です。

### 1 201号室

窓から遠くを見つめると、雲がひとかたまりゆっくりと流れていく。この寒い時期の空はあまり青いとは思えない薄い色をしていると気付いたのはつい最近のことだ。ここへやって来て何年も経つというのに。

窓の下の通りでは一人のサラリーマンが通り過ぎていった。この人の少ない昼間の住宅街にもスーツ姿は沢山見かける。あれはきつと銀行員に違いない。ここに来てから私は色々な人間を観察してきたが、あの感じは銀行員の典型といった感じだ。商売のための嘘と人を騙すための嘘があると知っている、よくできた銀行員だろう。まあ、そんなことは私にはどうでもいいことだ。少なくとも彼がこのアパートにやって来ることも、私と話すこともないだろう。

私は仕事にも行かずに、このくたびれたアパートの自分の部屋からそんな男を見ていることに意味もなく優越感を感じていた。私は故郷に帰るのだ。今日は多分ここでの最後の一日なるだろう。

部屋の中の荷物はほとんど片付けられて、小さなカバンが一つ置いてあるだけだ。私は何も無い部屋の真ん中に横たわって天井を眺めた。最後の日だからといって特に何かをしよう、という考えもなかった。もう戻ってこないであろう。この空気の臭いを少しだけ意識して感じてみよう、ということ以外は。

私は新たな出会いと刺激的な生活を求めてここへやって来た。知らないことだらけのこの地で、きっとそれは手にはいるだろうと思っていたのだ。ところが、実際にはそうでなかった。つまらない仕事と、あまり口を聞かない仕事仲

間。同じことを繰り返す毎日。不思議なことに、始めは苦痛でもそれを繰り返しているうちに感覚は麻痺してしまうようだ。麻痺というよりも「これが普通なのだ」と思うようになってしまったのだろう。普通だと思えばなんでも受け入れられる。普通でないことを普通と思うことによって人間は進化したり退化したりしてきたのかも知れない。

私もしばらくはそんな感じで日々の生活が続けていたが、ここでの生活に意味がないと気付いてしまえば、こんな場所に長居は無用である。仕事場の同僚達は私が突然やってこなくなったことをどう思っているのだろうか？ 私は別れのあいさつなど苦手だから、上司以外に辞めるということは伝えていなかった。今思うとそれが少しだけ心残りではある。どうせ、そうしたとしても彼らはなんとも思わないのだろうか。

結局、この人間も故郷の人間も少しも変わるところがなかったということだ。どこへ行こうと我々は孤独を感じずにいることは出来ないだろう。ここで私が得たものとはそんなところに気付いたことぐらいだ。まあ、そんなことはどうでもいい。これから先に少しでも良いことがあると想像しながら少し眠ろう。今日初めて気付いたが、何もない平日がこんなに眠いとは知らなかった。

どれだけ眠っていたのだろうか。もう外は薄暗くなっている。私はドアの外で人が大勢集まっている気配を感じて目を覚ました。この古いアパートは一人が通路を歩いただけでも振動がこの部屋まで伝わってくるのだが、小さな地震のように部屋が揺れるとはかなりの人数がやって来たに違いない。しかし、一体なんのために？

一瞬の間をあけて、ドアを蹴破る激しい音が聞こえた。私は飛び起きてドアの方を向いて身構えた。しかし、私の部屋のドアは閉まったまま。となりの部屋からは数人が暴れている音が漏れてきたが、しばらくするとそれはおさまった。私はアパートの通路に面した窓を静かに開けて外の様子をうかがってみた。すると目の前をとなりの住人が警察に連れられて通り過ぎていった。正確には「となりの住人と思われる男」と言った方が良いだろうか。私は今までその男を見たことがなかった。長いことここに住んでいて、となりの住人の顔も知らないとは。でもそれはここでは当たり前前のことかも知れない。そこを気にするのはよそう。

部屋の外はしばらくざわついていたが、それもようやくおさまって来た頃、私の部屋のドアをノックするするものがあった。この状況から察すると、そこには警察官か何かがこの騒動についての説明といくつかの質問をするに違いない。居留守を使おうかとも思ったが、きっとこれはここでの最後の会話になるはずだ。それがこんな事件の話だという

のも良い土産になるかも知れない。私はドアを開けた。

ドアの外にいたのは警察官ではなくてスーツを着た男だった。私はその男の目を見た瞬間に直感した。私がここでの生活で感じていた物足りなさも、この男なら解ってくれる。私を理解してくれる数少ない人間の一人に違いないと。

「どうも、お騒がせしてすみません。私はエフ・ビー・エルのもオルダア捜査官です。となりに住んでいる出間駄<sup>デマダ</sup>さんが一日に300件もエフ・ビー・エルにウソの通報をしてることが解ったんで逮捕しに来たんです。少々騒がしいことになりましたが特に危険なこともないんで…」

このモオルダアという男はまだ何かを話していたが私には関係ないことだった。それよりも私はこの男の瞳の奥にある何かに興味があった。私を見て話してはいるが、その瞳の奥では遠くの世界が広がっている。私の住んでいた懐かしい世界を感じるのだ。この男はきっと私のような者を探しているに違いない。私はこの男に私の真の姿を見せようかとも思ったが、しかし私はもう決めたのだ。明日にはここをたつて故郷の星に帰ると。そんなことをしても意味のないことなのだ。もうこの退屈な地球には戻ってこない。気の毒だが、モオルダアという男は自分が探し求めていた異星人を目の前にしていながら、それに気付くことはまずないだろう。

## 2 2 0 3 号室

203号室のドアが開いた時、スケアリーは一瞬言葉を詰まらせた。それは自分よりも若々しく美しい女性に出会った時のスケアリーの決まった反応である。こういう女性を前にするとスケアリーはほとんど嫉妬心に近いライバル心を抱くのである。

しかし、いつもと違うことが一つある。この美しい女性がどうしてこんなくたびれたボロアパートの一室に住んでいるのか。スケアリーには理解できなかったが、人にはそれぞれの事情というものがある。この女性がここに住んでいるのも彼女なりの理由があるからに違いない。それよりも、スケアリーはそろそろ言うべきことを言わなければ怪しまれる。

「どうも、いきなりお騒がせして失礼いたしましたわ。あたくしはエフ・ビー・エルのスケアリー捜査官ですよ。となりの部屋に住んでいらっしやるデマダさんがちょっとした問題を起こしまして、御用になったんです。まったくひどい話ですわね…」

そういながら、スケアリーは女性の服装が容姿に似合わず地味であることが気になっていた。部屋着というのなら解るが、それにしても若い女性ならもう少し気を使うべきだと思っていた。

「ええ、それならだいたい解っていました」

女性が答えた。それから多少語気を強めて言った。

「でも、それと私の服装に何か関係があるんですか？」

スケアリーはうろたえていた。上の空で喋っていたせいで、知らずに思ったことが口に出てしまったのだろうか。しかし、そこはどうでもいいのだ。スケアリーが勝手にライバル視している女性が少し挑戦的であることが気に入らなくなってきた。

「あたくしが言ったことに何か問題がございましたか？ でもいくら家だからといえあなたのような女性がもう少し服装に気を使わないと、もったいないですよ」

スケアリーは言うてから多少後悔していた。どうしてこんなことでこの女性と張り合っているのか。しかし言っってしまったものは仕方がない。

「あの、エフ・ビー・エルというのはなんなんですか？ 警察と一緒に女の服装をチェックして回る機関なんですか？ あんまり失礼なことを言っていると訴えますよ！」

やっぱりまずいことになってきた。しかしスケアリーはひるまなかつた。訴えられたとしてもエフ・ビー・エルならきつとなんとかなる。しかも、このボロアパートに住んでいるような女がこれぐらいのことで裁判を起こせるほどの経済力があるとは思えない。そんな風に考えていたスケアリーだったが、ここでいきなりカウンターパンチを食らうことになるうとは思ってもいなかった。

少しの間女性は黙っていたが、こらえきれなくなつたのかヒステリックな声で言った。

「どうせ私は貧乏よ！ でもその何があなたにとって問題だと言うの？ 私だつてこんなアパートに一人暮らしなんてまっぴらよ！ ホントはちゃんとした仕事もできるし、結婚して幸せになったり…。ええ、そうよ。こんな風にヒステリーを起こすからダメなのよ！ でもそれは、あなたが失礼なことばかり言うからでしょ！」

スケアリーはあつけにとられてただ聞いていたのだが、何かおかしな事が起こっていることによく気付いてきた。「ちよつと、待つてくださらない？ さっきから聞いていると、あなたはまるで人の考えを…」

ここまで言うてスケアリーは口を閉じてしまった。この女性がそのとおりだと答えるのを想像すると少し不気味に思っ



たのだ。

さっきまでヒステリックにわめいていた女性は、スケアリーが不思議そうに言っているのを見て、がっくりとうつぶした。「またやってしまった…」そうつぶやきながら女性は部屋の奥に行つてからメガネをかけて戻ってきた。

「あなたの思っているとおおり、私は人の考えていることが解るんです。解ると言うよりも人の考えが、まるでその人が話していることのように聞こえてしまうんです。それだから、私はさっきみたいになつてしまつて、いろんな人間関係も上手くいかず、まともな仕事にも就けないで…。私がひどい近眼だということもいけないのです。でもメガネがあればなんとかなるんです。メガネがないとその人の口が動いているのかそうでないのか解らないんですけど、普通に見えていれば本当に言っていることと、思っているだけのことの区別ができますから」

スケアリーは「へえ、そんなんですの」と言うわけにもいかず、とりあえずこういうことを聞いた時の一般的な反応を示すことにした。

「まさかそんなことはありませんわ！」

と、言つてから失敗したことに気付いた。女性はスケアリーの複雑な反応が解つていようでニヤニヤしていたのだ。「いいですわ。それならあなたの言うことが本当かどうか試みますから、これからあたくしが考えたことをおっしゃつてくださるかしら？ 言つておきますけど、あたくしはインドに伝わる瞑想法を使つて心を無にすることだってできるんですから。適当なことを言うとすぐに解つてしまいますわよ」

スケアリーがいつそんな「瞑想法」を身につけたのか知らないが、ここでも多少のライバル心が働いているのかも知れない。スケアリーと女性は黙つてお互いを見ていたが、すぐに女性が答えた。

「レンプルラントですね。絵のタイトルは知りませんが、教科書に載っている、あれ」

まさかイメーヅまで解つてしまうとは。スケアリーは驚いて言葉が出なかつたが、わざわざ言葉で驚かなくても彼女にはもう解っているだろう。

「言葉で考えるのを聞くのと違つて、絵の場合はあまり鮮明ではないんですけど。ハッキリ覚えていない景色を思い出すみたいなの、そんな感じなんです」

どうやら、もうスケアリーの手には負えない話になつて来たようだ。幸いなことに今日はこういう事態に陥つた時にバトンタッチする人間も来ているのだ。

「ちよいとモオルダー！」

スケアリーはアパートの通路をうろうろしていたモオルダアを呼び寄せた。

モオルダアは先程201号室で事情の説明を終えた後に、203号室に美女の姿（もちろんスケアリーではない）を見つけてスケアリーと一緒に事情の説明をしようと近づいてきたのだが、その時ちょうど女性がわめきだしたのだ。モオルダアは不自然な感じでUターンするとそのまま通路をぶらぶらしていた。

モオルダアは先程の騒ぎが収まっていることを確認すると気取った感じでやって来た。

「モオルダア。ちよいとすごいことになりましたのよ。この方は人の考えが読めてしまうんですのよ！」

「テレパシーというやつだな。それにしてもキミがそんなことを本気で言ってるなんて思えないけどね」

モオルダアはそんなことを言いながら二人の方へ近づいてきたのだが、彼が近づくとつれて女性の顔には不安の色が濃くなってきた。そして、モオルダアの顔がハッキリ見えるくらいのところまで来ると女性の表情は怒りに変わった。

「ちよつと！ 初対面の女性のハダカを想像するって。いったいどういう神経してるの！」

そう言って女性は部屋に入るとものすごい勢いでドアを閉めた。そのすぐ後に鍵をかける音も聞こえてきた。

「せっかくあなたの待ち望んでいた超能力者に出会えたかも知れないのに。：やっぱりあなたはヘンタイだったのね」  
そう言うスケアリーの表情には多少の同情が感じられなくもなかった。

モオルダアは何か言い返そうとしたが頭の中は真っ白だ。

### 3 204号室

このアパートの204号室は現在空き部屋だということである。正確にはこのアパートが70年代初頭に建てられた時からずっと204号室は空き部屋のままなのである。モダンなワンルームアパートだったが現在ではただのボロアパート。それでもいつまでも取り壊されたり建て直されたりしないのは、このアパートが204号室という空き部屋のために建てられたからである。

一体なんのためにそんな怪しい空き部屋が存在するのか。この地域に伝わる風習を守っているとか、何かの怨念がその部屋に取り憑いているからとか、そんな理由があるわけではない。それにこの部屋は空き部屋ということになってはいるが、実際にはこの部屋には住人がいるのである。実を言うとここは闇の組織が作らせた怪しいアパートなのである。

そんな怪しい部屋に住んでいるのは、怪しい人間に違いない。厚いカーテンが閉めきられいつでも真っ暗なこの部屋

にはウイスキーの臭いが漂っている。部屋の真ん中に置かれたソファにはウイスキーをラップ飲みする男が座っている。そのとなりにはクライチ君の姿もある。二人はソファの前に置かれたモニター画面を眺めていた。今そこにはモオルダア、スケアリーと何人かの警察官達がうろついているアパートの通路が映し出されていた。

「いやあ、なんかドキドキしますねえ」

モニター画面の光を受けているクライチ君がイタズラをしている少年のように目を輝かせて言った。ウイスキー男はかすかに不適な笑みを浮かべて黙ってモニター画面を眺めている。

「この秘密の隠れ家にあんなに警察がやって来て、オマケに一緒に来たのがペケファイルの二人なんですよ。大丈夫なんですか、これ？」

「心配することはない。イタズラ電話の犯人を捕まえに来ただけだ。空き部屋となっているこの部屋までやって来るよ。うなことはないよ。それよりキミ、声が大きすぎるぞ」

ウイスキー男はクライチ君にこう言っている時にもほとんど表情を変えない。謎の男とはそんなものである。一方クライチ君はいたってお気楽な感じである。

「大丈夫ですよ。あの二人なら目の前で怪しいことが起こっていても気付かないですよ」

「それがキミのあまいところだよ。キミにはまだあの二人の起こすミラクルが解っていない。どんな人間でもなめてかかると痛い目に合わされるんだ。キミは自分がどれほど重要な情報を扱っている人間か、ということはまだよく理解していないようだ。キミの失敗が人類の未来を左右することになるかも知れないんだ」

「へえ、まあ。そんな感じっすね」

クライチ君の返事に意味はなかった。

その後しばらく二人は黙ってモニター画面を見つめていた。画面に映っているモオルダアとスケアリーはこの部屋に二人がいることにも、通路の片隅に監視カメラがあることにも全く気付いていない。これを見ていたクライチ君がニヤニヤしながら立ち上がると静かにドアの方へと近づいた。ドアを隔ててペケファイルの二人と自分の距離が数メートルしかないという危うい状況がクライチ君のイタズラ心に火を付けた、という感じだ。ウイスキー男は彼が何をするのを見守りながらゆっくりとウイスキーを飲み込んだ。

クライチ君はかがんでドアに顔を近づけると九官鳥が人間の言葉を真似する時のようなへんな声を出した。

「ヘンタイ、モオルダア！ ヘンタイ！」

モニター画面に映るモオルダアは一瞬ハツとして辺りを見回したが204号室にも監視カメラにもその視線は向かなかった。

アパートの通路で怪しい声を聞いたモオルダアはしばらく辺りを見回した。そして最後にスケアリーと目があった。「呼んだ？」

スケアリーは少し不思議な顔をして首を横に振っただけだった。「おかしい。いったい誰がボクのことをヘンタイと？」モオルダアは少し遠くにいた警察官の方を見てみたが彼は先程からずっと誰かと無線で話をしている。それにその警察官がモオルダアのことをヘンタイと呼ぶ理由がない。きっと先程のテレパシー女の件で頭が混乱しているのだろう、と考えることにした。

モニター画面を見ていたウイスキー男は相変わらず無表情ではあったが、ウイスキーのビンを口に運ぶその顔は少しだけ楽しげに見えてきた。モニター画面を見ると、モオルダアと入れ替わる感じでスケアリーが204号室の近くにやって来るのが解った。どうやら二人は特にやることもなく辺りをうろろしているようだ。

ウイスキー男はまた一口ウイスキーを飲み込むと立ち上がってクライチ君のとなりに来た。その時のウイスキー男は今度は私の番だ、と言わんばかりの表情をしていた。クライチ君はそれを見てドアの前をウイスキー男に譲った。

ウイスキー男もクライチ君がやったのと同じようにかがんでドアに顔を近づけると喋るイヌみたいな声を出した。

「スケアリー、貧乳！ ヒンニュー！」

クライチ君はソファアに座って笑いを必死にこらえながらモニター画面に映るスケアリーを見ていた。

モオルダア同様に、どこからともなく聞こえてきた声に驚いたスケアリーは辺りを見回した。そしてモオルダアの姿を見つけると彼に聞いた。

「ちよいとモオルダア！ あなた何かおっしやいました？」

急に聞かれたモオルダアは少し驚いてはいたが「別に何も…」と言うモオルダアに怪しいところはあまりなかった。スケアリーはさらに辺りを見回して、またモオルダア同様に少し遠くにいる警察官の姿を見つけたが、彼はまだ無線で誰かと話を続けていた。スケアリーは無意識に羽織っていたコートの前のボタンをかけ始めていた。

スケアリーは考えを整理するかのよう一度視線を下に向けてから、顔を上げるともう一度モオルダアに聞いた。「ちよいとモオルダア！ もしかしてあなた、さっきあたくしに関することを思ったりいたしました？」

「キミに関して？ さあ、別に…」

モオルダアがそう言ってもスケアリーは何か気がなっているようで、モオルダアに近づいていった。

「あたくし、先程の人の心が読める女性のことで少しあなたに聞きたいことがあるんですけども。あなたは、ああいったエスパーのような能力が他人に感染したりすることがあると思います？」

スケアリーは他の誰にも聞かれないように小さな声でモオルダアに聞いてみた。モオルダアはスケアリーからこんな質問をされるとは思ってもみなかったので少し困惑していたが、それ以上にこのタイミングでこんな質問をされることに驚いていたのだ。

「実はボクも今そんなことを考えていたんだけどね。でも、もし人の心を読める能力が感染することがあるとしたら、そこら中で大げんかが始まって、それが暴動に発展して、そのうち人類は滅亡しかねないよ。ただし、強力な能力を持った超能力者に出会ったことによって、本人が気付かなかった能力が開花してしまうとか、そういう可能性も考慮すべきだよね」

モオルダアは否定も肯定もしていない微妙な返事を返してきた。どうやら二人とも、他人が思ったことが話していることのように聞こえてしまう超能力を身につけたのではないか、と思っているようだ。

モオルダアもスケアリーもお互いが何を言わんとしているのかなんとなく理解してきた。そして二人は向き合ったまま沈黙してしまった。ボロアパートの通路で見つめ合う二人はかなり怪しいが、二人ともお互いの考えを読もうとしているのである。

204号室でこの様子を見ていたウイスキー男とクライチ君は面白くてたまらない。無表情がウリのウイスキー男まで楽しくてにやけてしまっている。二人はドアの方へ向かうと同時にヘンな声を出した。

「ヘンタイ、モオルダア！ ヘンタイ！」

「スケアリー、貧乳！ ヒンニュー！」

アパートの通路で見つめ合っていたモオルダアとスケアリーはこの声を聞くと同時に目を丸くして驚いた。そしてお

互いが考えていることも理解したはずである。

いくらなんでも面と向かって、しかも、もしかすると人の考えが読めてしまうかも知れないと思っている二人が互いの悪口などを頭の中に思い浮かべるはずはないのだ。ここで二人はようやく怪しい204号室のことに気付いたのだろうか。ほぼ同時に歩き始めると204号室の方へと向かっていった。

ドアからモニター画面の前に戻って二人の様子を見ていたウイスキー男とクライチ君はドキドキしながら二人が何をするのかを見守っていた。

「ウワー、どうしよう。逃げる準備とかしといた方がいいんじゃないっすか？」  
「うーん、危なかったねえ」

「いやいや、ここはギリギリまでいたほうが楽しいぞ。他の部屋と違ってこの部屋のドアは蹴破ったりできないからウイスキー男までノリノリでイタズラを楽しんでいるようだ。二人が目を輝かせてモニター画面を見ると、モオールドアとスケアリーは204号室の前を通り過ぎてしまった。

「ウオー、ギリギリセーフ！」

「うーん。危なかったねえ」

真っ暗な204号室の二人は小声でハイテンションである。

さて、怪しい204号室の前を通り過ぎてしまった二人はどこへ向かっていたのだろうか？

モオールドアとスケアリーは204号室の前を通り過ぎるとその先で無線で誰かと話している警察官のところへ行った。警察官はイタズラ電話の犯人の逮捕の経過についてとか、その他の処理のことなどを話し合っていたようだったが、エフ・ビー・エルの二人がやって来たことに気付いていた無線で話すのをやめた。

「どうしました？」

警察官が聞いたが、二人の恐ろしい表情に多少戸惑っていたようだった。

「どうしましたか、じゃございませんわ！ あなたのような卑怯な性格の方は警察官をやる資格なんてございませんのよー！」

「えっ!？」

いきなりこんなことを言われた警察官は動揺の色をかくせない。

「しらばっくれても無駄だよ。エスパーとして覚醒してしまったボクらに隠し事はできないよ。もしもキミがここで我々に対しての失礼極まりない行動に謝罪するというのなら、このことは内密にしておくこともできるんだが」

警察官は二人がなんのことを話しているのかさっぱり解らない。彼はずっと真面目に今回のイタズラ電話犯逮捕に取り組んできたのだから。

「私がかミスを犯しましたか？ 私には何のことだかさっぱり…」

「ミスとか、そういう問題ではごさいませんわ！ ヘンタイとか貧乳とか、そういうことですわよ！」

この後どうなるのか、詳しく書く必要があるのかなのか。まどめてしまうと、人の考えていることが言葉になって聞こえてくるはずなのに、実際には何も聞こえてこないことに気づき、結局はペケファイルの二人がこの警察官に謝罪しなければいけなくなった、ということである。

204号室の二人は必死になって笑いをこらえていたが、笑いの発作がおさまるとようやくいつもの怪しい二人に戻った。

「我々もすぐにここから撤退しなければいけないようだな」

こう言ってウイスキー男はまたウイスキーを一口飲むとその先を続けた。

「ペケファイルの二人がこの場所を知っているだけでも危険なことだ。ここが出来た当時は周囲の街並みにも溶け込んでいて隠れ家には最適だったのだが、ここまで古くなってしまふと逆に目立ってしまうから」

「そうなんすか？ でも近所にはまだ似たような古い建物が何軒かありますよ」

「何軒か、じゃダメなんだよ。ボロアパートと言って思い浮かぶ建物の中にこのアパートが入っているようじゃ目立ちすぎなんだよ。それに、ここが特別な場所だと知らずに新たに入居してくる人間も最近では特殊な人間ばかりになっている。何故かは知らないが、あの風変わりな管理人がヘンな人間をここに集めているというウワサもあるしな。とにかくここはもうお終いだ。時間の流れとともに物事は常に変化していくのだよ。出来た時には完璧な隠れ家だったこのアパートがいつまでも完璧だとは限らない。時が来たらまた新たな完璧を作り出さなければいけないんだ。それを間違えていつまでもこの場所にこだわっているようなら、それは我々なような仕事には向いていない人間のすることだ。物事に絶対はあり得ないんだよ」

「なんか哲学的っすね」

クライチ君にそう言われると、ウイスキー男は得意げにウイスキーのピンを口元へはこんだ。

#### 4 202号室

何かに熱中するあまり間違った方向へ進んでいってしまう人間がいる。すぐにそれに気付いて正しい道に戻れたら幸いだ。この202号室の住人のようにいつまでもそれに気付かず警察に御用となってしまうのは、もう引き返すことは難しい。デマダという中年男はこの古びたアパートの一室で何を思いエフ・ビー・エルにイタズラの通報などをしてきたのだろうか。それも一日に300回以上という件数である。

202号室に入った瞬間にデマダがまともな人間でないということはすぐに解るだろう。部屋中を這い回る電気の配線は、この部屋にあるいくつもの電子機器を繋いでいる。真ん中にあるパソコンを除いてそれらの機器が何をすることもなのか、すぐに解る人は少ないだろう。

ここへイタズラ電話の証拠品を押収しに来た警察官もこの光景に戸惑っていた。その後ろには同様に戸惑っているステアリーと、興味深そうに電子機器を眺めているモオルダアの姿がある。彼らはここにいる必要がないのだが、先程のテレパシー騒動の件で外にいる警官と気まずい雰囲気になってしまったので、なんとなく202号室に入ってきたのだ。それよりもまず、イタズラ電話の犯人を捕まえるのは警察の仕事なのだからエフ・ビー・エルはこなくてもいいのだ。しかし、私がサボっていて新たな事件が起きないので、彼らはヒマをもてあましてやって来ているのだ。やって来たことよって一応面白いことにはなっているのだが。まあ、そんなことはどうでもいいのだ。

「これ、一体何なんでしょうかねえ？」

前にいた警察官は振り向いてエフ・ビー・エルの二人に聞いた。自分よりもこの二人の方がこういうものに詳しいとでも思ったのだろうか。少なくともモオルダアは自分の方が詳しいと思いきんんでいる。

「動かしてみれば、何をやるものかはずぐにわかるさ」

何を根拠にそんなことを言うのか知らないが、モオルダアはそこにある機器のなかでも一番使い方がわかりやすそうなパソコンの前に進み出た。きっとモオルダアはこれらの機械を触ってみたくて仕方がなかったに違いない。

モオルダアがパソコンのマウスを動かすとそれまで真っ暗だったモニタが点いた。てっきり電源が入っていないと



思っていたモオルダアは少し驚いていたが、周りには悟られないように黙って画面を見ていた。画面には「OK」と「キャンセル」と書かれたボタンを表示するウィンドウが映っているだけだった。

スケアリーが何かやらかしそうなモオルダアの様子を見て心配そうにモオルダアのとなりにやって来た。「OK」と「キャンセル」のボタンがある場合、慎重な人間は「キャンセル」を選ぶ。そうでない人間とモオルダアは「OK」を選ぶ。スケアリーは何が起こるかをよく考えたうえでボタンをクリックするように言おうとしたのだが、もうすでにモオルダアは「OK」をクリックしていた。

「ちよいと、モオルダア！」

スケアリーが言ったのはそれだけだった。

もしかしてまずいことをしてしまったのか？ とモオルダアがツバを飲み込んだすぐあとに、プッシュ回線で電話をかける時の音が聞こえてきた。

「なんだ、インターネットに接続しただけだよ」

モオルダアは気楽に言ったがスケアリーはそうは思っていないらしい。

「あなた、これだけの設備を揃える人が今時電話回線でインターネットなんか……」

スケアリーが最後まで言う前にどこかに電話がつながり呼び出し音が聞こえてきた。それが二回も聞こえてこないうちに相手は電話に出た。

「お電話ありがとうございます、エフ・ビー・エル電話相談室です」

どうやら、電話はエフ・ビー・エルにつながったらしい。モオルダアもスケアリーも知らなかったが、エフ・ビー・エルに何かの事件を通報するところやってピザ屋の出勤を頼む時みたいに気楽な対応をされるのだろう。それよりも、この電話はどうやって会話をするのだろうか？ このままでは電話に出たエフ・ビー・エルの職員にも失礼だ。そう思ってモオルダアとスケアリーがあちこちを見回していると、先程まで電話相談室にいるエフ・ビー・エル職員の声が聞こえていたスピーカーから彼らの知らない声が聞こえてきた。

「もしもし、大変です！ UFOです。UFOを見たんです！」

どうやらその声はパソコンで再生されているらしい。それを聞くなり電話の向こうのエフ・ビー・エル職員はウンザリした感じで答えた。

「またあなたですか。もういい加減にしてくださいよ。もう警察にも通報してますからね。これは脅しじゃないですよ。」

もうすぐあなたのところに警察が行ってあなたは逮捕されますから！」

このエフ・ビー・エル職員言葉にこのパソコンはどうやって答えるのだろうか。一同、少なからず期待していたように黙って次の言葉を待った。ちよつとした間の悪い沈黙の後、スピーカーから言葉が発せられた。

「ハイ」

それだけ言うと言話が切れた。一同右肩をちよつとだけ下に傾けて軽くズッコケた。

どうやら、このパソコンは最初に電話をかけてこちらの用件を伝えると、その後には相手の返事を待ち、それが終わると「ハイ」と言つて電話を切る、という動作を繰り返しているらしい。モニター画面には「次の通話まであと2分30秒」と表示されている。このプログラムを動かし続けていたら、一日に300件以上のイタズラ通報をすることも容易であらう。

それはそうと、モオルダアは次の通話まであと少しになっているのにプログラムを終了できないので焦っていた。それを見ていたスケアリーはパソコンから伸びている電話線を見つけるとそれを壁の端子から抜いた。

「これで、デマダがイタズラ電話の犯人だという証拠はそろいましたわ。早くこれを押収してくださいませんかしら？」

エフ・ビー・エル主導の捜査でもないのにスケアリーが警官達に指示している。警官達は気に入らない様子だったが、これまでの経過からこの二人は一筋縄ではない人間だということが解つてきていたので、なにも言わずにパソコンやその他の機器の押収にとりかかった。

こんな風に多少威圧的な態度で人に指示をするスケアリーは大抵の場合イライラしている。

「あたくし、こういう陰険な人間って一番嫌いですわ！」

ここは事を荒立てないためにもモオルダアは「そうだね」と同意するべきなのだが、モオルダアには違う意見があるようだ。スケアリーの苛立ち加減も気にせず別意見を言う時のモオルダアは大抵の場合、自信たっぷりなのである。

「まあ、そんなに忌み嫌うことはないじゃないか。このデマダという人はただ狼少年になりたかっただけだよ」

また始まりましたわ、とスケアリーは内心で思っていた。モオルダアがこういう意味不明の例えをする時には必ず怪しい話が始まるのだ。

モオルダアはこの部屋の中の電子機器を眺めるのに飽きたのか、今では壁の一面を上から下まで覆い隠している本棚の前にいて、そこにある本を眺めていた。UFO、超能力、オカルト、心霊現象などモオルダアの興味を惹くのに十分な内容の本ばかりである。

「ちよいと、モオルダア。その狼少年というのはどういふことですか？ あれは嘘ばかりついていると、そのうち誰からも信じてもらえなくなってしまう、という話なんですのよ！」

モオルダアがもったいぶった感じなのでスケアリーがたまりかねて聞いた。

「それは、あの話の教訓の一部だよ」

「一部って、どういうことですか？」

「あの話には別の教訓もあるんだぜ」

「だぜ、ってなんですか。なんかムカつきますわ！」

スケアリーに睨みつけられてキザな喋り方をしたことを少し後悔したモオルダアだったか、気を取り直して話し始めた。

「あの話のもう一つの教訓は、嘘と解ついても何度も言っているうちにその嘘が現実のものになってしまう、ということなんだよ」

「そんなこと誰が考えたんですか？ 全然説得力がありませんわ！」

誰、といわれても考えたのはモオルダアであるのだが、説得力がないといわれてモオルダアはちょっと傷ついていた。でもここでさらに気を取り直してモオルダアは先を続ける。

「でも、デマダがどういった動機でイタズラ電話をかけてきたかを説明するには、これは説得力のある例えだと思うけどね。あんな装置まで使つて一日に何度も嘘の通報をしてきたんだ。普通そういうイタズラ電話をする人というのは孤独感とかそういう寂しさみたいなものから逃れるためにイタズラ電話で人の声を聞いて安心したりするもんだよね。でもデマダはそうではなかった。全ての電話は自動的に発信されていたんだから」

「エフ・ビー・エルに何か恨みを抱いての犯行かも知れませんか」

「これだけの装置を作れる人間がイタズラ電話で復讐するとは思えないけどねえ。ここにある本を見るとデマダはどうしてもU F Oが見たかったんじゃないかなあ？」

「そうですね。それじゃあ、捕まってしまったからデマダはU F Oを見ることが出来ませんか。でも、それが正しいのならあなたはそろそろU F Oを見てもいい頃ですわね。オホホホ……」

これ以上議論をしても無駄だと思つてきたスケアリーは嘘笑いで話を終わらせてしまった。モオルダアはいまいち納得いかなかったのだがそれよりも面白そうなものを見つけてしまったので、そこを気にしている場合ではなくなっていた。

モオルダアの目の前の壁一面を覆っている本棚の下から怪しげなコードが一本、部屋の中の方へ伸びているのであ

る。そのコードを辿っていくとそれは先程のパソコンが置かれていた机の下に続いていた。

モオルダアが屈んで机の下を覗き込むと天板の裏側に押しボタンを見つけた。こんな謎めいたボタンは何かの非常時に押すボタンに違いない。まともな人間ならよく調べもせずには押しつけないのだが、そうでない人間とモオルダアは見たらすぐに押ししてしまう。

「ちよいとモオルダア、何を…」

スケアリーが最後まで言う前に彼女の背後でガタンという大きな音がした。振り向くと壁一面を覆っていた本棚の右半分が自動的に移動して左半分と重なった状態になった。その後ろには謎めいた隠し部屋が。

モオルダアはこの思わぬ展開に胸を躍らせて、その隠し部屋に向かった。しかし、その隠し部屋に入った瞬間にモオルダアの期待は一気にしぼんでしまった。そこは隠し部屋というより、真ん中の仕切りを取り払った押入だったのである。

「なんだ、秘密基地ごっこか…」

そういいながらモオルダアは押入の右半分から明かりの届かない左半分の方へ入っていった。モオルダアの姿が本棚の後ろに消えると同時にモオルダアの「ヒヤッ!」という情けない悲鳴が聞こえてきた。

「ちよいとモオルダア、どういたしましたの?」

スケアリーが押入の中を覗くと、そこにモオルダアの姿はなかった。

## 5 101号室

「ちよいと、モオルダア! どういたしましたの? モオルダア!」

スケアリーは一瞬にして手品のように姿を消したモオルダアを探して大きな声でモオルダアを呼んでいた。

「ああ…、スケアリー。ボクはどうなってしまったんだ? もしかして異次元空間に迷い込んでしまったのか? キミの声は聞こえるのに姿は見えないし、ここがどこか解らない」

モオルダアのくぐもった声がどこからともなく聞こえてきた。スケアリーはゾツとして押入の中を凝視した。しばらくスケアリーが押入の中の暗がりを見つめていると次第に目が慣れてきた。どうやら押入の中の暗い半分の床には穴が空いているようだった。モオルダアはその穴にはまったのだろう。スケアリーはそれを見て少しニンマリしてから言った。

「モオルダア。もしかすると大変なことになったかも知れませんか！ この押入の中には異次元への扉があるみたいですよ！」

「なんだって?! するとこの地面が本だらけみたいの世界はやっぱり…」  
良く注意して聞いてみるとモオルダアの声は下の階から聞こえてくる。

「そうかも知れませんか。それよりもモオルダア。あなたもしかして体に痛いところとかはありませんの？ あたくしはそれが心配ですわ」

「さあ、特にないけど。この世界の地面は雑誌をばらまいたような感じなんだけど、その下はすごくフワフワしてるんだよね。だからボクは異次元空間に放り込まれた時の衝撃でケガをすることもなかったようだ。それよりも、ボクはこの異次元空間からどうやって帰ったらいいんだ？ まさかこのまま…」

「心配いりませんわ！ あたくしが最新技術を駆使してあなたをそこから救い出してさしあげますわ！」

スケアリーはモオルダアがホントに異次元空間に入り込んでしまったと思っていたのが面白くて仕方なかったが、そろそろ本当のことを教えるべきかとも思っていた。

スケアリーが振り返るとそこには警察官が不思議な顔をして立っていた。

「何か問題がありましたか？」

スケアリーはニヤニヤしていたのを悟られないように真面目な表情を作ると警察官の質問に答えた。

「このアパートには少しおかしいところがありますわ。あなたちよつと一階にいる管理人に事情を聞いて来てくださるかしら？」

「はあ」

スケアリーの簡単な説明だけで理解できたのかどうかは解らないが警察官は言われたとおり一階の管理人のところへ行ったようだった。それよりもモオルダアを異次元空間から救わなくてはいけない。スケアリーは辺りを見回すと押入のすぐそばに懐中電灯が都合良く転がっていた。彼女はそれを拾い上げてスイッチを入れると押入の中に入ってしまった。

懐中電灯に照らされて押入の中が明るくなると、床に空いた穴がよく見える。それは建物の老朽化によって空いた穴ではなく人によって作られたもののように、綺麗な円形の穴になっている。スケアリーは慎重に穴に近づくと、懐中電灯の光を穴の中に向けた。穴の中に簡単なハシゴがあるのが解った。その先にモオルダアの眩しそうな顔が浮かび上がる。

「光だ！ スケアリー、光が見えてきたぞ。まさかこれは死後の世界へ入る時に見る光なのか！？」

モオルダアはまだ自分の状況を理解していないようだった。光の向こうにいるスケアリーの姿は眩しくて見えていないようだ。

「モオルダア、心配いりませんわ。これは希望の光ですよ！」

スケアリーは吹き出さずに言うのに苦労していた。モオルダアは怯えた感じで聞いてきた。

「どういうことだ？ その光を辿ればボクは元の世界へ帰れるということか？」

「もう、いい加減に気付きなさい。あなたは最初から異次元空間になんて行ってなかったんですよ」

そう言うとスケアリーは懐中電灯を反対に向けて下から自分の顔を照らした。

「キヤー、出たあ！ 怪物だあ！」

下から光をあてられたスケアリーの顔が突然現れたことに驚いてモオルダアはまずいことを言ってしまった。それまで楽しそうだったスケアリーの表情が一気に曇っていきモオルダアを睨んでいた。

「どうでもいいですから早く上がってきなさい！」

そう言いながらスケアリーは穴の中に懐中電灯を投げた。スケアリーの手を放れた懐中電灯は危うくモオルダアの頭にぶつかるところだった。「ヒヤッ！」とモオルダアのヘンな悲鳴が聞こえたがスケアリーは気にも留めていなかった。

モオルダアが懐中電灯を拾って自分の周りを照らしてみた。

「どうやらここも押入みたいだな」

「そうですね。どの部屋も同じ作りのアパートなんですから、そこは一階の押入に違いありませんわ」

「そしてボクの下にはエロ本だらけ」

「あら、そうですね。それならずとそこにいればいいんじゃないんですの？」

「そうは言ってもねえ。ここにあるのはボクの趣味にはちょっと合わないグロい感じのエロ本だからね。キミは知らないかも知れないけど、エロ本にも色々種類があって……」

「あたくしはそういう意味で言ったんじゃないんですよ！ どうでもいいから早く上がってきなさい！」

本来ならば押入に空けられている奇妙な穴に関して考えるところだが、二人の会話はあらぬ方向へと進んでいた。そこへ突然、先程の警察官が駆け込んできた。

「たっ、たっ、大変だー！」

「どっ、どっ、どういたしましたの？」

警察官につられてスケアリーも慌てた感じを出している。

「しっ、しっ、死体が！」

「なっ、なっ、なんだって!？」

穴から半分だけ体を出したところだったモオルダアも慌てた感じで反応している。

「かっ、かっ、管理人の部屋に、おっ、おっ、女の死体が！」

「そっ、そっ、それはいい……」

さっ、さっ、最後の言葉は誰が言ったことにするか考えるのが面倒だから各自で想像してください！

気の抜けた感じだったアパートは、今では死体発見によって張りつめた空気が流れている。一階には101号室しかない。元々は二階と同様に四つの部屋に別れていたのかも知れないが、入居者が少なくなつたため各部屋をつなげて、さらに中の壁を取り払って101号室という大きな部屋になるように改築されたようだ。101号室の住人はこのアパートの管理人である。元は大屋が住んでいたということだが、大屋は別の場所に新しい家を建てて引っ越してしまつたので代わりに管理人がこの広い101号室に棲んでいるということだ。管理人はこのアパート同様にくたびれた感じのする初老の男性だった。

デマダを逮捕する時には鍵を持って202号室のドアを開けた管理人だったが、あの後いつの間にか姿をくらましたようで、警察官が101号室に死体を発見した時にはそこにいなかったということだ。

モオルダアとスケアリーが101号室に入るとまず目に入ったのは先にこの部屋に入ってきていた数人の警官の姿だった。愕然と立ちつくす彼らを見てモオルダアは少し尻込みした。彼らの状態から察するにそこにはひどい状態の死体が横たわっているに違いないのだ。一方スケアリーは死体と聞いたらなにがなんでも解剖してみたいという人間なので警官達を掻き分けて前に出ていった。

「まあ、なんですのこれは？」

スケアリーはこういうのを聞いてモオルダアはその死体が異常な状態であることが解つた。となると異常すぎてモオル

ダアにもあまり恐くない死体の可能性があるということだ。モオルダアは勇気を出してスケアリーと同様に警官を掻き分けて彼らの前に出た。しかし、死体を目にするモオルダアは先にそこにいたスケアリーと、さらには他の警官達と同じように愕然とするしかなかった。

その死体はあまりにも美しかった。人間離れした美しさという表現が正しいかどうかは解らない。死体ならばもうすでに人間ではないのだから。しかし、その死体の肌は生きている人間よりもみずみずしく、透き通っていた。それでいてその色は青白く、そして体中に蛆が這い回っているのだ。

「こっ、こっ、これはどういうことなんですか？」

こう聞いたのは先程死体の発見をエフ・ビー・エルの二人に報告しにきた警官である。二人は、もっ、もっ、もうそろそろそんな喋り方はやめてくれと思っていた。エフ・ビー・エルはなんとなくそこに横たわっている物が何なのかの検討はついていたのである。

モオルダアとスケアリーがお互いを見てどちらが説明をするのかを無言のうちに打ち合わせていると101号室の玄関から怒鳴る声が聞こえてきた。

「これはどういうことだ！ 勝手に人の家に入り込みやがって！ いくら警察だからってそんなところまで許されないことはわしだって知っておるぞ！」

そこにいた全員が驚いて振り返ると、そこにはコンビニの袋を持った管理人が顔を真っ赤にして立っていた。それを見た警官の一人が言った。

「そう言われても、部屋に死体があるのを知って私達が黙っているワケにもいかないでしょう」

管理人は何を言われたのか理解できないような感じで少しの間首をかしげて考えていたが、その間にまた勝手に自分の家に無断で入ってきた警官達に腹が立ってきたようで、何かを怒鳴ろうという感じで息を大きく吸い込んだ。それを見たスケアリーがそれを静止するように言った。

「どうやら、これはあたくし達の早合点ということらしいですね。ここにあるこのグロテスクな人形はあなたが作ったものですか？」

人形と聞いて警官達はさらに驚いている。もしかするとスケアリーが管理人を刺激しないためについた嘘なのではないかと思うものもいた。管理人はその言葉に満足げな表情を浮かべている。

「人形という表現は少し違うんだけどねえ。それはまだ未完成なんだ。本当はその死体のかたわらに哀れな兄妹の人形



も作らないといけないんだ」

管理人が言うのを聞いて、警官の一人が驚いている。

「すると、それは本物の遺体じゃなくて人形なんですか？」

「だから、人形じゃないと言っているだろ。これは、すぐその病院のある坂道で昔実際に起きたおぞましい事件を再現するものなんだよ」

管理人は少しあきれたように警官に説明した。

「つまりジオラマってことだね」

モオルダアは管理人がこの人形ではない何かを説明するための言葉を知らないようなのでジオラマという言葉を出してみた。

「そう、それだよ」

管理人とモオルダアだけはすごくスッキリした表情になったのに他の人たちはあまり納得できていないようだった。とにかく、ここに横たわっているのが人間の死体ではなくて人形だということが解ったので、全員とりあえずは安心したという感じではある。

「それにしても、あなたはこんなリアルな人間の死体を作れるのに、どうしてアパートの管理人なんてしていらっしやるの？ これだけの技術があればもっといい仕事がある…」

スケアリーが思ったことを率直に管理人に聞いてみた。

「まあ、その辺は運命というやつだよ。私だって五十を過ぎてからこんな才能に目覚めるとは思わなかったからね。グフツ、グフツ」

そう言いながら管理人はシャックリのような笑い声を上げてスケアリーに顔を向けた。スケアリーはちよつと気味が悪いと思った。スケアリーのそんな反応も気にせず管理人は死体人形のところへ近づくと、人形についている蛆虫をつまんでスケアリーの目の前に持ってきた。もちろんそれも模型の蛆虫であるのだが、その精巧な作りにスケアリーは眉をひそめた。

「この蛆がミソなんだよねえ。これはデンプンを固めて作ったものだから食べても平気なんだよ。つまりこれを食べたから実際の事件がそのまま再現できるというわけだ！」

そう言いながら、管理人は模型の蛆虫を口に入れるとスケアリーに見えるようにわざと口を開けたままその蛆虫をかみ

潰した。

「アンタも食べてみる？」

口からこぼれた蛆虫の模型のカスを唇の端に付けたまま管理人はスケアリーに聞いた。スケアリーは鳥肌をたてながらクビを横に振っただけだった。それと同時に、そろそろモオルダアに何とかしてもらいたいと思っただけの姿を探していた。モオルダアは死体の人形にはもうすでに興味がないらしく、奥の部屋で何かを調べていた。

「ちよいと、モオルダア！」

スケアリーに呼ばれと、そろそろ出番かな、という感じでモオルダアが振り返った。

ここでは謎めいた事件も起きていないし、異常な遺体が転がっていることもないと解ったので、モオルダアが興味を示すようなところはあと一つしか残されていない。モオルダアはとなりの部屋の押入の前に立っていた。その中は先程モオルダアが二階から落ちた場所に違いないところである。

「管理人さん。そんな食べられる蛆虫よりも、ボクはこれについての説明が聞きたいんだが」

そう言っ、モオルダアは目の前の押入を勢いよく開けた。先程モオルダアがそこに落ちた衝撃で押入の中の布団の上に積んであったエロ本は不安定になっていたので、モオルダアが押入の戸を開けるとエロ本の山が崩れ落ちてきた。

「うわあ、何をやるんだ！ 勝手に人の家の押入を空けるとは！」

管理人は慌ててモオルダアの空けた押入の方へ走って行ったが、今さらこのエロ本の山を隠すことも出来ないの、走って行ったは良いが何も出来ないまま不自然な感じでモオルダアを睨んでいた。

「こっ、こっ、これがなんだというんだ！ 売っているものを買って何が悪い。中には今の法律では問題があるものもあるかも知れないが、それだって昔は許されていたんだ！」

モオルダアは必死になる管理人のいうことを聞きながら「問題があるもの」というのがどれなのか気になってしまったが、ホントに彼が聞きたかったのはエロ本の山のことではなくて、押入の天井に空いた穴のことだった。

「それはどうでも良いんですよ。それよりも管理人さん。この天井の穴はなんなんですか？」

エロ本が問題ではないと解った管理人は少し間が悪そうだったが、なんとか気を取り直して話し始めた。

「ああ、その穴か。私も良くわからないのだがねえ、なんでも非常階段の代わりとかいうことだが。このアパートが建てられた時からずっとあるって話だよ」

それを聞いていたスケアリーがすかさず割り込んだ。

「それはおかしな話じゃございませんこと？ どうして非常階段が押入の中にあるんですの？ それにこの穴は全ての部屋にあるんでございませう？ 二階には若くて綺麗な女性も住んでいらっしやるのよ。そんな女性の部屋とあなたみたいなエロ本管理人の部屋がつながっているなんて異常ですわ！」

管理人はエロ本管理人ってどういうことだ？ と思っていたが、この状況では反論のしようがないのでそこは気にしないことにした。

「それは大丈夫ですよ。ここに来る入居者にはそのことは全部伝えてあるから。それに203号室のお嬢さんは私が説明する前から押入の穴に板を打ち付けて塞いでしまっていたからねえ。あの女はどうにも気味が悪いな」

「それは管理人さんが人の裸を想像したりするからいけないですよ」

モオルダアがにやけながら言ったが管理人にはその意味が良く解っていないようだった。自分同様にうろたえろと思っていたのに、この反応にモオルダアは少しガツカリしていた。

「でも、先程逮捕されたデマダはこの非常階段を積極的に利用していたみたいですよ」

ガツカリしたモオルダアに代わってスケアリーが言った。

「とうとうと？」

「デマダはこの非常階段の先にあなたのエロ本コレクションがあることを知って密かにあなたの部屋の押入にやって来てた可能性があるんですよ」

スケアリーのこの考えにモオルダアも同じ意見だった。秘密基地のように本棚の後ろに隠された秘密の入り口。そこにはさらなる秘密があるに違いないのだ。このマニアックなエロ本のような。

「ああ、なんだ。そのことか」

管理人が驚くと思っていたモオルダアとスケアリーは彼の意外な反応に驚いた。

「ヤツとは趣味が合ってねえ。始めはお互いに警戒しあっていたけど、ある日ヤツが私の部屋にあるエロ本を見つけたということ話を私に話してきたんだ。その時はもちろん腹が立ったが、話しているうちにお互いの共通点に気付いてねえ。それで、私はその押入を共有することにしたんだよ。私のコレクションとヤツのコレクション。まるで夢のようじゃないか。しかもヤツがバカなことをして捕まってしまったから、これからは私が全てを独り占めだよ。グフフフッ」

話を聞いていたモオルダアとスケアリーの間を妙な空気が流れていった。

結局何も起きなかったのか。多分モオルダアとスケアリーにとっては何も起きていないも同然なのだ。しかし、彼らの知らないところでは何かが起きている。101号室での遺体騒動の最中に204号室にいたウィスキー男とクライチ君は押入の非常階段を通じて密かに脱出していったのだ。もちろん特殊部隊の活躍で204号室にあったモニタや通路の監視カメラなども全て取り払われているのだ。そのために、この後モオルダアとスケアリーが「念のため」ということで行った各部屋の押入にある非常階段の点検をした時に204号室はもぬけのから、ということだったのである。誰にも気付かれずに闇の組織の隠れ家となっていたこのアパートは誰にも気付かれずにその役目を終えたのである。

「なんだか、あたくし今日一日を無駄に過ごした気がしますわ」

アパートから引き上げるために車のところへきたスケアリーは機嫌が悪かった。モオルダアも同じような心境だったが、特に何も言わずに車に乗ろうとしていた。しかし、車に乗る前に何かの異変に気付いたようだ。ポケットの中に財布が入っていない。いつでも小銭だらけで重たい財布を持ち歩いているモオルダアなので、財布がなくなると妙に体が軽くてそこに気付くのである。

「あれ、財布がない」

間の抜けた感じで言うモオルダアを見てスケアリーはさらに機嫌が悪くなったようだ。

「きつと、さっきの押入で落としたんだな。ちよつと探してくるから待ってて」

そう言ってモオルダアはアパートの方へ戻っていった。

管理人は迷惑そうにモオルダアを部屋の中に入れた。どうやら財布は押入の中のエロ本の奥に見つかったらしく、しばらくするとモオルダアは安心した表情で外に出てきた。モオルダアは振り返って管理人に挨拶しようと思ったがそれよりも先に管理人は大きな音を立てて扉を閉めた。そこまで嫌われる理由もないのになあ、と思いつながらモオルダアが天を仰いだその時だった。

モオルダアはアパートの上空に驚くべきものを発見したのだ。アパートの屋根のすぐ上にその建物の二倍以上もありそうな大きな円盤が音もなく浮かんでいたのである。円盤の周囲には点滅するライトが配置しており、それが一つずつ順番に点滅を繰り返して、光が円盤の外側を回っているように見えていた。

モオルダアは腰を抜かして、ついでにアゴもはずれた。しばらく何も出来ぬまま上空の巨大な円盤をただ見つめてい

たモオルダアだが、全ての意識を集中させてやっこのことで声を出すことが出来た。

「スッ、スッ、スケアリー！ たっ、たっ、大変だ！」

驚きのあまりほとんど声にならないぐらいの大きさの声しか出なかったのだが、それはもうどうでもいいことかも知れない。不機嫌なスケアリーはもうすでに車を発進させて一人で帰っていたのだ。

モオルダアは自分の声がスケアリーに聞こえたかどうかなどは考えることも出来ずに、まだ上空の円盤を凝視していた。するとさらに驚くべきことが起こったのである。

「最後の日にキミみたいな人に会えて本当に良かった。キミに会えなかったら私の地球での滞在は本当につまらないものだった。地球にもキミのような人間がいると知って、私は一瞬だけでも孤独を忘れることが出来たんだ。本当にありがとう。さようなら！」

誰かがモオルダアに話しかけている。モオルダアにはその声はどこから聞こえているのかすぐにわかった。それは彼の頭の中で発せられている声なのだ。ものを考える時に聞く頭の中の自分の声であるが、それは自分の意志とは全く関係のないことを喋っている。つまりテレパシーで誰かが考えをモオルダアの頭の中に送っているのだ。おそらくは上空の円盤の中の何かが。そして、それはきっと故郷に帰ることを決意した201号室の住人である。

円盤の中の異星人である201号室の元住人は下にいるモオルダアから何かの返事があるかと思えばしばらく待っていた。しかし、彼の元へモオルダアから送られてきたものは「アワワワワッ。アワワワワッ…」という意味不明の言葉だった。

故郷の星に帰った元201号室の住人は最後に地球で受け取った「アワワワワッ。アワワワワッ…」というメッセージが何かの暗号に違いがないかと思ひ、その後の人生をその暗号の解読のためだけに費やしたというウワサである。パニックに陥った地球人が意味不明の言葉を発するということが彼の故郷で解明されたのは、彼の時代よりもずっと後になってからだということだ。

それはともかく、モオルダアは自分の目の前から巨大な円盤が一瞬にして空の彼方へ消えていったあともしばらく、いくつかの星が寂しく瞬く夜空を眺めていた。それからふと我に返ると「今日体験した全ての不可思議なことは全て自分の思いこみに違いない」と自分に言い聞かせた。超能力にUFOにエロ本に、こんなに都合良く一つの場所で遭遇できるわけなどないのだ。（モオルダアは気付いていないが、ついでに闇の組織の隠れ家も。）「もつとしっかりしないと」とモオルダアは小さくつぶやいてスケアリーの車のところへ歩き出した。そこにはもうスケアリーの車はないのだが。

#016 「トルメン」 Little Mustapha

## あとがき

シーズン2縦書きPDF版の2巻目のあとがきですが、その前になんで複数に分けているのか、という本物の方（「the X-Files」）のDVDボックスを意識して作られているからです。DVDボックスだとディスク一枚に4話収録なので、こっちも1話ごとでもなくて全話収録でもないのです。ただエピソード数が少ないので3話ずつになっていますが。

いきなり関係ないことを書いてしまいましたが、この第二巻は問題が多い内容だったりします。まずは本物の方に合わせようということでクライチ君を登場させることになった「マキシマム・ビューティー」ですが。

クライチ君とは本物の方でのクライチエックという人にあたります。彼がモオルダア捜査官と一緒に捜査をするためにはスケアリー捜査官がいなくなるといけないので、半ば強引に失踪することになったスケアリー捜査官。本物の方では「空からやって来た何か」に誘拐されたのですが、こっちでは自ら進んでいなくなったり。そのために後々、本物の方のパロディーをやる時に矛盾が生じる事になります。

ただ、その辺の矛盾もネタとしては面白いのですが。あんまりネタの面白さばかりを追求すると意外と奥深かったりするthe Peke-Filesの世界観が台無しになることもありますし、気をつけないといけません。

つづいて余計な事をしなければ面白いかも知れなかった「GONE」です。Little Mustapha's Black-holeの別コーナー「Black-hole」と連動した話ということになっていて、良く解らない部分が多くなっています。

しかし、連動企画じゃなければあの話のアイディアはなかったかも知れません。「マキシマム・ビューティー」でもそうでしたが、必要に応じて物語を考えるといつもとは違うアイディアが出てきたりするのも知れませんが。

そして、最後はふざけすぎた「アパートメント」。宇宙人やUFOが実際に登場してしまっているのに、それに関してはほとんど盛り上がりがないというところが、自分としてはちょっと好きだったりします。「色々あったけど結局何もなかったのと同じ事」というのはthe Peke-Filesの理念みたいなもので「アパートメント」はそういうものを集約した話と考えるのも良いかと思います。そして、これからはもっとヒドくなるに違いない。

## 著者について？

名前 Little Mustapha

経歴 なぜか名前は縦書きでもアルファベット表記のままである。最初はそうではなかったのだが、いつの間にか常にアルファベットで書くという決まりが出来てしまったので、カタカナで表記されることはない。この頑固さがいろんなところで災いしていることには気付いているのだが、なかなかそこを変える事が出来ない。よく言えば「こだわり」で、悪くいえば「頭が硬い」ということだが。その前にこれは全然「経歴」になっていない。

ホームページ Little Mustapha's Black-hole (<http://bit.ly/1NUEZQ5>)

コンタクト [little.mstph@gmail.com](mailto:little.mstph@gmail.com)